時、備中寶福寺の立巖久公に從ひ得度す、十七歳のとき大いに悟るところあり、艱難苦行遍く天下の名僧を尋ね二十八歳寶福寺に歸省し、宗門の隆盛を計る。後江戸に行き或ひは東福寺に講じ又は鎌倉に遊ぶ等大いに斯道に努力す、享保十八年七月十二日寂す、行年六十二、勅して佛眼大觀禪師の諡號を賜ふ。

圓　珍

（智證大師を見られよ）

慧　關

名慧關　文化頃西讃僧、○詩作す。

惠　賢

名惠賢、明和安永頃高松僧、○漢學を修む、齊門姓名錄にあり。

僧　惠　周

小豆郡二生村の人、文久二年北浦村見目に生れ寶生院の弟子となる、後ち江戸に遊び長州檜邸の祈願所戒範律師に隨從して佛學を修め、又服部氏の塾に通學して漢籍を涉獵し、造詣最も深きに至る。弘化四年誓願寺住職となる、人と爲り剛毅嚴格にして堅く佛戒を守り德行あり、法務の傍ら村内の子弟を敎養して諄々倦まず門生にして鄕閭に頭角を現はしたるもの尠からず、安政の頃より深く築山の趣味に耽り寢するに横臥せず端座して假睡し、覺れば石を撥ふの工夫を運らし殆んど晝夜の別なきこと十數年遂に巨岩を蒐集して壯大なる石山を築き以て同寺の景趣をして一段の光彩を添へしむるに至る。加之て或は自由井を掘りて公衆の飲料水を供託し、或は獨力を以て一部の村道を改修して往來の便を圖る等、公共の爲め幾多の力を盡し嘗て一點の私慾あるなし、明治五年三月廿一日病を以て遷化す、時に年五十有四。（小豆郡史）

江　口　春　帆

名洵直、字仲侯、通稱八十郎、高松人、○著書、陽羨名陶錄、芥子園畫傳注釋集あり、書法を漆谷に受け、細楷に長ず又畫論を研究し、畫徵錄、芥子園畫傳を注釋す、曾て本藩國史編輯館員となる、詩文も能す、明治六年九月歿す、年六十。

江　川　玄　好

名玄好、高松藩士。○歌を能す、寛永頃の人といふ、○霞、朝夕の眞柴の烟立ちわかで霞に籠る春の山里

江村宗珉

名宗珉、字友石、號剛齋又全庵、京都人、江村專齋の子なり、○靑山侯に仕ふ、讃人ならねど生駒松平の間當國に來り、讃州歷覽志を著せるを以て此處に附す、萬治四年沒す、年五十四。

江良屋山

名完輔、號屋山、又白雲深處主人、本他縣人なりけむ、屋島の下に住し後高松に住す○性遊歷を好み、書畫を嗜む、山水竹石等佳なり、明治三十年六月歿す、年六十七。

永德屋政藏

は三豊郡和田濱の人、ジンキ(綿繰)及砂糖製造業を爲す、夙に讃岐及東豫に於ける勤王の士と交り深く、又常に刀劍書畫を嗜み丸龜藩士と往來し、或は中山左門（阿州劍客）に劍道を學びたりして、陰に勤王家を保護せし事多かりしと。

危機一發、宣嘉卿を助く

會々文久三年澤宣嘉卿等但馬生野に於て義兵を擧げしも、武運拙なく一敗地に塗みれ四國の地を指して遁れ、時恰も文久三年十月十九日の夜從士高橋甲太郎を召連れ來りし時、右兩人を自家の綿倉へ潛ましめ種々手厚き庇護を加へ二氏を無事に伊豫蕪崎なる三木左三方へ脫れしめたり、其時卿は荷物かたぎに從者高橋が主人に變裝しゐたり因に高橋は出石藩士にして後從五位を贈らる。

其時卿が矢立を以て小半紙に田舍漢が荷擔者をつれ旅行してる、スケッチを畫かれ上に左の題詞があり、此スケッチ今尙ほ政藏の遺子平山陟の家にあり。

蝙蝠や畫はいづこがすみかやら、夜あるきのはらへり、あしはわらぢくひ
露の身の、置所なき浮世ぞと、ちよふちん持て。兩人ぶらつく
股くゞり、野山にふして、世を忍ぶ、あれもかんしん、これもかんしん

前記の文を見ると其當時の勤王家が苦心慘憺を極めし跡がほのみへて、同情の念に堪へぬ次第である。

維新後政藏は明治四年より同十二年迄郵便取扱人を勤め居りしが、同十九年舊十二月十九日歿す、年六十三。

圓淨院

源襄公夫人、備前一心齋池田治政女晴姫、和歌及筆札を能くす、弘化十二年二月晦日逝去す、年六十四。

榮姫

穆公の六女松平右近將監武寛（川越藩主）の室となる、和歌を能くす、安永六年十一月十九日逝去す。

瑤洲

名曇岱、字慈叢、號瑤洲、安永九年十月志度眞覺寺住職となる、○書畫醫術圍碁等を能す、文化十二年八月晦日沒す、年六十餘才。○落欵多く曇岱とあり。

遠藤喜太郎直光

香西氏の部下にして香川郡圓座村に居れり、其戰績左の如し。

天正十年八月五日香西伊勢馬場合戰に先鋒として參加す、天正十三年五月香西を引揚げ長尾へ移る時の謀議に與る。天正十五年八月生駒正規に祿二百石を以て召抱へらる。

遠藤琴泉

號琴泉、文化頃東讃人、○畫を能す。

遠藤小畔

號小畔、文化頃東讃人、琴泉の弟なり、○畫を能す。

遠藤春嶠

名周、通稱希莊、號春嶠、香川郡圓座人、○詩文を能す、曾て豊後劉石秋來宿し相交る、○明治十八年我先人、春嶠等十餘人と神懸に遊ぶ、歸程皆船暈を患ふ、唯春○と篁山とは夷然たり。

遠藤良輔

初め輝章、晩年南洋と號す、大川郡鴨庄の人、狩野派の畫を能くす、京都に至り畫道

研鑽中文久二年九月七日歿す、年四十二。

遠藤秀庵

小豆郡大部村遠藤家八代の祖なり世々醫を以て業とす、資性溫厚幼にして穎悟神童を以て聞ゆ、長ずるに及び醫道儒學を研鑽して共に熟達せり、其患者に接するや貧富貴賤を問はず懇篤に診察し其の藥を投ずるや百發百中殆んど回春せざるものなかりき。且つ貧者には悉く施療し古人の所謂醫者仁術也を實現せり、業務の餘暇詩歌俳諧を嗜み書畫亦巧みなり。是を以て文筆家の交遊最も廣く貫名海屋藤本鐵石の如き殊に深交ありしと云ふ、山陽方外史梅谿は特に蘭馨堂の記を撰して同家の家系を記せり、安政七年春小野御殿に召されて參殿せしに祖先玄益の由緒に依りて法主に謁し、法橋官並に御許狀御祝觴御繪符御紋章付提灯等を受け大に面目を施したり。老年に至り子弟教養の任に當り多數の人材を出せりと云ふ。明治二十二年五月歿す、年七十四。

（小豆郡史）

エ號索引

英政（荒川）　瑤洲（曇岱號）　燕石（日柳）
鋭之助（松平）　瑛（窪田）　榮之（茗溪名）
榮仙（狩野）　亦癡（竹內）　樾齋（今田）
樾屋（寺井）　惠曉、慧開、永言（梶原）　永笑（狩野）
永年（中川）　圖子（井上）　惠賢、猿赤（日柳）

○テ之部

傳燈大師

守寵を見られよ

天圭長老

天圭、諱照周、父は松原玄雪、三木郡池戸村に生る、幼より好學にして穎才あり、龍嚴上人に從ひて薙髮、上人示寂後遺命により戒光寺に住せしも後東山泉涌寺の勅住となる、天圭博學多識なりければ延曆寺、園城寺、東大寺。興福寺の僧侶も就いて教を請ふもの多し、又天顏に咫尺して奉講あること屢なりしが遂に後水尾上皇より紫衣並に天圭長老の號を賜ふ、上皇崩御の時遺勅して火葬の導師を勤めしむと、寂滅の年月日詳かならず。

天倪老人

本名を安藤大心と稱し萬象道人とも號す、三豐郡財田上の村伊舍那院の住職にして詩書俳句を能くす、就中草書尤も妙なり、明治年間の人、（安藤大心を見られよ）

徹照

木聖と號す、那珂郡木徳村本正寺主、藤川三溪に學んで詩文を能くす、安政頃の人。鼎齋、月照の父（玉井宗江を見られよ）

寺井樾屋

名初寛吾後肇、字志修、諱吉利、號樾屋、高松藩士、○古典故實に通ず、又詩書畫を能す、○齋號三多齋、栗山額に書す又復古堂求古堂といふ、嘉永七年八月歿す、年六十八。著書及筆記類は多數あるが其中にて重もなるもの左の如し。

樾屋雜考二卷、甲冑聞書一卷、求古堂入門帳一卷、庚申紀聞一卷、復古堂雜記二卷
肥後國集古兵器圖證二卷、讃岐國古兵器圖證三卷、海防要錄一卷、吉謙雜集十六卷
樾屋雜錄十六卷、古錢考、兵器雜考。

寺井小樾

名謙造、號小樾、樾屋の子なり、○家學を繼ぎ亦故實に通す、○著書、兵器雜考、故

實考、細射考、丸龜制度、手網圖式、矢拵之書拔萃(軍陣鞭)本藩隨筆記等。

寺尾正長

東海と號す、名は正長、讃岐の學者、音韻學に通す、安永四年九月解經秘藏と題する音韻學書を京都幸町御池下る菱屋孫兵衛方より發行せり、尙他に字母考(二卷)用辭別(七卷)あり未刊なり、門人に羽富謙伯益あり、此人は歸命三信字訓辨、解經秘藏補開經音圖字淵等を著はせり。

寺尾筠雪

號筠雪、文化頃東讃人、○畫を能す。

寺島竹坡

名白受、字采卿、號竹坡、大內郡引田人、○文化頃畫を能す、○書譜に竹波とあり、竹坡の誤。

寺島龜石

名吉時、通稱初亦三郎後彌平、號龜石又起石、又雪松軒、又松蘿窟、香川郡伏石人、○俳を能す、天保十三年六月歿す、年八十三。著書に古今家彫秘傳書、平家物語閒書農事心得、龜石集、三都龜遊譚、月花林、叢訓鼎三足等數部あり。

手塚鷗盟

名或又光鑑、字文哉、號鹿溪又鷗盟、又老顚、高松侯侍醫、元鶴羽の人、○畫初竹石に學び又藍田叔に倣ふ、山水花卉淡雅なり、天保四年六月歿す、年六十。○書畫集覽に出づ、○牢村集に家鹿溪とあり、此人なり、○春晴出遊、隔水靑山雨始晴。村村桑柘午雞聲。差科未起人相樂。身似桃花源裏行。

蝶濤

安永頃香川郡一の宮の俳人、麥浪の門人なり。

麥浪先師七とせの忌に
波たへて水の臺や居待月

田水

高松の俳人、明治初年頃白鳥紀行の著あり。

テ號索引

天笠浪人（平賀）
梶齋（長谷川）
傳（蕙崖事）
天愚（妹尾）
定規（富山）
哲松（松平）
恬齋（片山）
定靜（富山）
貞堅（鎌田）
惕所（菊地）
迪齋（河田）
傳兵衛（青葉）
田夫（漆谷字）
鐵心心史（十河）
傳八（鮎川）
鼎（森）
天然畫仙（細川）
貞世（藤川）
貞富（藤川）
貞幹（宮村）
貞穀（柴野）
田鬻（鶴洲事）
哲眞（三等事）
肇（寺井）
庭實（菊地）
苕天（龍松）
棣（岡内）
貞賢（藤川）
展親（宮武）

○ア之部

安西左近

木田郡高岡村三條の城主にして文明頃の人なり。（參照）三條城跡、同所にあり傍に墓所あり、其地善光寺といふ、安西家記に曰く安西左近是に居たり、左近は信州諏訪の人なり、文明のはしめ爰に來る、同三年三月廿七日宅地より巽の山上に諏訪明神を勸請せり、今其一族社の修理す、二世與三郎生駒近矩朝臣につかへて祿二百石をたまふ、三世傳右衛門生駒家國除ののち三條に歸り住す、四世傳右衛門には國祖君源英公より高十石をたまひ、元祿三年大庄屋役となして二十石をたまひしが五世傳大夫の世にいたり故障の事ありて役義を免さる其子孫歩卒又兵衛これなり、生駒家より賜はる知行の折紙今尚所持せり。（名）

安達七郎常清

阿野郡山田村七郎岡城の主にして天正頃の人なり。

（參照）七郎岡城、山田西分村にあり、安達七郎常清之に居る墻塹假山の跡存す。
三日城、高鉢山下にあり、安達常清の出城也。

秋山伯耆守

秋山伯耆守は三豊郡財田中の村の本篠城の城主なり、時代は天正頃ならん。
（參照）本篠城は中の村にあり、城山と呼べり、城跡三段餘、財田和泉守居れり、古城記には秋山伯耆守の裔何某居れりとあり、四國大平記には財田兵衛尉と云へり。
秋山何某とは常久が本姓にはあらずやと云ふ一說あり。（讃）

秋山四郎兵衛

香西氏の部下にして天正十年八月五日伊勢馬場合戰の時天神郭を固めし人。

秋山文左衛門

阿野郡小野村の城主にして蓋し天正頃の人。

秋山光季、泰忠

光季は仲多度郡田村城主たり、其の祖は甲斐國奇島に住し秋山光朝と云ふ、光朝の二男左兵衛光季なるもの弘安元年細川氏に從つて當國に來り、高瀨、葛原、柞原、飯田坂本、前田、鴨部等の諸郷を領して高瀨に居れり、正應二年光季の子泰忠、本門寺の開山日興の弟子（日蓮の法孫）日仙を招て那珂郡田村に一寺を建立して久遠寺と號す、其後二年下高瀨村に移す、今の大坊これなり。

綾公菅麻呂

は阿野郡の人なり、續日本記に左の記事あり。
續日本記に延曆十年九月戊寅讃岐國阿野郡正六位上綾公菅麻呂等言す、己等祖庚午年（天智帝九年）之後至二于巳亥年一（文武天皇九年）始蒙二賜朝臣姓一是以和銅七年以往三比之籍並記二朝臣一而養老二年造籍之日遠校二庚午年籍一削除朝臣一百姓之憂無二過一此甚一請據二三比籍一及舊位記蒙二賜朝臣之姓一許レ之。

綾高隼、綾高親

綾家は綾公より出づ、天曆元年高親三野郡大領に任ぜられてより姓を三野と稱す、三野菊右衛門は其嫡流なり。

南海通記に嶋田寺の過去帳を引て曰く

朱雀院の天慶年中藤原純友は豫州にあり、相馬將門に通じて叛亂を爲す、帝諸州吏に命じて之を討たしむ、斯の時に方り豫州諸郡大領及讃州三野大領綾高隼等又純友に黨して兵を構ふ、帝國吏を使して純友の罪を紀正す、高隼等之を聞いて大に悔い自ら葬衣を着て六道錢を掛け洛に至り其の罪を謝す、帝其の情を憐み死刑を宥し信州小縣に配流す、且田邑を賜ひ世々之に居り邑名を以て氏となす、六文錢を以て家紋となす、是れ日本武尊の遠裔綾公之嫡家なりとあり。

尙同書通考に三野郡大領高隼の所帶を以て、當國の大廳綾大夫高親に賜ふて世々三野大領と云ふ、故に三野を以て氏とし天正年中まで相續す、豊臣氏の世となり家祿を沒收し生駒氏に陪從す。

綾高末、高遠（高任）

は綾大領貞宣の後にして綾歌郡高屋に往し、野大夫と稱し綾在廳と號す、高末崇德上皇御遷幸に對し功あり、三位に叙せらる、子高遠あり（注記、在廳と稱するは王朝時代に諸國の國司等在京して任國の政務を攝し目代と稱する代官を派し、又國衙に在るものに事務を託すこの國衙に在る者を在廳官人と稱す）保元元年七月崇德院當國に播遷の際お引取り申せし人なり、源平盛衰記に曰く去る保元元年七月に當國に遷され、御座して始は直島に渡らせ給ひけるが後には在廳一の廳官野大夫高遠が堂に入らせ給ひける云々。

里民高遠の館と云はんとて高屋と言ひしを今は村名となれりと、高屋城は雄山の北にあり初め綾高遠之に居たり、正平十七平細川清氏是に居り後賴之に亡ぼされたり。

高遠に一女あり容色清楚なりしかば上皇の寵を得綾局と稱し一子を生み、是を高遠に賜ふ、高遠是を養ひて顯末と云ふ、又一說には林の彌太郎と稱せしとも云ふ。

綾景則（大見六郎）

景則は前名を大見六郎と云ふ、三野郡大見城主なり、實は香西資忠の次男なり、其母詫間氏長子五郎の害せられたるを怒つて自殺せしを以て幼にして孤となる、依つて母方の詫間氏に養はれ年長じて後大見城を詫間氏より受けて此城に居たり、貞治頃の人

靑乘采女

香川郡大野村南城の城主にして貞治年間の人。

青野重行

青野重行は三豊郡藤田城主なり。

（參照）　四國大平記には天正四年土佐元親の此の城攻を青野重行の城主と載せたり、此の地方にても青野民部と云ひ傳へり、或説には青野氏滅びて齋藤氏之れに代れりとも云へり。（讃）

阿刀大足

は那珂郡の人、空海の伯父なり、經史に通ず、博學秀才選ばれて伊豫親王の文學となり采地二千石を阿野郡鴨部（カモ）卿に賜はる、空海年十五にして此人に就きて詩文を學びしと云ふ。讃州府志に弘仁三年阿野郡神谷村神谷神社を勸請せし人とあれば弘仁貞觀頃の人と見ゆ。全讃史に阿野郡鴨部莊は大足の莊園にて今傳へ云ふ阿刀氏は佐伯氏の一族にして大師母の父大足大夫は田公の弟なりと。

飽浦信胤（來寓人）

三郎と稱す、佐々木秀義の後佐々木三郎左衛門飽浦信胤と云ふ、祖は胤泰始めて飽浦氏を稱す、建武の始め備後の福山に據りて足利尊氏に應じ京師を攻めしが延元四年備前兒島を以て南朝に歸順し脇屋義助に從ふ、曆應三年小豆島に來り星ヶ城に營居し正平二年細川師氏に襲撃せられ同島長濱に於て戰死す、墓は同郡安田村植松に在りと云ふ。

合葉文山

名蓁、通稱直次郎、號文山、又桃谷、本信州上田の人なりしが後年琴平に來住す、田能村竹田を學び花鳥人物に巧なり、○性蝶を好み瀑を愛す、因て蝶顛生瀑痴とも號す安政四年四月十三日歿す、年六十一。○落欵時時文山の二字を篆書す。

合葉快堂

琴平の畫家文山の嗣子にして、初め文岳と號せしが後快堂と改む、天保二年に生る、性恬淡、夙に父に學んで北宗の畫を能くせしが後畫風を變じて南畫となる、又書に巧にして山水畫を好くす、而して書畫の外詩歌、俳句の道にも通じ常に美馬君田等と往來し、專ら風雅の佳境に遊びて其一生を終はれりと示ふ、明治二十六年七月二十八日歿す、年六十二。

合葉文齋

通稱虎三郎、號文齋、琴平人、快堂の子、○書初父に學ぶ、父歿後京都森寛齋の門に入る、學ぶ事三年、寛齋歿す、山元春擧に學ぶ事七年、明治三十七年九月歿す、年二十七。

安積愼之

通稱基、俳號梅下庵快笑、高松人、○歌は中村尙輔、俳は芹舍に學び能くす、大正三年一月歿す、年七十二。

寄菊祝　秋ごとに色かえならす咲にほふきくは千年の花にぞありける

巖上松　いはほからいつ生初て松の花

安藤知冬

名知冬、字貞卿、通稱滿藏、三野郡上勝間人、○京師に遊び伊藤東涯に學び典故に明なり、延享四年宇和島侯に召され百五十石を受く、子孫儒臣たり、○著書、日本大典十卷あり。天明三年四月十二日歿す、年六十六。

安藤小琴

通稱久兵衛、號小琴、丸龜人、○書畫を能す、明治初年歿すといふ。

安藤大心

初め萬象後天倪と號す、三豊郡比地村の人、少壯東都に至り昌平黌に學び後又九州に遊び帆足萬里の門に入り學ぶ事數年學成り歸つて伊舍那院の寺主となり、明治二十六七年頃八十五六歳にて示寂す、師は非常な能書家にて弘法大師正傳三十代を繼ぎ五筆和尙と稱せられ、上田樹德に楷書の傳を授けたりと云ふ。

安藝雲峰

通稱豊藏、號雲峯、寒川郡津田人安藝榮柱の子、屋號板屋、○畫を圓山應擧に學ぶといふ。遺墨世に稀なり、寛政年中の人。

安西赤松

名愛、通稱孫四郎、號赤松、一號謙堂、高松人、○古書畫鑑識に長じ又其收藏に富む

自畫山水竹石氣韻あり、明治九年九月歿す年六十八、○其著、赤松居書畫圖錄あり。

安西惟明

名は惟明、晩年虔齋と號す、高松人、○中村尙輔に歌を學ぶ、砲術挿花を能す、明治中歿す。

安西茂

初め茂七後改めて茂と稱す、木田郡氷上村の人、幼より穎悟、理財に長ず、明治六年高木小學校教員より轉じて村長となり、郡會縣會等の議員となり教育、土木、水利、衞生等の事に力を竭す、又郡中の薄資なる秀才に同志と共に費を給しして遊學せしむるなど育英事業に意を注ぎ、嘗て日露戰役當時は公債の募集に盡力せり、奇特の人と云ふべし、大正六年十月廿五日歿す、年六十六。

揚分潮

名元徵、字獻卿、通稱文平、號分潮、又分橋又五峰、又松村、山田郡古高松人、○五山堂詩話に明卿とあり、亦分潮の字なり、畫譜に上野徵とあり亦同人なり、○本姓平氏、其先盛正阿より讃に移り、久保氏と稱す、第六世好清上野(アゲノ)氏と改む、分潮更に揚氏とす、分潮は彌七郎の子、少時三都に遊び栗山淇園等と交る、書畫を能す、黑竹尤も妙なり、天保六年閏七月歿す、年七十一。

揚弘齋

名維馨、字子德、號靜居、後改名世晋、字子明、號弘齋、通稱初辰之助後改稱晋十郎又小四郎、分潮の子、初東畯に學び又三冬に學ぶ、後大阪にて熊谷直好に從ふ、詩歌及古器鑒定を能す、房號對栗山房と云ふ、文久二年七月歿す、年五十五。○清痴樵歌は詩冊にて東畯題文あり。

明石巖根

名巖根、高松藩士、歌茶を能す、晩年專ら茶を樂しむ、大正二年十一月廿八日歿す、年七十四　○寄早苗祝、大御田に注連引きはへて豊けくも秋の賴みと取る早苗哉

有岡通恒

名通恒、通稱清八、香川郡勅使人、○和歌を能す、寛政元年西行六百年追善集に其歌

十七首入れり。

有岡千言

名千言、通稱隆三、舍號百不足舍、香川郡宮脇人、○堀秀成に從ひ、國語音義を受け又歌を能す、田村神社禰宜、後高松高等女學校教諭となる、明治四十年三月歿す、年五十、著書假名遣提經表あり。朝川を渉れば袖もかをるなり此風上や梅の花園

有房正詳

通稱巖二、諱は正詳（タヾサダ）、號富草舍（トミクサノヤ）由種（ユタネ）、文政九年西讃上高瀬村に生る、柳川雄八郎の次男にして竹堂の伯父なり、那珂郡苗田村（現今仲多度郡象鄕村）有房政八に養はれ有房氏を嗣ぐ、夙に秋山惟恭の門に入り國文學を修む、三土梅堂黑木茂矩等と同窓たり、日柳燕石、奈良松莊等に知遇せられ時に時事を談す、最も和歌に長じ社中西讃に玉露園秋光東讃に棗園打麿あり、大阪に雪之門春見、江戸に春友亭梅秀、仙台に千柳亭綾彥等と氣脈を通じ、置郵の制なき時代に於て全國各地に社中あり、定期通信の道を開き斯道の往復頻繁なり、江戸檜垣連春友亭の編輯せる月次和歌集發行後三十日を要して、吾が讃岐に着するを例とす、當時其の敏速なるに一驚を喫したりき、側ら俳句を作り碁を圍み茶道に通じ生花の妙技を得たり、慶應三年丁卯八月廿八日病歿す、享年四十二。嗣子梅三郎現時琴平町に寓し、印刷業に從事す。

有馬胤滋、軒原庄藏

寒川郡富田村大字富田中太田免數十町歩は同村羽鹿池掛なりしが水利不便のため旱災多し、時に里正有馬之を憂へ文政八年より四ヶ年の日子を費して掛井手を經營し、數千町歩の水利を便せんとす、然れども延長長きため洩水多し、この時軒原庄藏之を憂ひ、安政年間古大池の源泉より三ッ石山溪に至る山底を鑿つ事百五十間、晝夜三年の工事を經營して遂にその目的を達するを得たり。邑人今に之を德とす。

淺井奉政

名奉政、享保年間高松侯に仕ふ、○日本事纂百二十卷を著す、文化十四年九月加茂季鷹（スヱカ）之に跋す、曰高松侯文學淺井奉政著、云云、有德大君徵ニ藏文庫一とあり、○承應三年淺井富爲醫者と某書に見ゆ、同家なるべし。

淺田平次

名は保腆、通稱平次又七右衛門、高松藩士、○書及詩歌を能す、寺社奉行又考信閣出仕、慶應二年歿す、年五十餘。

粟津晴嵐

いそちかきまつの嵐にきりはれてあはつに舟もあらはれにける

淺野海自閑

名保武、通稱覺兵衛、號自閑又醉樵、高松人、○歌俳花茶を能し、篠栗に長す、安政四年閏五月歿す、年六十八、○安政六年片山○齋其像に讃す。

秋山忠諦

高松の人、和歌を能くす、嘉永頃の人。

二本杉

昔より其名も高くきこえ來てなほいく千代かふたもとのすぎ

秋山惟恭

名惟恭、字仲禮、幼名浪江後改稱伊豆、號巖山、晩年如瓶とも號す、舍號千別舍、秋山相摸の子、那珂郡櫛無神官たり、○初牧東渚に學び後備中小寺檜園に從ひ、又賴山陽の門に入り日本外史稿本を寫して歸る、學和漢を兼ね詩歌及畫を能す、文久三年四月十日歿す、年五十七、墓銘山田梅村撰す。○短冊に巖とのみ署するもあり。○縣史に號巖山とあるは巖山の誤なり。○著書、讃岐神社考、讃岐小史、帝統蒙求、讀新論西讃府史(此は京極高朗の命を受け編輯せしものにて全部六十一卷よりなり、實に當時の大著述なりと云ふべし)

綾井武夫

は綾歌郡羽床下村宮武龜三郎の子なりしが十五歳の時、親族なる坂出町の綾井忠吉郎の養子となる、幼時山本謙藏につき漢學を修め、明治十二年二十歳の時上京し慶應義塾に學び業成り歸りて縣會議員に選出され、爾來政界に身を投じ、明治廿一年大同團結に加盟し、後藤伯に隨つて東北を遊說し雄辯家の聞あり、又大隈伯條約改正案に對して其名益々顯はる、後香川縣會議員同副議長等に撰ばる、二十三年縣の第三區より撰ばれ衆議院議員となり、爾來屢々當選し第十一議會解散後之を罷め東京に於て殖產に從事せしが大正五年八月廿一日歿す、年五十六。氏頗る遊獵を好み斯道の權威と稱せらる。

綾野義賢

本姓は香西と稱し高松藩士なり、天保七年綾野と改む、通稱彌八郎、諱は正笏と云ひ藩の勘定奉行を勤め高松藩の事蹟に通じ、其れ等の記事を纒めて紫綠齋自備と號し數百卷の筆記及び高松藩記の著あり、明治二十四年五月二十七日歿す、年七十二。

荒井正親

名正親、明治年間綾北の人、○筆道に熱心なり。○筆意、難波津は心を寫す增鏡うつる筆意は聖なるらむ

明治四十三年十二月久世通禧(意誠心正)の題辭を得て筆意要訣上卷を出版せり。

荒川栗園

名英政、字德卿、通稱潤吉郎、號栗園、琴平人、○詩を三井雪航に、畵を大原東野に學ぶ、日柳燕石と親み、又京攝諸名家に交る、嘉永頃隱岐國に至り子弟を敎授す、勤王を唱ふ、安政五年、鄕里琴平に歸り歿す、年三十九。○詩文若干卷あり、○英政は央政とも書けるものあり。

荒川樟庵

通稱幸平、號樟庵、○栗洞展覽錄に見ゆ、象頭山下人、○詩書を能す、明治三年四月歿す、年六十三。

荒木雲溪

名養通、通稱養三、號雲溪又友竹、庵號巢松庵、舍號曰雲舍、高松人、○畫を戶祭雪湖に學び山水四君子を寫す、尤も風韻あり、明治三十八年五月歿す、年八十。

蘆澤加山

通稱水之助、號加山、諱長卿、字子續、本姓玉井氏、芦澤家を嗣ぐ、高松藩老臣勤務の餘暇に四君子山水畫及歌を能す、明治十九年五月二十五日歿す、年八十四。

蘆澤蘆香

號蘆香、加山の妻(台女)なり、亦畫を能くす、明治十二年五月廿一日歿す、年七十餘歲。

蘆澤元徴

平馬と稱す、高松の人、軍學に通じ兼て歌を能くす、萬延頃の人。

蘆澤元善

伊織と稱す、高松藩執政、明治元年正月十六日家老となり伊平と改む、同月十八日陳情の爲め姫路に使す、明治二年十月廿八日高松藩權大參事となる。明治十年沒す。

蘆澤蘭處

名元布、通稱水澄、號蘭處又蘆洲、高松人、○畫を竹處に學ぶ、又篆刻を能す、明治十一年五月歿す、年四十二。

赤井東海

は高松藩士十郎左衛門直道の子、母は内田氏なり、名は繩、字は士巽、小字秀之助後巖三と改む、別に東海と號す、軀幹雄偉少より武を好み十字槍を善くす、年甫めて弱冠家を弟吉兵衛に讓り古賀精里に昌平黌に從ひ力學五年、嘗て咯血を患ふ、衆醫之を危む東海意とせず、戲れて稗史を著し以て自ら遣る、坊間中井履軒の名を冒して刻する所の昔々春秋なるもの其一也、精里嘗て餡汁を諸生に與ふ、東海食はず、精里怪み問ふ、對へて曰く東海生れて武門に長じ酒を嗜みて甘きを忌むと、精里憤然語らず然れども此より東海を待つこと厚きを加ふと云ふ、文化癸酉年黌を辭して下居教授す東海時に二十有五、文政十二年藩侯召して十口俸を賜ひ世子に侍讀せしむ、爾後屢祿を加へ秩を陞せ遂に使番に班し米百苞を賜ふ、文久二年十一月十四日病て歿す、享年七十有六、谷中妙福寺先塋の次に葬る。

（事實文編）

（附記）東海は定府なりしも萬延年頃一度歸國して今の上笠居の藥師寺に寓せし事ありしと同地古老の談なり又寺井樾屋とは非常に親しかりしと

赤松喜内

小豆郡安田村の人、名は利和、其の先は赤松則村の後裔右兵衛尉家吉にして延德年間（今を去ること大凡四百餘年前）播州より本村に移住せしものなり元姓岡田を唱へ、近世赤松に改む、家世々里正たり。常に尊皇敬神の志厚く人に敎ゆるに大義名分を以てす、往昔吾か星ヶ城に據り南朝に盡して孤軍奮鬪終に殪れし佐々木三郎信胤の爲めに碑を同村植松に建て、之れを崇敬し千載の下奉公の念を振起せしむ、後京都に上り聖護院の宮に仕へしが、文化四年四月二十七日同地に歿す、利和の妻は立入彈正大忠の

女にしてオワキと云ふ。皇漢の學に通じ和歌を善くし兼ねて書に巧なり、八坂神社境内なる天滿宮の額面に其の水莖の跡を遺せり、嗣子藤太夫利安父の志を繼きて亦信胤の廟を尊ひ、祭祀懈怠なきを以て京都庭田大納言より引見且つ優遇の榮に接す、蓋し庭田家は佐々木氏の祖家たるを以てなり。（小豆郡史）

赤松松山

名光信、字は田夫、松山と號す、寒川郡志度浦の人なり、通稱五番屋伊助、寶曆五亥五月法を源内に學ひ種々の陶器を製し、浪華及長崎唐物店に運ひ之を賞す、眞の交趾燒世人知る事なし、當世交趾燒と稱して所々之を珍とする者多くは松山の製する所なり、後天明元丑歳又富田金山の麓に於て染付並に南京窯を始む、天明八申歳龜田屋藤藏なる者右の窯法を傳へ、其身志度浦に歸り種々の陶器を業とす、是を以て世人志度燒と稱す、寛政八辰歳居を高松城下に移す、其後亦香川郡宮脇村に移る、文政四己歳七月十日八十四歳にして沒す、松山燒と稱す。

赤松眞

字右橋魯仙と號し又湘江齋と號し、通稱千吉、光信の嫡子なり、父の業を受け種々の陶器を製す、時々君侯の命を受け陶器を製し献納す、安政年間に歴す。

赤松陶濱

名虞、字農夫、通稱猪太郎、號初陶涯後陶濱、又石水、又讀書堂、屋號房崎屋、高松人、千吉の子、陶工、〇世に其器を陶濱燒といふ、畫は馬嶺に學び山水蘭竹を能す、明治元年八月歴す、年五十九。

赤松椋園

名は範圓、通稱渡と稱し高松藩侍醫渡邊立齋（號松窩）の子なり、氏の時に至り本姓赤松に復す、幼より學を好み長して詩文を冲堂に學んで克くす、又武道に志し尤も鎗術に長す、壯より各地を周遊し文武を研鑽し兼て吏務の才あり、維新の際高松藩の少參事に任せられ釐革する處多し、後會計檢査院に仕へ明治二十二年高松に市制を布かるゝや推されて、初期の市長となり市の發展に盡くす處あり、後博物館主事となり又香川縣の囑託を受け縣史を編纂せり、業成るの後閑雲野鶴を友として優遊自適し吟咏に耽り、關西詩壇の老將たりしが大正四年五月廿九日俄然劇烈なる心臟病に冒され、終に黄泉の客となれり、享年七十六。著書、付一笑居詩集、蕉竹書寮詩稿、先朝私記、

葬水相逢、日本政記撮解。

父の代迄は元姓渡邊なりしが祖先は赤松則祐より出てしとて、椋園の代に至り本姓赤松に復したり。七十四生日有作(大二、十、二四)百歳匆々一瞬間。蓋棺可定有無功。遺經未報老人惠。七十四年猶夢中。

天保庚子十月九日、余始生也、先人有詩云、羆熊有兆舉男兒。來試啼聲知是誰。唯結阿嬢懐裡夢。一經遺汝定何時。

椋園先生遺愛之碑大正六年五月友人植田倬の選文にて高松市大本寺内に立てられたり

赤澤龍江

名は龍江、初通稱龍之助、高松人、○歌は友安三冬門人、本俳を爲せり、明治三十三年歿す、年七十一。○圖會に棗園打丸とあるは龍江の事なり、瓦町の家に大棗樹あるに因る。

赤澤古行

は庵號朝顔庵、文化文政年間の俳人、琴彈山下の人といふ、○讃岐名所圖會に俳句若干載せられたり。高松愛宕にて、涼しさは京のあたごに讓られず

赤澤融海

名は亮雅、號は靜臥、法名融海、天保四年四月大川郡三本松に生る、幼より穎悟にして漢學を同村白井節翁に佛敎を阿波の靈潭勸學に受け、餘技として詩畵歌俳を能くす後勝覺寺二十世住職となり、中僧正に進み尤も興正寺派本山の爲めに盡瘁す、後洗心校を設け宗敎々育に努むる處あり、明治廿八年一月二日示寂す、年六十三。

阿比野安太郎

諱は善信、通稱安太郎、文化九年鵜足郡宇多津村に生る、世々鄕士たり、幼より學を好み長ずるに及んで武技を能くす、尊攘の說起るや窃かに同志を糾合し、已れが賣藥を製造し各地の浪人をして行商に扮して派遣し、天下の英偉に締交せしむ、遂に藩吏の知るところとなり、藩外(阿波)に放逐さる、三年の後高松藩士長谷川宗右衛門の分疏救護により歸國を得たりしも猶禍江村里正の家に監禁さる。後赦されて我家に歸へり旅舍を營み志士を寄寓す、終始勤王の志を屈せず計劃するところありしも、文久元年九月歿す、年四十九。

阿　溪

號三隱又阿溪山人、山田郡牟禮六萬寺住僧、○後備中宮內普賢院に移る、歌及書を能す、明治八年七月寂す、年五十九。

草も木もなへて枯野の冬されにまつの綠のかはらざりけり

阿部良山

名世良、字良平、號良山堂、山田郡六條村由良山下の人、○篆刻の技名高し、細川林谷の師なり、銅印を作る甚多し、又墨竹に妙なり、浪華に寓す、文政四年四月二十日大阪に沒す、年四十九、○人物傳に高松人とあれど、本山田郡六條人、號良山は其近地由良山に取る、○著作、良山堂印譜等あり。

阿部家の祖先は安倍の仲丸に出て其末孫清秀なる者天正年間讃の那賀郡に來住し、其長孫光信なる者三木郡小蓑村に徙り農となり、其の子重信なる者が正保二年に山田郡六條村に轉住せしより以來世々六條村に住せしなり、而して良山の父嘉藤太が文化元年浪花に移り阿波橋に居住し商業に從事す、良山も從つて浪華に引越せしなれば絹州は同地で生れしならん。

阿部絹洲（縑洲）

名は温、字伯玉、通稱初信次郎、後良平、號絹州介庵、片痴、玉蒨、良山堂と號す、寛政五年九月十八日生る、良山の長男、母は葛西氏、浪華西横堀に住す、篆刻及詩書畫を能くす、畫は墨竹佳なり、○樓碧山人詩集の奥付に阿信甫、世蟻校とあり此人ならん、絹州の書きしものに安倍温撰と署せしものあり、是は祖先が安倍仲丸であるから其姓に倣ふたものなり、又堂號は父と同しく何れも良山堂と云ひしなり、著書、良山堂茶話、隨筆、芥子圖畫傳概縑洲印璽、詩集等あり、文化十三年棲碧山人百絶の序をかけり、文久二年二月十五日歿す、年七十歳。

阿部鹿城

名は岱、通稱泰藏、號鹿城良山の次男畫山水を能くす、畫譜に號阿岱とあり、阿は姓の一字岱は泰藏より出てしならむ、天保三年十月十日沒す、年三十八。

阿部竹

良山の男清節と號す、幼より學を好み、夙に大阪に行きて南岳其他に就き學び詩文を

能くす、明治十五六年頃の人、高松外磨屋町に住せり。

雨森三哲

名明卿、字子哲、號天水、三哲を以て行はる、○幼より學を好み僧となり、元祿九年高松節公に召され江戸に居り、又惠公に用ゐられ侍讀となり高松に住す、享保七年六月二日歿す、年五十六、墓は万日にあり、○題菅廟前梅、寥郭靈宮梅曆新。逆推八百有餘春。世間誰有知幽者。延喜聖朝維再辰。

三哲逸事（藍窓茶話）侍醫なり兼て儒學に達せしかば、菊池舍人とかはる〳〵節公の御前にて講釋しける。節公曰舍人が講釋は時を正し、日を正し席を正し、服を正して事むつかし其方が講釋は左にあらず　心安くしてよきとありければ三哲承り、舍人は儒者にて侍り臣は醫者にて侍りもし、地を易は皆然らんと申上しかは節公尤もと同じ玉ひけるとぞ、三哲は講釋の名人也かつて江戸聖堂にて講釋しけるに、貴賤群集し老婆などなみだをながし珠數かけておがみし故、世には三哲が珠數切講釋といひしとかや

青井多門

通稱多門、明和頃高松人、齋門姓名錄にあり、○漢學者なり。

青井水雄

名水雄、木田郡東植田神官、○性篤實、歌を能す、明治中歿す、年七十餘、○寄松祝常磐なる松に伴ふ君なれば千代の齡は疑ひもなし。

青山石泉

名樵、字雲隣、通稱孫兵衛、號石泉、高松人、○書を竹石に學び、山水人物を能す、文政二年八月歿す、年五十。

青葉士弘

名士弘、字道遠、號南洲、初名直年、通稱辨之助、改稱傳兵衛、父直行、母松山氏、○元祿十六年七月生る、享保八年江戸聖堂入學、十一年高松藩儒となり、元文二年中寄台、延享四年記錄所總裁、明和八年致仕、安永元年三月十六日歿す、年七十、墓西法寺に在り、儒學青葉士弘字道遠之墓と題せり、生前自筆と傳ふ、○其家本房州に住青葉加賀守重之の裔なり、寛永中高松に來る、年十三より根本彌右衛門に、十五より雨森三哲に就き後林鳳岡に從ふ、又易を室鳩巣に受く、○索珠堂は其堂號、芝山記文

を作れり、鬻適軒は其軒號、栗林二十詠(六十八歳の時の自作)に署せり、又岡長洲集に、葉文學翠竹樓とあり、其樓號なり、芝山も翠竹樓詩あり。所在は一番町なり、青葉氏後七番町に移る、○致仕詩、白識生年七十稀。眸昏齒墮與心違。主恩已許辭官去猶荷光榮臥翠微。○著書、きそちの記二冊、雛窓私言一冊、帝王紀略三冊、訓蒙要術一冊等あり。

士弘逸事

青葉傳兵衛士弘と云ふは懷公御代よりの儒臣なり、子孫其業を傳ふ。書を好くし詩も多し、鳩巣に易の傳乾を受けたるよし、聖堂へ入塾の時に寮の庭に梧桐を植て、後に業就つて此梧桐大樹となりしかば琴に製して今にその家にあり。

百尺澹潭碧渺漫。驪龍頭下夜光寒。十年辛苦頭將白。何日掌中帶唉看。

得意の作なるよし。

(藍窓茶話)

青葉半山

名養浩、通稱權左衞門、字和言、號初紫峰後半山、士弘の嫡子、高松藩儒、○明和八年中寄合、兼記錄所總裁、寛政元年講道館總裁、七年八月十一日歿す、墓に半山之墓とあり、亦生前自筆と傳ふ、○寛政二年由良神社甕塚碑文は半山の撰なり。

青葉好德

名好德、通稱傳兵衞、幼名辨之助、半山の嫡子、○寛政七年中寄合、享和三年講道館總裁、文政八年解職、○府志に青葉○とあり同人なり、悳は德にて好德の略なり。

青葉訥齋

名愼、通稱初三藏後傳右衞門、號訥齋又雪山、好德の養子、實父は宮武八郎右衞門清行二男、文化二年三月悳養爲子、○文化十五年講道館指南、天保五年同館引請、十一年十二月廿五日沒す、○新秋雨後、雨後秋風梧葉飛。涉園樹色濕人衣。牽牛花密殊濃艷。知是新涼露未晞。○子を强と云ふ、池田篁村の母の兄なり。

青葉强

愼の嫡子、初淸八、安政六年未十二月十六日更傳兵衞、喜永六年寅十月十七日命勤政廳及講道館講釋、元治元年子正月十一日拜謁坐次中寄合上、明治三年午十月二十三日爲學校上等敎授(同十二月廿三日爲漢學小敎授)

鮎川一雄

名一雄、通稱傳八、丸龜人、燕石の友人にして勤王を說く、○四條派の著色花卉蟲鳥を描き能くす、尙武道にも達せり、明治二年歿す、年五十七。

ア號索引

章隆（香西氏）　綾子（幻文事）　愛山（中川）
愛竹（中川）　愛（安西）　櫻花（花川）
秋彥（水野）　愛介（細谷）　安々主人（三谷）
秋成（狩野）　安靖處士（菊地）　綾小路（菊地）
安省先生（岡井）　安齋（深川）　愛親（伴）
愛竹（池內）

○サ之部

讃岐朝臣高作及時雄

高作は寒川郡の人にして性學を好み、其族時雄と共に大學に遊ひ、父永直に從ふて法律を學ふ、貞觀の初高作は散位從五位上に叙せられ、時雄は右大史正六位上に拜す、貞觀四年同族時人と共に姓和氣朝臣を賜ふ。

讃岐公永直

三代實錄に永直は本姓讃岐公神櫛王に出づ、寒川郡の人なり、幼にして大學に入り律令に通す、性聰明にして一たび聽て暗誦せり、弘仁六年明法得業士兼但馬權掾たり、天長七年明法博士右小史に至り尋て左小史に移り勘解由判官を兼ぬ、承和元年正月外從五位下に叙せられ同三年姓朝臣を賜ふ、俄に出雲介を兼ね又兼阿波權掾に遷る、嘉祥元年和氣朝臣齋之大不敬を犯す、永直此の事に坐り佐渡に流さる、文德天皇踐祚の明年赦に遇て本位に復し明法博士たり、老て骸骨を乞ふこと再三猶明法博士を免さす

して歸休せしむ、帝其耄たるを惜み玉ひ諸生をして里第に就て律令の善說を受けしむ永直私第に閑臥して生徒に敎授す、式部省其門庭に就て講竟の禮を行ふ、法家是を榮とす、初官吏たりしより勘解由の次官を歷任し判決の道頗る其旨を究む、嘗て源敏久額田今人等刑法難義數十事を抄出して唐に問んとす永直之を聞て詳に其義を解く累年の凝滯一時に永釋す、遺唐の問是に因て止むと云、貞觀四年八月十七日卒す、壽八十長子時人父の業を傳へて姓を和氣朝臣と改む、少女、光孝天皇の更衣たり源皇子舊鑒を生めり。

令義解は十卷より成り、讃岐永直等十二名のものが淳和天皇の天長三年より十年にかけて編したものなり。（西讃府志）

佐婆部首牛養（サバベノオフトウシカヒ）

は延曆頃讃岐の人、桓武天皇の時大學博士たり、寒川郡岡田村に住す、後姓を岡田と賜ふ。（岡田臣牛養を見よ）

佐伯直田公　佐伯直鈴伎麿　佐伯直酒麿　佐伯直魚主　佐伯直貞持（鈴伎麿子）　佐伯直貞繼　佐伯直葛野

佐伯直豐雄（酒麿の子）　佐伯直豐守（主の子）　佐伯直粟氏（魚

三代實錄に貞觀三年十一月十一日辛巳讃岐國多度郡の人、故佐伯直鈴伎麻呂、故正六位上佐伯直酒麻呂、故正七位下佐伯直魚主、鈴伎麻呂男從六位上佐伯直貞持、大初位下佐伯直貞繼、從七位下佐伯直葛野、酒麻呂男書博士正六位上佐伯直豐雄、從六位上佐伯直豐守、魚主男從八位上佐伯直粟氏等十一人、佐伯宿禰の姓を賜ひ、即ち左京職に隷す、是より先き正三位行中納言兼民部卿皇太后宮大夫伴宿禰善男奏して言く、書博士正六位下佐伯直豐雄欵して云く、先祖大伴健日連公景行天皇の御代倭武尊に隨ひ東國を平定して功勳世を蓋ふ、讃岐國を賜ひて以て私宅となす。健日連公の子、健持大連公子室屋大連公の第一男御物宿禰の胤、倭故連公、允恭天皇の御世始めて讃岐の國造に任ず、倭故連公是れ豐雄等の別祖なり、孝德天皇の世國造の號永く停止に從ひ同族玄蕃頭從五位下佐伯宿禰直持、正六位の上、佐伯宿稱正雄等既に京兆に貫し、姓宿禰を賜ふ、而して田公の門猶未だ預るを得ず、謹んで案內を檢するに眞持正雄等の興る、只實惠道雄兩大法師等に由る、贈僧正空海大法師の成長するところなり。而して田公是れ大僧正の父なり。今大僧都傳燈大法師位眞雅幸に時來に屬し久しく加護に

持す、彼の兩師に比し忽ち高下を知る、豊雄又彫蟲の小藝を以て學館の末員ヶ忝ふす往時を顧望するに悲歎良多し、正雄等の例に准じ特に姓を改め居を改むるを蒙る。善男等謹んで家記を檢す、事虚に憑らず之に從ふ云々。

佐伯盲繼、佐伯直長人

佐伯直繼は那珂郡の人なり、同姓なる長人と共に朝廷に仕へ、敬位藏人頭に任ぜらる承和三年本居を改て左京六條坊に貫す。

佐伯直豊雄

は正六位上書博士河麻呂の子、多度郡の人、大伴健日連の裔なり、幼より大學に遊び精を臨池(習字)の業に竭し、書博士に任ぜらる、貞觀三年奏請して曰く「吾が祖大伴連公倭武命に隨ひて東國を平定す、其の功世を蓋ふ、讃岐國多度郡を賜ひて私宅と爲す、允恭天皇の御宇に及び始めて國造に任ぜらる、其後年を經て孝德天皇の御宇に及び國造の號禁止せらる、今回姓正雄等姓宿禰を賜ひ京兆に貫す。而して吾田公の門未た之に預るを得ず、幸に之に賜はらんことを」と、時に正三位中納言兼民部大伴卿宿禰善男家記を檢して之を許す、其父子九人に姓宿禰を賜ひ左京職に隷す

弘法大師の父を佐伯田公と曰ふ、豊雄は則ちその子孫なり。

坂本鷹野

坂本鷹野は山田郡(木田郡)の人なり、朝廷に仕へて志を得、右少史に任ぜらる、承和中正六位上に叙せらる、承和三年和泉の舊居に復る。續日本後紀卷五、承和三年三月丙午、讃岐國人左大史正六位上坂本臣鷹野請下除二讃岐之籍帳一復中和泉舊墟一許レ之其去就申具二于古記一。

櫻井田部連貞相、同貞世

は三木郡の人にして、貞相は從五位下大判事兼明法博士たり、貞世は明法得業生大初位下たり、貞觀十五年十二月並に本居を改め、右京六條一坊に貫す。

酒部春世

香川郡の人、元秦人部たりしが承和九年同族十人酒部公の姓を賜はる(續日本後紀)

酒部益甲黑丸

酒部益甲黑丸（サカベノヤカハクロマル）所謂城山長者是也、武殼王四世孫綾の眞玉（サネ）の子也、初め家に井水なきを憂へ其居の東北の隅に栗樹あり、鵜之に集る、一日鵜地を跑る須臾にして清泉涌く夜中星光相映じ玉光の如し、因て玉井と名つく其傍に居る者皆富めり、郡を名て鵜足と曰ひ邑を號けて隈玉或は栗熊と稱す、七月七日夜益甲夢す神女あり井上に瑞現し水精玉圓徑五寸なるものを與へ曰く、汝謹て祠を立て此玉を奉せよと是に於て祠を井上に立つ星光映射す故に名を星宮と云ひ鄉人之を仰ぐ、益甲小麥を釀し酒を爲る其味甘烈黑して清し之を名て黑丸酒と曰ひ允恭帝に獻す、帝之を嘗て大に喜び遂に姓字を賜て酒部益甲黑丸と曰ふ仁賢帝九年八月歿す壽百五歲。（讃州府志）

（附記）村の南に長者原と云ふ地あり、此所蓋し館舍の跡ならむ、元阿野郡城山の殿舍に住居ありしを此益甲よりして此地に移られたりと云。

寒川氏

は讃岐公凡直千繼が族にて世々寒川郡の郡司たり、子孫遂に寒川氏と稱す、大內寒川の二郡及小豆郡を兼領て晝寢、攀山、虎丸等の諸城を構へ威を東讃に振ひゐたり。而して永正の初一旦大內氏に屬せしも後離れて細川氏の屬臣となりて大內郡にて一万石を領せり。

元家

文明の頃左馬允元家といへるあり、文明元年山田寒川の二郡の民事ありて相爭ふ、是により三谷景久と怨を結び同年九月二十九日夜景久窃に兵を起して來り襲ひ火を放て退き去る。左馬允怒りて三谷氏を擊んとす、細川政元固く制してやむ、同二年十一月十九日左馬允兵を起して三谷城に押し寄せ火を放て攻め戰ふ、景久拒く事を得ず逃れて王佐山に入る、左馬允軍を移して王佐山を圍む利あらずして退く、永正六年大內義興に從ひ京師に至る、同九年伊豫の能島家より西洋に一の小島あり、近頃明人此島に逃れ來り明の商船を招き和漢の賣買して國都の如し、是を攻め得る時は大に我國の利ならんと大內氏に勸む、是に因て大內義興寒川氏に命じて是を取らしむ、左馬允香西安富などと相謀り兵船二十餘艘を整へ引田の浦より發して備後國鞆に渡り能島院島などに通じ西蕃に赴き、彼島に押寄せしに通事を出して懇に和を乞ひ元家頗る利を得て歸る、此時我船の兵具を備へたるを見て洋中にて行遇たる異船怯れざる者なし、我船皆八幡宮の三字を章とせり、異邦の人我國の船を八幡船と云ふ事此時に始るると云ふ、永正五年十二月元家石田神社を再營す。

元政

は元家の子なり、初め太郎と稱す、元政十河右京進とよからず屢相攻戰す、十河氏是を阿波の三好筑前入道に告て兵を乞三好氏千餘人を率て十河氏を援て元政を攻めんとす、元政兵を津柳に伏て敵の來るを伺ふ、三好氏の兵三好郡より津柳に入る、元政地理を心得ぬれば敵の後へ廻り前後挾み擊ちて大に是を破る、阿波の兵破れ走りて植田の城に入る、元政後の難を慮り婦女嬰兒を晝寢虎丸の二城にこめ置き壯士を選みて要地を守らしむ、香川山城守、香西豊前守など此事を聞き寒川氏を援んと用意しければ阿波の軍戰はずして退く、此の戰は大永六年十二月四日の出來事にして寒川氏の將を額孫右衛門、神前雅樂助と云ひ前後の先鋒として武勇を顯はし首級を得る事若干也、天文元年七月寒川元政と十河一存と長尾東王田に於て戰ふ、當時十河氏は數百人に將として寒川氏を長尾城に襲はんむとせしかば神内左衛門精兵五十人を以て邀へ擊つ、左衛門遂に一存に殺さる。細川晴元勝瑞にありて此事を聞き一書を送りて和平せしむかくて十河氏とは和平すれど安富氏昔年の遺恨や忘れざりけん。天文九年正月二十日安富氏寒川郡七郷に入り同四月二十六日合戰に及ひ、寒川氏兵士盡く討死し殘卒本城を燒き晝寢の城に入り守り戰ふ事三年に及べり、天正三年九月十九日晝寢城近邊の樹木を伐り盡すとあれば城を開て他へ移りしならんかと傳へらる。

元隣

は元政の子なり、通記政國に作る丹後守と稱す、虎丸に居る、元龜三年安富筑前守阿波の篠原入道紫雲が女を納て妻とす、因つて紫雲へ言ひ入れけるは阿波より此地に通ふに大内の一郡中に隔たり、甚便りよからず其上我諸城主多くは阿波に親好の緣ある に寒川氏獨りさる緣もなければ變を生せん事慮られず、願くば此郡を屋形より所望し給はば阿讃同一國の如くならんと紫雲此由を屋形長治へ謀りければ、即て使を遣はし大内郡を所望す寒川氏否といへば攻滅ぼされんとす勢なれば止む事を得ず、大内郡四郷及攀山虎丸の二城を附て屋形へ送り其身は晝寢に築いて同所に引退く、而して程なく篠原氏も不慮の變に遭ひ、安富氏も天正三年九月阿波の海部左近の來り攻むるに及び城遂に陷りたれば其後三好存保の許へ行き勝瑞の城に居りしが天正十年八月廿七日三好存保の軍と合し、阿州中富川に於て兵二百五十人を三手にして土軍と交戰し遂に同處にで名譽の戰死を遂げたり

寒川光永（光長）

は淨慶と號す、次郎と稱す、寒川丹後守の弟にして晝寢の城主なりしが天正三年阿州海部左近に攻られ敗れて兄の許に居りしが兄阿州に於て戰沒の後浪々の身となり光陰を過ごし、生駒時代となり一正召して祿を與へんとせしも陪臣たるを耻ぢて仕へず薙髮して淨慶と號す、其舊臣に額孫右衛門と云者あり、香川郡中間鄕に移り農を業とす乃ち淨慶を迎へ父事す、正保二年十一月二十日歿す、壽八十餘才。

辭世　老の浪八十字なりき彼岸へ御法の舟に棹をさす哉

寒川長俊

長俊は右馬允繼俊の父にして世々寒川郡を領す因つて寒川を氏とす、文明二年九月寶藏院を氏寺となす、文明十二年十一月十七日安富氏と長尾東村の尾崎に戰ひ歿す、因て寶藏院住僧圓瑜引導を與へ長尾東村尾崎原に葬りしと云ふ。圓瑜は明應六年二月十一日寂す。

寒川繼俊

右馬允と稱す、寒川元隣の一族にして繼俊と稱し長俊の第二子なり、大川郡茶臼山の城主、年代文明より大永頃、永正九年五月十貫文を寶藏院に寄附し西國追罰を祈る。

寒川左馬入道常隣

寒川氏の一族にして左馬允元恒と稱す、初め寒川郡神前下村に一城を築き（常隣城と名く）居れり、後長尾池內城に移り居たり、土人此城を臺ヶ岡山と云ふ。天正三年二月長尾鄕鹽木に於て安富の軍と戰ひ互に殺傷あり、俗に此を擡木合戰と云ふ。

寒川七郎

は元隣の子なり、天正十四年十二月秀吉の命を受け九州島津征討軍に參加し豊後戸次川に於て苦戰せしも身命を全ふして歸りたり。

寒川參河守

寒川丹後守の子孫なり、其子を權之丞と云ふ、天正十年八月廿八日土佐元親の軍に加はり十河存保を攻めし時阿州中富川にて戰死す。

佐藤與左衛門

は寒川郡鴨部下庄村小方寺山の城主、蓋寒川氏の部將にして天正前後の人ならん。

佐藤志摩介

佐藤家は本姓宮脇なりしが故ありて佐藤に改む、香川郡伏石村暦紋(キモンドウ)の城主にして香西氏の部將なり、城跡は太田村伏石にあり、永祿十一年九月香西氏兒島を征するに當り其派遣軍中に佐藤某二十騎とあり、此人ならんか。

志摩介は親立石、伏石、流石を吾が村に築く故に居石とも云ふ。初名居石五郎兵衛と云ひ伏石城主にして香西氏の元老なり後彦左衛門と改め、其後軍務を男掃頭助に委ね今の栗林公園に隱居し道益と號す、此人は元龜頃より寛永の初頃迄存命せしものと知らる、其事績左の如し。

天正四年香西家を代表して敬意を表する爲め使者として京都に至り信長に謁す、其時香西家よりは備前元重の太刀を献す、信長大に悅び厚く饗應され南部產の名馬を賜はる、即ち引き歸て香西の厩に入る諸人大に悅びしと云ふ。其他土佐元親が香西へ攻入りし時又香西家が長尾へ引上げる時等始終香西家の爲に盡力せり后秀吉の命を受け島津征討軍にも參加し又生駒時代に至つても子掃頭と俱に民政上に盡す處多大にして今の栗林公園の基礎を起せし人なり、然らば當市の恩人と云ふべし。

佐藤孫七郎

は太田城主居石五郎兵衛が一男にして後の佐藤掃部助が舍兄なり、香西氏の部將にして兼て勇猛の聞へあり、諸所の戰に武功を顯はせしが天正十年八月五日土佐軍香西へ進入の時西光寺前の先鋒を爲し同日本津小畑にて戰死せり、蓋し若か死ならん。

佐藤掃頭助

は彦左衛門の子にして孫七郎の弟なり、兄早く戰死せしかば父を助けて各地に出戰し後生駒家に仕へ民政を主宰し治績多し、其大要左の如し。

天正十三年五月香西を引揚げ長尾へ移る時の謀議に與りし人、爾後の事跡左の如し

天正十四年十二月秀吉の命を受け九州島津征討軍に參加し、豊後戸次川に於て苦戰せしも身命を全して歸りたり。天正十五年八月生駒正規に祿二千石を以て召抱へられ。生駒正規讃州の主と成て國中の仕置は掃部に申附けられ、其法制正しく貢物所當の役夫等甲乙なく執行し玉へば國民親附す。此人は法華信者なりしと見へ慶長七年本覺寺(北古馬場町にあり)を創立せり。香川郡下笠居村にある山林三百餘町歩の確認證(元和五年五月廿一日付)署名人中に佐藤彦左衛門及掃部あり。然らば同地方

の爲には恩人と云ふべし。かく生駒家の爲に忠勤を盡くしゐたりしも正俊の代に至り、彼の奸臣前野氏等の計に陷り牢浪の身となりしも其後本多中書へ召抱へられたり。

佐藤幣無太夫

文治年間屋島の役香川郡安原東谷の城主、吉廣兵庫頭同村平尾神社の神官を從ふ、偶佐藤嗣信の馬病む神官之を祈りしに直に癒ゆ、時に軍中幣無くして祈りし故義經より姓名を賜ひ、佐藤幣無太夫と云ふ、爾來其の家世々今に至るまで佐藤幣無と稱せり。

（縣史）

佐野久兵衛

木田郡井戸村柏木にありし二條城の城主なり、蓋し安富氏の部下にして年代は天正以前の人ならん。

（附記）讃州府志には本文の通りなれど名勝圖會には佐久間六兵衛とあり、異名同人ならん。

財田和泉常久

財田和泉常久は善兵衛と稱す、三豐郡財田村財田城主にして天正頃の人。

（參照）財田城に居たり、天正六年土佐元親兵五千人を以て之れを攻む、城兵三百人防戰す、常久土佐の士横山源兵衛なるものゝ爲めに殺さる、城中に秋山主水なるものあり、常久の首を敵に得させじと挑み合ひ源兵衛を殺す、時に源兵衛の子、年甫めて十八父の殺されしを聞き、大聲に呼んで曰く、父の仇は俱に天を戴かずと追つて之れを擊ち、竟に主水を斬り其首を携へ歸る、軍中その勇を稱す、城陷る後元親の部將中内藤左衛門騎士等卒數百名を率ひ來りて此城を戍る、天正十三年豊公四國を征服するに及んで中内氏城を棄て、土佐に歸りたりと云ふ。

齋藤行長

庄左衛門（庄兵衛）と稱す、香西氏の部將にして居址は香川郡鶯田村沖にあり、年代は天正前後ならん。

齋藤下總守師鄕

は三豊郡藤目城の城主なり、齋藤氏は本加州の人なりしが先代信國と云ふ人讃州に來り一万三千石を此地にて領せしと、因て羽上山の麓に白山權現を勸請せりと云ふ。（參照）藤目城は丸井粟井二村の間にあり、山高三十六間齋藤下總守師郷之居城なり師郷阿州大西上野介と婚姻を爲し長曾我部元親に服從し、其孫を質として大西氏に遣はす、奈良氏、三好氏に告げて之を伐たんとし、天正六年香川民部少輔、長尾大隅、羽床伊豆等と共に兵六千餘人を將ひ來り此城を攻む、師郷死守する能はず城を棄てゝ大西氏に之く、奈良氏之を新目彈正に與へ精兵五百人をして戍らしむ、是歳土佐元親五千人を以て之を改む、城兵殊死して戰ひ皆戰歿す、師郷復此の城に入る是れ土佐の師讃岐に入るの始めなり。

一說此の城攻めを天正四年のことゝす、四國大平記には齋藤下總守のこと見えず、（青野重行の條參照）（讃）

三枝保年（サイクサホウネン）

名保年、通稱松太郎、香川郡由佐村に住す、本小豆島人〇馬嶺に花鳥人物を學び、又京人某に佛畫を學ぶ、明治二十二年歿す、年七十五。

三枝重太郎

小豆郡土庄町の人、天保十二年五月廿八日本町に生る、資性溫雅、多年縣會議員、村會議員、村長等の公職に勤めて公共に盡せり、年僅に八九歳の頃より俳句に巧にして往々人を驚すことあり、十八歳にして斯道の大家京都芹舍宗匠に從ひ、熱心敎を受けて頗る上達し俳名を竹亭節水と號し宗匠となりて名聲各地に聞ゆ、遠近敎を乞ふもの其の數を知らず性多藝にして圍碁淨瑠璃等の如き亦地方に於て一頭地を拔きたり、大正三年一月二十七日沒す、年七十四。

辭世　南無大師遍照金剛春の旅

（小豆郡史）

三枝忠次郎

は小豆郡土庄町の產、導圓翁の仲子たり、五竹と號す、爲人質直にして信義を重んず少くして高松に遊び山川孫水に從學す、後歸郷して研學の傍ら武道を練り、文久年間津山藩の足輕小頭を命ぜらる、慶應二年長州征伐に從軍し、維新後商業に從事し傍ら文學に耽り地方靑年の敎養と作詩とを樂みとし、晩年詩書とも其堂に入れり、明治十八年三月廿九日沒す、年五十一。

三田蘭室

名義勝、通稱清七郎又傳左衛門、號蘭室又桐江、丸龜藩三田宗壽の三男、母は通女、同族勝富に養はる、○國典を跡部光海(江戸人)伴部武等に、經史を室鳩巣に受く後藩の教授兼侍讀たり、安永六年七月十九日歿す、年七十七。○著書、守成筆錄、大星龍雷軍配之傳、明斷說、才志論、正學說、先妣井上孺人行狀、養子訓、南山興廢記等あり。

佐佐十竹

名宗淳、字士朴、通稱助三郎、號十竹齋、讃岐某島に生る、因て幼名島之助、○初京にて僧となる後還俗勤學して水戸に仕へ、彰考館編修總裁に至る、元祿十一年六月三日疾みて歿す、時に歳五十有九なり、水戸の城西增井邑の勝樂寺に葬る、始め志村氏を娶りしも間もなく歿し再び淡河氏を娶り二女を產む、男子なし故に姪の宗立を以て嗣子となし、祿を襲かしむ、著すところ南行雜錄六卷、西行雜錄四卷、幡軒山錄三卷十竹齋文十卷、詩稿二卷、六物輯釋六卷あり。

佐久間大華

名包然、字文華、通稱初作之進後立仙、號大華、丸龜人、○和漢學を能す、天明三年十二月十日沒す、○著書、和漢明辨、斷經響篇一冊等あり。

佐佐木雲屋

名九萬、字鵬程、通稱萬九郎、號雲屋、香川郡鶴市人、○竹石の高弟、山水花竹に妙なり、天保二年三月沒す、年五十五、○房號鶴市山房、○畫譜に出づ、又同譜に其刻の印もあり、刻印は良山に學ぶ。

佐佐木高庸

名高庸、通稱歡吾、三木郡田中人、○歌を能す。

佐佐木文山

名臥龍、通稱百助、號文山又墨華堂、江戸人、高松侯に仕ふ、○兄池庵と共に書名あり、幕命により朝鮮の復書を書す、其角と親交あり、享保二十年五月沒す年七十七。

佐佐木黄愚

黄愚と號す、志度人、嘉永頃の人、〇歌を能す、志度浦十二詠あり、圖會に出づ八栗層雲。志度晩鐘。高島晴嵐。惠遠島蟬。壇竈夕烟。神池群螢。珠浦秋月。津村牧笛。八浦漁舟。屋島暮雪。原汀白鷗。天野夜雨。〇八浦漁舟、いさりする海人の小舟の音はして見る目も分かぬ浦の八重霧

佐々木井翁

通稱井三郎、字を知備、號を春梧、晩に井翁と稱す、大川郡志度町の人、書畫詩文和歌等に造詣深し、明治十六年十一月沒す、享年六十八。

佐伯恭順

小豆郡大鐸村肥土山の人、少時岡山難波立愿の門に遊び、刀圭の學を修むること年あり、業成て家に歸り父に亞て其の業を始む、最も外科に長じ其名遠近に聞ゆ、之れを以て門前常に市をなせしと云ふ、本務の傍ら風雅を嗜み書畫を善くし、且つ賑恤の義氣に深かりしと云ふ、明治十三年十一月沒す。

佐伯旭雅

師は文政十一年阿波國三好郡勢力村に生る、内田熊三郎の末子なり、十二歳にして出家し、十七歳の時高松大護寺に來り義海仁照に佛典を學ぶ、後三十一歳の時迄讃阿及京都の寺院を巡り研學せり、安政五年八月五岳山主嚴猷の遺囑により善通寺の後董となり、慶應年間同寺五重塔を再建す、明治九年(四十九歳)にして隨心院主となり、明治十一年泉涌寺に轉し、同二十三年大僧正に補せられ、同二十四年一月二十一日示寂す、壽六十四。師は學德倶に高く佛敎界に盡くす事多大にして、著書二十三種あり

むかしより今に高野に佛法と僧もかすかにきこへけるかな

佐伯法遒

師は伊豫國宇摩郡上分村薦田伍平の二男なり、十三歳の時大師降誕の地を景慕し、讃岐に來り善通寺旭雅和尚の門に入り研學の結果高弟となり、明治十一年善通寺に住職するに至り、同年より大塔の再建に着手し、同三十四年に至て落成す、同三十九年洛南隨心院門跡に昇り四山管長大僧正となり、京都聯合大中學の學長總理を勤め又泉涌寺住職をも兼攝されしが疾の爲め劇務に堪へざるを以て泉山を辭し、單に隨心院のみ

として專ら靜養されしも遂に明治四十五年五月廿七日遷化す、壽七十、師は皆水と號し詩書畫を能くし、皆水餘韵の著あり。

佐野數一

綾歌郡府中村字綾坂の人、弘化三年正月三日宇多津町豊島茂八郎の二男として生る、後佐野氏を繼ぐ、氏天性愼厚、德望鄕閭に隆し、夙に村政に從ひて村長となり又殖産興業に盡力しては中筋佛坂二道の開鑿、三十八ヶ所の溜池の新鑿又は修治等を爲して灌漑の便を圖り、山林の造林を奬めては一般村民の永久の計を樹て、麥稈眞田の製造を敎習しては細民の福利をなし、敎育に衛生に卒先して膺り、其の他公共の獻身頗る大なりしも、明治三十四年八月二十一日沒す、享年五十六。生前藍綬褒章を賜はりて功を顯はす、今に至るも村民の欽慕厚し。

向山助總

通稱助總、大內郡三本松人、○明和中齋靜齋に漢學を學ぶ、

向山周慶

周慶名は政章、大內郡湊村に生れ、醫を池田玄丈に學び傍ら殖產の志あり、適々藩主賴恭甘蔗の栽培の法を奬勵するも製造の法を知らず、之を玄丈に命ず、玄丈病の爲め沒して果さず、周慶遺囑を受けて研究する年あり、幸に薩の人良助なるもの讃岐に來り病を得て困む、周慶爲に施療し癒ゆるを得たるを以て良助報恩の爲め、砂糖の製法を敎ゆ、因て其製法を知り得て周ねく國內に改良法を施し、之より讃岐砂糖の聲價を高めたり。文政二年九月二十六日歿す、享年七十四、世に砂糖の神樣と云ひ向良神社と祀る、明治十三年綿糖共進會に於て周慶の功勞を追賞し金幣一百圓を賜ふ、明治十九年祠宇を今の處に移し向山神社と改稱せり。

坂本龍慧

師は綾歌郡山內村の人、明治六年十歲にして屋島寺の徒弟となり、後東寺に入り雲照律師に學び、明治十三年牟禮村西林寺住職、同廿三年潟元村地藏寺、同廿七年屋島寺住職(權少僧正)となり屋島保勝會に盡す處あり、爾後病魔に侵され遂に大正元年十月十日寂す、年五十。

坂本定五郎

小豆郡草壁町に於て町制實施以來の殊勳者として、最初の町葬を以てせられたる人に坂本定五郎君がある。氏は明治九年愛媛縣小豆郡上村至善小學校教授を振出しとして教育界に身を投じ、それより郡書記に亞いで池田村外一ヶ村々長として自治制に與り郡會議員、縣會議員等を經て、大正七年草壁町長に就任、大正十二年一月病沒するまで町長として盡力せしものにして、その間同郡組合立女學校、中學校を設立するに與つて力ありしのみならず、同島の主要產物たる醬油釀造業である、島醬油、內海醬油等の各株式會社創立に關して多大の功績ありし人なりき。

坂齋道一（來寓人）

崎岳と號す、埼玉縣北葛飾郡田宮村の人、幼より學を好み夙に東京に出で中等科を修め後早稻田專門校科に入り勉學の功空しからず、明治十九年邦語政治科を卒へ尙研學を怠らざりしが偶々同二十一年十二月に至り、吾が香川新報社の創設さるゝに際し招かれて其主筆となり、每日社說に於て侃諤の議論を吐き世論を指導せり、明治卅二年三月高松市二級より撰ばれて市會議員となり市政上に盡す處あり、明治卅六年頃心機一轉、政界を脫し實業界に身を投せんとし、香川新報社を辭し鄉里に歸りしが暫くして足尾銅山の役員となり、明治四十年の同山の暴動事件に關し其善後策に盡瘁し、後之を辭して强靭紙製造會社を設立し其專務取締役となりしも失敗に終はり、晚年は鄉里に歸り大農法により農業に從事せしが遂に昭和二年六月十六日六十一歲を一期として逝けり、法號「曠文院能仁崎岳居士」と稱す、氏は餘暇に作詩を樂しみ居たり、左記は大正十五年新正の作なり。

去年六十始歸農。不羨人間萬戶封。聖代春風新換曆。三盃椒酒味方濃。

（鎌田連氏談）

澤井此君

號此君、天保頃象頭山人、○書畫及俳句を能す。

眞田圓山

名は彥治、略して彥とす、字公美、通稱元四郎、號圓山、齋號玉蘭齋、寒川郡富田村の人、眞田初次の男にして文政九年十二月生れなり、幼より書事を好み藤田湘軒（號板屋）に隨ひ畫及詩文を學び、後金子雪操の門に入り又詩文を藤澤東畡に學び、宋元以來の古畫を臨寫し小曾根乾堂、平野五岳等に交り、後阿淡、但馬、播磨、京阪、長崎等を遊歷せしことありしと、明治二十一年七月歿す、年六十三。

相馬肇

諱は肇、字は元基九方と號す、幼名富五郎、本姓は片山氏高松藩士、片山某の子なり後相馬と改姓す、天性卓犖豪宕にして小節に拘はらず尤經學文章に長ず、少壯故あり脫藩し三備の間に流寓す、幼にして中山城山に從ひ徂徠派の學を修せしが後馬良玉に交り專ら韓柳の文を習ふ、而て京師に游び交を奇傑の士に締び功名を以て當世に馳騁せんとするも不遇を以て、去て江戸に游びしが亦不遇にして志を伸ばすこと能はず、曾て自ら文章を錄し二卷と爲す、森田節齊之を讀み歎じて曰く文氣豪邁一世を壓するに足れりと晩歲岸和田藩の聘に應じ敎官と爲り講習館を搬開し群材を陶鑄す、明治十二年三月二十八日病て沒す、享年七十九、著す所立誠堂詩文存一卷あり。

笹山屋山

通稱小馬太郎、字仲應、又瑋董とも號す、高松の人、貫名菘翁風の書を能くす、大正九年九月十九日沒す、年六十八。

鷺岡　溫

名は溫、俗稱省助、字は如玉と云ひ、翠崖と號す、宇足郡二村の人、藤川三溪に學んで詩文を能くす、安政頃の人。

鷺岡唯雄

鵜足郡西二村の醫師なり、諱は保宗と云ふ、長益の季子なり、初め紀州に遊び外科を花岡氏に受け、又京師に至り吉益氏に從ひ內科を攻め、經史を貫名氏の門に讀み、業成り鄉に歸りて開業せしに治を乞ふ者常に門に滿てりと、又從學する者諸國より至り南海の一妙手と稱せらると云ふ、文久元年六月二十七日沒す、年五十八。

齋田五蕉

名吉碩、通稱四角、號五蕉、丸龜藩士、○俳を蒼虬翁に學び、四種器及南無庵の號を受く又書射に達す、明治六年六月三日沒す、年七十六。○壇浦、夜は波の戰ふ音や磯時雨。辭世、ちる花や舍利も生るゝ沙の上

齋藤元愼

は靑山又新意軒と號す、丸龜の人、藩の物頭役を勤め江戸勤番の時細井廣澤の門に入

り書を學び能くす、安永九年八月二日歿す、墓は同市寶津寺にあり。

齋藤碧梧

名包容、字士寛、通稱初太兵衛後洪造、號碧梧又閑靜齋、丸龜藩士、○詩文及書畫を能す、明治六年五月五日歿す、年六十一。大阪藩邸留守居役たり。

齋藤龜溪

通稱辰次郎、號龜溪又動鼻山人、高松人、○醉中時に畫く、明治年中沒す。

齋藤葛子

名葛子、天保頃の人、○歌を能す。○木村重成、あたら身を玉と碎きし功こそ後の世までの光なりけれ

三等法印

法師ば三木郡大町村に生る、名は三等、字は哲眞、號南月、父は高島氏、幼にして無量壽院に薙髮す、常に不動明王を信じ以て世に施す、備中寶島寺寂嚴の學友たり、仁尾の覺城院を中興し、廣く檀越を募る、法印博學にして佛學漢學及詩を能くす、著述多し即ち不動明王靈應記、般若心經秘鍵、蛇鱗記二卷、土佛篇上下、絕倒集、仁尾八景詩、覺城院緣起、觀音寺道中吟等あり、延享三年六月寂す、壽六十九。

僧敏

僧敏は安永五年三野郡寺家村に生る、俗姓小西氏、字密成と云ふ、幼より沈重にして群童と遊戯せず、甫めて九歲備中國福壽院の慈圭に就いて剃髮し、天台敎を學ぶ後西山拙齋に經史を學び又比叡山に入り、或は天王寺に菩薩戒を受け、時には淨土の易行門を叩く等大いに信仰の道を究む。後師の示寂に遇ひ備中に歸り、禪誦自適す、幾もなく嚴島に移る。後石見より京都に入り又嚴島に歸る等東奔西走席暖る暇なく、法燈のために盡瘁す。嘉永四年九月七日備中笠岡の海上にて入寂す、時に保壽七十六、慧命六十九なり。著書に神國決疑編考證、念佛追佛編、散心持名往生編、六字名號呼法辯等十餘部あり。皆世に行はる。

三靈

字は泰麟と云ひ、幼にして大護寺慈舟和上に就き祝髮し、佛學の傍ら詩文を好み、初

め岡内氏に師事し後城山の門り入り其學益々進む、文化頃の人。

山田

名空山、號山田、俗姓岡、阿野郡山田永覺寺住僧、○書を竹處に學び、山水四君子を能す、明治三十五年七月歿す、年八十。

山尾

姓梶原、名は景美、號柏月庵、山田郡水田の人、梅室の門人にして俳句を能くす。芭臣の祖父、鳴中に今來た蟬の聞えけり

山槐

麥歌舍と號す、高松の俳人。

珊樂

花月齋と號す、寒瓜門、讃岐ノ俳人。

藏海

は多度郡碑殿村遍照院牛額寺の住職にして有名な勤王僧月照の師たり、天保六年五月遷化す。

藻南

號藻南、山田郡下田井西樂寺住僧、植田篁山に學びて詩を能くし又俳句も能くす、明治年中に寂す。

讃窯道八

は普通さんかまと稱し、賴怒公の時代に三本松の堤治兵衛氏が公の旨を受け、二代道八を京都より招き陶製せしものにて現今非常の人氣を以てもてはやさる、因て左に其來歷を示す。

讃窯道八の窯墟

窯墟は三本松字五輪（大川中學校の南方數町）に在り、高松藩主松平賴怒大に國產奬勵に志し天保三年堤治兵衛を召し命ずるに京都の陶工仁阿彌道八を聘して器物を造

るを以てす、堤氏は細川掃部頭直之の裔にして世々三本松に住し名家を以て聞ゆ、治兵衛は實に其の十代とす、治兵衛乃ち京都の清水五條坂に赴きて、二代高橋道八（華中亭と號す、後剃髪して法橋仁阿彌と稱す）及び三代道八並に其弟子三人を伴ひ歸り陶窯を所有地なる五輪東阜に築けり、窯場南北三十尺東西二十一尺瓦屋重葺なり、而して其の素磁竈は松の下別莊に在り、其の南區は南北三十尺東西十五尺これを手工場とす、北區は東西二十四尺南北十二尺是を素磁竈埴土場とす、製陶用土石は當國大内郡富田村に產するものの外なほ支那及び肥前山城等より之を採れり、器成りて翌年正月これを藩主に献ず、其精巧優美眞に目を驚すに足れりとぞ、同年八月十日治兵衛を藩廳に召し特に讃窯の二字を賜ひて其の陶器に銘せしむ。

讃窯

天保四年癸巳八月吉日

命堤治兵衛司造陶器因賜其窯名曰讃窯

治兵衛嘗て其の法を仁阿彌に受け屢々自ら之を製せり、銘に曰く醉茗また曰必良また曰く珠淵其の器今存するもの殆ど稀なり、嘉永四年三月藩廳は十一代治兵衛（父の名を繼ぐ）を召し再び讃窯の事を督せしむ、會々治兵衛病に罹りしを以て里正高畑作兵衛に請ひ代て之を董せしめたり、其の四月仁阿彌父子及び三弟子復た來りて從事すること故の如し、賴恕公親しく作兵衛方に臨み其の陶技を閲す、世に之を御庭燒と稱せり。

讃窯は當時營利の爲めに製せるに非ざれど其の聲價遠近に轟き、薄茶碗一箇銀五兩の領收書今に存するによりて其の精巧無比なるを察すべし、然るに明治十八年五月に至り陶窯は毀たれて稻田に化し別墅は壞たれて菜圃に變せり（現今傘提灯商友國祐造の住宅地）此に於て醉茗亭治兵衛の孫直太郎は後藤直外をして窯墟を畫かしめ又濱垣松圃に請ひて讃窯記を作らしめ、讃窯醉茗庵等諸種の銘印と併せて之を尙藏し以て家寶と爲せり。

（大川郡史）

サ號索引

三哲（雨森）　三舟（日柳）　三橋（鈴木）　三溪（藤川）
三谷（兒玉）　三友（山下）　三冬（友安）　三蕉（中村）
蒼山（小西）　山田（僧號）　藏黑（玉楮）　象谷（玉楮）
象山（奈良）　山外（原）　藻浦（野田）　藻南三等佐敏（松崎）
藻洲（石川）　作郎（市原）　藻海（河田）　戴（龜井）
濟（上里）　桑（中村）　三松居士（立齋事）　朔道人（廣育）
三生翁（玉楮）　三江（安原）　藏六（吉田）　紫溪（國方）
三耕子（片岡）　滄溟（松岡）　象山（深井）　象麓（三野）
三千（市河）　象嶽（友安）　藻洲（菊地）　棹好（多田）
桑閑（久保）

○キ之部

岐陽

名は方秀、字岐陽、不二道人と號す、俗姓佐伯氏、父を清泰と云ひ、母源氏夢に珠劒を得たり、而して姙む、康安元年十二月二十五日、三野郡熊岡鄉比地村に生る、天性充實にして文藻典麗なりき、初め父故ありて北越に奔るや母之を携へて京都に出で外祖父源某により詩書を學ぶ、幾何もなく祖父沒し、窓泉和尙に從て東福寺に入るを初とす、又雲州人夢巖に就きて佛學を修む、後安國寺源濬和尙に學び和解益々進む、長して宋學を學ぶ、應永十年我が使船四書及詩經集傳等を舶載して歸る、當時は劒戟盛にして儒學を好くするもの少し、爲めに自ら四書に和點を施して一般人士の讀書に便を與へたり、岐陽の如きは實に當代稀に見る博學なる名僧と云ふべし、著す所琴川錄不二遺稿、同自曆譜等あり、應永卅一年二月三日東福寺に寂す、享年六十二。

紀伊守信親

木田郡下井戸、井戸城の城主にして時の人此れを井戸殿と稱せりり云ふ、蓋し安富氏の部下にして、年代は天正以前の人ならん。

木屋原若狭定矩

大川郡富田村時氏古城に居りし人にて土佐元親の部下なり、天正十三年豊公南州征伐の後阿州木屋原の城に歸りしと云ふ。

鬼無兵庫

香西氏の部將にして一に香西兵庫とも云ふ、其城址は香川郡上笠居村字袋山にあり、天正前後の人。

久昌院

源英公の實母水戸家臣谷ヒサ、英公及光圀公を生む、寛文元年英公生母の爲に高松天神前に廣昌寺を立つ。

丸龜京極家

德川將軍家光の萬治元年二月播磨龍野の城主京極高和西讃に封せられて丸龜に居城し明治二年に至る迄七代二百十二年間續いたり、而して朗徹は明治二年三月十九日土地人民を返上し、丸龜藩は七代二百十二年にして藩政は廢されて、左の家祿を下賜されたり。

三千三百二石

(1) 高和

高政の子なり、初め小法師と稱す、寛永十七年正月九日從五位下刑部少輔に任ず播磨國龍野にて六萬石を領せしが萬治元年二月廿六日丸龜の城を賜ひ、西讃岐五萬六十七石、播磨國揖保郡の內一萬石を下し賜ふ、同年五月五日入城す、寛文二年九月十三日京都にて逝去す、年四十四。

(2) 高豐

幼名百助と稱す、高和の子、寛文九年從五位下備中守に任す、寛文二年十二月四日封を襲ふ、元祿七年五月江戸よりの歸途痘瘡を患ひ、五月十八日播磨國加古川にて逝去す、年四十。書を能くす。

(3) 高　或

幼名縫殿と云ひ高豊の第四子なり、元祿七年六月十八日封を襲ふ、同日父高豊生前の請を許し庶弟(實は庶兄)高通を多度津城に分封するを許さる、寶永三年從五位下に叙し若狭守に任ず、享保四年九月朝鮮信使來聘す、命を受け之を駿州江尻驛に饗す、同九年六月二十九日丸龜にて卒す、在職三十一年、享年三十三。

(4) 高　矩

幼名縫殿助、初高定と云ふ、高或の長子なり、享保九年八月二十三日封を襲ふ、同十六年十二月二十二日、從五位下に叙し佐渡守と稱す、同十九年六月江戸を發し、同二十五日始て封に就く、寶暦十三年九月二十四日卒す、在職四十年、享年四十六。

(5) 高　中

幼名英吉、初高躬と稱す、寶暦十三年十月晦日封を襲ふ、明和七年十二月十六日從五位下に叙し能登守に任ず、文化七年六月二十五日若狭守に任ず、同八年正月十三日逝去す、年五十八。

(6) 高　朗

字季融、琴峯と號す、幼名友三郎、高中の四子なり、文化八年三月九日封を襲ふ、同十年十月十六日從五位下に叙し長門守と稱す、明治七年二月十四日逝去す、年七十七安政四年西讃府志成る、琴峰自序す、巖村秩、加藤穀、大塚敏、秋山惟恭等を用ゐ文武を修め、詩を能し、角力を好む、謚は薦枕高朗比古命、○著書、琴峰詩集八冊、巡封詩草、○五山は其集に序して、甚詩才を稱揚す、○葛原、松村竹落絶還連。老樹陰中荒徑穿。廳處野畦收稻後。麥苗寸寸似鋪氈。○欵に或は陶水郎とあり。

(7) 朗　徹

寶嶺と號す、幼名岩根後榮三郎、實は支族右近の第五子なり、高朗養て世子とす、嘉永二年十二月十六日從五位下に叙し佐渡守と稱す、同三年封を襲ふ、安政元年十一月四日、五日地大に震ふ、封内人家傾壞するもの多く士民皆居外に家居す。明治四年四月十日丸龜藩を廢し、丸龜縣を置かれ朗徹其知事に任じ、同八月十五日知事を免せられ十月十八日東京に歸り、同十五年五月十一日卒す、年五十三、兄高峯の長子高德を養ふて嗣とす。○夫人を鈺子と云ふ。

高德子

は高岑の長男、安政五年十一月五日を以て丸龜西屋敷に生る、後朗徹の嗣子として丸龜藩主京極家の後を襲ふ、初期以來貴族院議員に互選され、明治十九年以降青山御所勤務、明宮祇侯等に歴任せり、○餘技としては書及び圍碁も能くし、若い時より先代に負けざる相撲好きなり。昭和三年五月廿一日沒す、年七十一、危篤の報天聽に達するや左の御沙汰ありたり。

從二位勳三等子爵京極高德、叙正二等端寶章

夫人熊子（山内容堂の養女）との間に八男八女あり。

京極松垞

幼名富丸、名高美、號松垞　琴峯の長男にして詩文を大窪詩佛に學び能くす、書も詩佛に酷似す、惜哉弘化二年七月十六日齡二十八を以て逝けりと云ふ、詩集五卷あり。

京極伊知子

京極伊知子は右近衛權少將忠高の女なり、才勝れて貞淑の稱あり、家臣多賀宮内常良に嫁し、寛永十九年五月一子高房を生む、越へて二ヶ月夫常良死す、伊知子素より歌文に長じたり、萬治三年四月二十七日歿す、謚號壽昌院殿茂林宗繁大姉といふ墓は丸龜玄要寺内林溪院にあり、夫を慕ひ愛兒を養ふ上につけて心事を書きつらねて涙草といふ、其中の歌皆情眞に語優なり、左に聊抄す。

よそに見し尾花が露も此秋は我袖よりぞこぼれそめける

夕暮の空に漂ふ浮雲やはかなき人の行くへなるらむ

小車のめぐり逢ふ瀬も頼まれず我玉のをの限り知らねば

諸共に行くべき身にもあらなくに涙ばかりや先に立つらむ

新玉の年立つ日より戀しきは古巢を出でし鶯の聲

思ひやる心遣ひは東路を日に幾度か行き返るらむ

右第一二首は亡夫を慕ふなり、第三四首は愛子が江戸に行く時に別を惜むなり、第五六首は愛子が江戸に著きて又の歳の暮に思ひやりし由なり。かくて此子は成長の後遺託により幕府に請て三千石を讓り與へて、京極高房と稱せしが延寶五年五月二十一日逝去す、年三十四。

多度津京極家

將軍綱吉の元祿七年京極高和の孫、高道を多度津に封じ一萬石を與へて多度津藩を起したが六代の高典は明治二年二月に版籍を朝廷に奉還し、六代百七十六年にして廢され、左の家祿を下附された。

一七百四十石

(1) 高澄

幼名喜内又内膳と稱す、諱は高道後高澄と改む、丸龜藩主二代高豊の次男なり、元祿七年六月十八日父沒後生前の請を以て讃州多度津に於て高一萬石の所領を分ち賜ふ。正德元年始て封に就き丸龜城内に邸を設け之に住す、享保二十年九月二十四日封を世子高慶に襲はしめて致仕す、在職四十二年寛保三年四月二十日江戸にて卒す、年五十三。

(2) 高慶

幼名千吉後内膳と改む、高澄の第一子なり、享保二十年九月二十四日封を襲ふ、同年十二月從五位下に叙し出羽守と稱す、元文二年五月始て封に就き丸龜に住す、寶暦六年二月二十六日丸龜にて卒す、在職二十二年、享年三十七。

(3) 高文

幼名内膳、初の名は高武後高文と改む、高慶の第六子なり、寶暦六年五月二日封を襲ふ、明和六年十二月十八日從五位下に叙し壹岐守と稱す、安永八年七月五日世子高賢をして封を襲はしめて致仕す、在職四十二年、同年十月十六日卒す、享年四十四。

(4) 高賢

幼名秀松後内膳と改む、高文の第一子なり、寛政八年七月五日封を襲ふ、同十二月十九日從五位下に叙し壹岐守と稱す、同九年四月江戸を發して初めて封に就き丸龜城に居る、文政十年三月二十一日陣屋を多度津に造り、移住せんことを請ふて許され、十一月を以て多度津に移る、是より先き高澄分封以後丸龜城の郭内に居館を設け之に住するもの數世、但多度津に別館を設け十數戸の家臣を移して之を守らしめしが是に於て居館二所、倉庫八所、營門三所、皷樓學館馬場射場等完備し、更に外郭を作り外門を三所に置けり、天保四年三月高賢封を世子に襲はしめて致仕す、在職三十七年、同九年三月六日卒す、享年六十三。

(5) 高　琢

幼名辰之助後内膳と改む、高賢の第二子なり、文化八年十二月十八日世子となる、天保四年三月封を襲ひ同年四月始て封に就く、同五年十二月十六日從五位下に叙し壹岐守と稱す、同九年多度津築港成る。

多度津築港

是より先き天保五年を以て工を起し、家老川口久右衛門之を督す、東方突堤百十八間北より折れて西に向ふ、西突堤七十間中央別に百十間の防波堤を設け、其兩端二所に港門あり、此費額凡金六千二百餘兩を要せりと云ふ。

安政四年四月六日庶弟高寳の次男於菟之助、高德を養ふて世子とす、同六年三月十一日高琢致仕す、在職二十七年、慶應三年三月二十二日卒す、享年五十七。

(6) 高　典

幼名於菟之助、名を高德と云ふ、實は高琢の庶弟高寳の次男なり、天保七年十月十九日生る、安政四年四月六日世子となる、同五年十二月名を高典と改む、同六年三月封を襲ふ、同十二月十五日從五位下に叙し壹岐守と稱す、後河内守又下總守と改む、明治二年六月多度津藩知事に任ぜらる、同年二月七日多度津藩を廢せられ知事を免ぜられ、同四月八日東京に歸る後貴族院議員たり、明治三十九年頃沒す。年六十餘才。

高　備　子

子は高典の二男にして明治六年七月三十日を以て生る、明治四十三年貴族院議員となり今尚其任にあり、夫人を弘子と云ひ、一女あり。

北原梅庵

名孝繼、字善夫、通稱初直次郎後直一郎、號梅庵、高松人、孝幹の子、○書を米庵に學ぶ、慶應二年講道館習字指南となる、明治元年八月沒す、○小村田之助の碑文は其撰なり。

北岡　政

字子正、石台と號し、丸龜藩士にして詩を能くす、弘化頃の人、鼓腹集の著あり。

北川伊兵衞常吉

は日本に於ける特有織物として高松の名產たる保多織の元祖なり、氏は京都の人、伊兵衞は蒲生家の臣北川治部兵衞宣勝五世の孫なり。元祿二年藩主賴重公の召によりて讃岐に來り中村に工場を設け、元祿二年十月二十六日絹縞二十六反を藩邸に上納す、然して苦心の末保多織を發明す、同五年四月五日絹保多織五段を上納せるを嚆矢とす正德元年十一月十三日沒す。

北村雅尙

名雅尙、通稱平三郎、安雅の父なり、○歌を能す、文化頃の人。

北村安雅

名安雅、通稱庄之助、號翠竹、高松人、父は平三郎雅尙、○書は樸齋に、歌は方升に學ぶ、文久三年五月沒す、年四十九。○池邊柳、幾春か池の鏡に影うつす柳の眉は老せざるらむ

久家暢齋

名高朗、通稱彌榮喜、改稱令助、號暢齋、高松藩儒、○文化九年講道館儒員、詩文及書畫を能す、弘化元年四月沒す、年五十四。梅村輓詩に歲次今年恰屬龍とあり、暢齋歿年甲辰なり、○落欵に久朗とあり、姓名を取るなり、○吟社を設け玉蘭社といふ、五山堂詩話に見ゆ、○著書、昇平樂事集等あり。

久家克堂

名高恒、字大中、通稱令三、號克堂、實は太田正心の次男、暢齋の養子、○弘化元年講道館儒員、記錄所總裁、詩文を能す、明治三十年五月歿す、年八十。

岸本縑崖

通稱安平と云ふ、天保元年六月二十三日大川郡鶴羽村に於て生る、別號淸春と云ひ書は津田の島村にて習ひ出藍の譽れあり、畫は壯時江都に行き某氏に學び山水を能くす明治三十八年一月一日歿す、年七十五。

岸田竹潭

名茂篤、字竹潭、俗稱亮仲、號默翁、香川郡大野村人、由良養的の次男、同郡由佐人岸田勘八の養子となる、○高洲に經義を受く又歌を能す、天性篤實善く養父に事ふ、嘉永六年七月沒す、年七十七。私謚一玄、○醫暇子弟を敎ふ、之に示す歌、よく習へ今習はずば年たけて悔の八千度かひなからまし、○晩年盲となる、其頃書ける短冊も存す、○著書、百首櫻歌等あり。

岸田月窓

名鴻、字子漸、初名茂元、字長孺、通稱元介、號月窓又琴谷、亮仲の子、由佐人、○書は吉補に學び六體皆能す、詩文は城山、篆刻は林谷に學ぶ、天保五年三月沒す、年二十一、墓は謙谷撰文、書は篁山にて年十三の時なり、篁山は幼時此人に學ぶ、○著書、六體書苑等あり、○篁山遺詩を輯めて、琴谷詩集といふ、○題猿畫、巴東巫峽秀。月黑叫清猿。時破愁人夢。不令到故園。

岸田青城

名遊、字世遠、號青城、文化中東讃人、○畫を能す、畫譜に出づ。

木下新十郎

諱は善、字子伯、號を芦浦とす、通稱亮朔、高橋中谷翁の仲子にして小豆郡安田村に生る、幼より學を好み少時高松に遊ひ藤澤先生に業を受く、日夜研鑽怠りなし、後浪華に赴き賀川氏の門に入り醫術を學ぶ、年有り後東遊、西泳百氏の業を窺ふ成つて鄉に歸り苗羽村木下與左門の女を妻としてその姓を冒す、一男三女あり、長女は安田村鳥井氏に、二女は夭死し、三女は坂手村山村氏に嫁す、鄉にあるや附近の子弟を集め經書を講じ或ひは醫術を爲し、貧を救ふを以て己れの任となす、性義を好み甚だ鄉里に重んぜらる、文久三年四月廿四日病沒す、享年六十、墓碑は友人日下逸撰し、山村亮哲の書する所なり。

木内靜好

龍山の養母にして歌を能くす、八十二歲にして左の歌を作れり、明治の初年沒せり。

三千とせになるてう桃のとしより花さく春に逢そうれしき

木内龍山

名倫、字仲和、通稱順二、號龍山、香川郡圓座人、小橋道寧の子にて安藏の弟、文化八年十二月五日圓座村に於て生る、天保二年山田郡古高松木内茂邦の養子、○福江六山に書を學び、伊藤南岳、謙谷綾川に經史を學ぶ、少壯著述に耽り又勤王に盡瘁す、慶應三年十一月二十七日沒す、年五十七、○亭號賞眞亭といふ、○小豆洲、嶺上攀來地稍平。班荆北望水雲淸。備山徒倚播山曲。明滅時看赤穗城。大正八年十一月從五位を贈らる。著書、擊壤錄、烈女傳、龍山漫錄、尊壤餘韻、天安世紀、賞眞亭叢書、增補古曆便覽、江門官年表、和漢帝王年表、幕府年表、列侯知名錄、紫文抄、時文抄略台閣文、文材雜抄、時賢雜抄、時賢文抄、大東都邑考、賞眞亭雜記、近世紹運錄、雞肋瑣話、龍山吟草、今世紀略、稽古瑣話、龍山漫錄等あり。

木内石颿

通稱辰次郎、號石颿、多田靑鈎の弟、木内氏を嗣ぐ、○書山水を能す、天保十三年十一月沒す、年四十八。

木内翠亭

名遷、初め松泉、通稱彌八郎、石颿の弟、○山水四君子を能す、明治二十一年六月沒す、年六十四。

木内聶

號聶亭（デフ）、文化頃東讃人、○書を能す。

木村龍鐘

號龍鐘、文化頃東讃人、○詩を能す。

木村幹

名幹、字子良、○安永頃齋必簡の門人なり、同門三野喜敏、菊池武矩等の諸子文稿といふは此人の編輯なり。

木村雄直

名雄直、通稱牢三郎、號方齋、高松人、○歌を能す、中村氏門人、維新前に沒す。○雨後眺望、雨はれてすまの濱より見渡せば木路の遠山雲だにもなし

木村霞鄕

號霞鄕、丸龜葭町の醫、○書は浦春上琴に學ぶ、天保弘化頃の人

木村季明

字季明、通稱亘、明信の子、默老の曾祖父、○本姓佐佐木後木村とす、軍學和歌茶事等に達す、初守山侯後高松侯に仕ふ、寛政九年九月二十一日沒す、年八十二。

木村亘

亘諱は通明、小字は熊次郎、老後默老と稱す、季明の孫なり、幼時書を藩學に學ひ每試甲科に上る、高松藩の世臣なり、藩主之を近侍とし遂に懋公の家老と爲し、委するに會計を以てす、是時に當りて藩國財政振はず家殆んど支ふ可からず、亘經營備さに至り同僚覓速水と相謀り坂出の塩田を開き永富の坡池を修し、砂糖爲替の法を立て十數年の後府庫充實す、學和漢を兼ね殊に歌繪畫を能くす、其江戸藩邸に在る曲亭馬琴と莫逆の交を結び、朝夕往來殆んど虛日なかりしと云ふ、曾て膳所藩士平井兄弟の讐を當國綾歌郡羽床村に復するや村吏臨檢書を藩廳に致す、僚屬之を視て曰く人を殺し咽喉を刺さず是恐らくは武道を解せざるものと、既にして其書を執政に出す亘一閱して曰く平井學ぶ所の劍術は必ず蔭流ならんか、屬吏何の謂たるを解せず陰に人を馳せて之を劍術師某氏に質す、曰く屍の耳後に疵一と所あるは是蔭術の秘法なりと、是に於て其劍法も亦蘊奥を究むるに服す、安政三年十二月病て沒す、享年八十五。

別號痴齋、又漁隱又樟川等あり著書左の如し。

隨聞記、續聞ままの記、戲場思出艸、戲作者考、江城朝儀式、國字小說通、京攝戲作者考、金瓶梅批評、宇津良衣、懿公遺事、筐底秘記、鄙言兒孫喩、本朝水滸傳初輯評、和寶女大學、海底錄、龍集說考、忠臣記、通明近思錄、中陵漫錄、釣狐尾芬褥、新玉藻前譚、不知火譚、曲亭戲作目錄、談月亭藏書目錄、木村家譜、島牛記、初學臨池抄、戲場一覽顯微鏡。

木村子柔

諱は直、字子柔、綾歌郡岡田村の人なり、寛保二年に生る、幼より學を好みその學に忠なること驚くほどにして、天暑にも雨降るにも路の遠近を問はずして說を聞くを樂

みとせりと、斯くて天明二年正月五日沒す、年四十二。子なきを以て其の親戚の子恒二を取りて嗣となせりと、學友三野無逸其墓銘を撰すと云ふ。

木村環翠

名成憲、通稱才助、號環翠、大內郡三殿人、許重の子、世々里正たり、○草書篆書を能す、之を以て諸國を遊歷す、天明中大內郡水利土工に盡力す、文政九年四月沒す、年七十八。○家に其書六曲屏風及大筆あり、○墓は泉川世寧撰文。

右側に殘せしは殘しゝの語格なれど元のまゝなり。左の辭世を刻せり。

何一つ思ひ殘せし事もなく只故鄕の月を眺めむ

木村文齋

號文齋、文化頃東讃人、○書を能す、竹石展觀錄にあり。

木戸長秀

名長秀、字元造、文化頃高松人、○書を能す、書譜に出づ。

木谷蓼村

字士厚、諱崇禮、號蓼村、通稱綱助と云ふ、多度郡葛原村の人、尾池松灣に學んで詩書を能くす、加藤梅崖、戶祭鷗村等と親交あり、明治六年十月十八日沒す、年五十八

梅隱詩稿は崇禮の校する處なり。

夏夜偶作、雷雨忽開霽。村齋夜自凉。微風檐柳外。時見一螢翔。

木谷竹村

は通稱を虎之助と云ひ多度郡葛原村の人、元同郡筆岡村高口古門の次男なり、木谷綱助に養はれ其嗣となる、木谷愚山に學んで詩書を能くす、明治十八年五月一日歿す、年四十一。

木曾壽平

諱は貞庸、字德言、愚山と號す、通稱四郎、晩年壽平と改む、父は與三兵衞貞正と稱す、初め香川克齋に學び、長じて伊豫小松藩儒近藤篤山に學ぶ、後東都に遊び昌平黌に學び居ること幾何もなく、父の病報に接し歸ると其の喪に遭ひ、再び遊學する能は

す郷里に於て子弟を教養せり。明治十年八月歿す、年六十六。

木村公景

は琴平の畫家なり、本名は科野萬之助と稱し、もと大阪堺筋の商賈なりしが幼より畫を好み西山芳園に就き學び堂に入る、明治二十年頃琴平に來り畫壇を開き、畫筆に親しみつゝありしが大正二年十一月二十一日歿す、年六十九。子暉峯あり、父の業を繼げり。

木村笠堂

通稱勇吉、蕉陰窩と號す、志度人、安政六年三月同町多田家に生れ、後五名山村木村家の嗣子となる、畫は初め雪江後守山湘颯、鐵齋、立齋等に學び能くす、就中花鳥と蝶の畫は尤も得意とする處なり、詩は石橋雲來に學び能くす、尚餘暇に圍棋を好めり大正九年二月六日歿す、年六十三。

遊志度寺、梵鐘隱々碧烟横。古殿烹茶弄晩晴。黄鳥何來也添興。數聲宛轉法華經。

紀杏園

小豆郡滿寄村の人、通稱雄次郎、天保五年三月三十日高松市丸龜町に生る、父を木内彦門と云ふ、其の三男なり、翠亭の弟、丁年の頃本村上庄鄉正紀家の養子となり其の職を襲ふ、性頗る熱心にして且つ義俠心に富む、明治廢藩の後或は庄管に或は小區長に或は縣會議員となり、又香川縣に出仕して黽勉精勵克く其の責務に鞅掌せり、餘暇南宗の繪畫を能くし、名吉、字吉人、杏園と號す、明治二十三年二月三日歿す、年五十七。

（小豆郡史）

紀太紫峰

通稱作兵衛、慶安二年英公高松に召し、紀太理兵衛と改稱せしむ、陶業餘暇畫を能す、號紫峰又理空、○本姓森嶋、江州信樂人、父半彌、明人に陶法を受く、理兵衛京師粟田口に陶す、因て英公に知らる、○歿年未詳、但し其畫に時年七十と欵せるあり、○其家陶業半彌を初代とす、但し理兵衛燒は紫峰を初代とす、理兵衛の名世襲す、因て初代を古理兵衛と稱す、世人古理平と書くは當時の書方に違へり、但し近頃戸主は理平なり。享保十五年寒川郡神前村大字庄野蓮井六郎三郎伴願濟養子となり、藩主英公より三百疋下賜金あり、享保の末年迄凡そ八十歳頃迄長生せしものゝ如し。

紀盈之

名盈之、高松人、中村尙輔に歌を學ぶ、明治初年頃の人、寄笠戀、こびわぶる涙は雨にまされども我袖笠に宿る人なし。尙輔判四十二番歌合にあり。

菊屋逸三

號逸三、高松鹽屋町人、家世々釀酒を業とす、○俳に巧なり、藩老召して其敏才を試み一幅を展る間に作らしむ、其畫三猿松に縋る圖なり、即吟に曰、松の枝に猿が三匹三下り手と手と手と手と手と手と手、主人賞して酒を與ふ、逸三又作る、猿の畫に見ざる聞かざる賛をして又あり難く酒を下る、主人大に感じ、鳶色の羽織を與ふ、逸三又作る、鳶色の羽織を鷲が引掛けて欲の熊鷹又酒を飲む。

菊池元春

は姓藤原、肥後守武房の後裔、五山の始祖にして諱は武方と云ひ、八衛門の父、江州膳所本多縫殿助康俊の儒臣たり、延寶五年正月廿四日歿す。

菊池耕齋

元春の子、京師の人、東勾と號す、儒を以て薩摩侯に仕へ秩五百石を受く、天和二年十二月八日江戸に歿す、年六十四。

菊池武雅

名武雅、通稱舍人、字子師、初名摶、字九萬、號鵬溟、後牢隱、薩摩儒菊池耕齋の三男、林鵞峯の門人にして昌平校の學頭たり、元祿八年江戸にて高松節公に仕へ祿三百石を受く、韓使と筆談す、韓使大に感す、爾時名を舍人とせしは、韓使に官吏と思はせむ爲といふ、元祿十六年藩學にて孔子を祭る、舍人其主任なり、享保五年七月歿す年六十二、遺集赤穗義人錄十七卷あり、未世に出ず、

官　歷

元祿十八年十月五日祿三百石給され中寄合儒者、後三百五十石先手頭格、子左膳家督を繼き、二百五十石大小性、寶曆二年十二月十二日改易さる。

菊池武信

名武信、通稱八右衛門、號崇心齋、○讃岐の史蹟を調査せし人なり、元祿六年十月廿一日歿す、年八十五。

菊池武韶

名武韶、通稱左膳、武雅の嫡子、○享保三年父の祿を嗣ぐ、寶曆二年十二月故あり祿を奪はる、○子武充、通稱波江、改稱順治、父に連坐して放たる、天保二年七月十三日父子共五山の請に因り赦さる。

菊池五山

名桐孫、字無絃、通稱初左太夫、後佐太夫、號五山又娛庵、繩武の弟、○寛政九年出奔、文化九年赦免、文政八年武雅の家を繼ぎ高松藩に仕ふ、記室となる、嘉永二年四月致仕、六年六月歿す、年八十四。○江戸市河寛齋に學び詩名世に高し、○著書、五山堂詩話十六卷、○題畫小詩、五山堂詩話補遺等あり、○詩佛、五山、細庵、此合集を三家妙絶といふ、○五山の落款を書く時五字常に頭を太くす、文晁が晁の下を太く書くが如し。

菊池黄山

名武賢、字庭實、初名元仲、通稱八右衛門、號黄山又嵩(スウ)溪、清河牧又別に綾小路左太夫又入江只吉とも稱す、增田正宅の次男、高松人にして菊池家中興の老儒なり、○宮村經弼に學ぶ、後岡井氷室に左傳を受く、詩文書畫及武術を能す、寶曆初講道館儒員となる、經學篤行、門人數多あり其中芝山最も著はる、安永五年三月朔日歿す、年八十、○謚安靖處士、○自作壽藏銘、讃有愚民。字曰庭實。大喜過望。能事已畢。○奥村無我及片山志摩後藤頼貞芝山父)碑文は其撰なり。○七十の賀に、芝山は序、長洲は詩を贈る、又芝山集に、題黄山先生畫鶴詩あり。著書、讃州府志覘面集あり。

武賢又和歌を能くす、存ふる我身の昔し思ふにもうしと見し世を今は忘れし

明和乙酉之春　入江只彦

祖父增田太兵衛初勘定奉行手代、貞享三年藏奉行後故ありて改易され、其子八右衛門增田を改め菊池と號す、寶曆十三年小寄合より御目見儒者となり、其子八太夫中寄合代々儒者となれり。

菊池室山

名武保、通稱八太夫、改稱八右衛門、號室山、武賢の養子、實は常福寺法專の末子、五山の父なり、○實曆五年林家に入り昌平黌に學ぶ、又中村蘭林に就く後歸藩し講道館儒員となる、天明五年七月歿す。

菊池守拙

名繩武、字萬年、通稱八太夫、號守拙、又六友、五山の兄、武保の養子、實は池内清三郎の次男、○安永三年栗山に推選せられ、林家に學び詩文を能す、八年講道館儒員文化二年其總裁となる、文政五年四月歿す、年六十九。

菊池藻洲

名武幹、通稱初直藏後八太夫、號藻洲、繩武の嫡子、○文化八年碧海と同じく林家に入る、十一年講道館儒員となる、武幹又書を能くす、天保五年四月歿す、年四十七。

菊池惕所

名武章、通稱章之進、改稱八右衛門、號惕所、その邸を醉香邸と云ふ、武幹の嫡子、○天保六年豫州近藤篤山に學ぶ、十一年歸藩、十二年儒員、弘化二年林家に入る、元治明治間從軍、明治三年三月歿す、年五十一、○子あり、武修といふ。

菊池高洲

名武矩、字周夫、通稱助三郎、號高洲、本加藤氏、香川郡由佐人、高松藩士菊池徐風の養子となる、○初黃山に學び後京にて齋必簡に學び古文辭を修む、又國學に通ず、又書を能す、由佐冠纓神社の書の額あり、文化五年七月歿す、年六十二、墓は綾川撰文。○著書、史記文訣二冊、堀川夜討文論、詩經管見十冊、讃岐孝子傳二十冊、阿州祖谷紀行、筑紫包二冊、高洲文集、雞肋集二冊、高洲雜記十冊等あり、○友安三冬、加藤西郭、岸田茂篤皆其門に出づ。

菊池秋峰

初名武晋、後改名藎、字修夫、通稱新三郎、號秋峰、五山の養子、○嘉永五年藩に仕ふ、明治四年致仕、東京に寓す、十五年頃歿す、書及畫を能す。○子香橘、通稱得之助、改稱香平、明治元年講道館素讀指南、同四年正月父祿二十石を繼ぐ。

菊池香橘

通稱得之助、改稱して香平と云ふ、秋峰の子、明治元年講道館素讀指南、明治三年皇漢學教官となる、明治の末年歿す。

鬼無半山

通稱甚三郎は天保五年十一月香川郡上笠居村に生る、夙に學を片山沖堂及山田梅村に受け詩書を能くし、隣里の子弟に教授す、後殖産に志し、力を公益に竭し、且つ農家の副業を奬勵することに貢獻す。殊に鬼無に於ける果樹特に林檎の栽培の功勞者にして、夫れがために苦心慘憺せしも遂に今日の盛大を爲す、功により官より木盃及賞狀を陽ふ、その後斯業の發達に意を用ひしも明治四十年一月十一日病沒せり年七十四。

吉補

號吉補、香川郡天福寺住僧、○書を能す、從學の者頗る多し、岸田月窓も其門なり、天保頃の人。

九峰

號九峰又拙者庵、又顧鑑室、諱主拙後淸拙初越前大安寺にて學ひ後三野郡仁保常德寺第四世となる、俗姓小山氏、○書畫を能す、寛政九年九月寂す、年六十七。

玉泉

名昇道、號玉泉、高松人、○詩畫又篆刻を能す、京に寓し、後枚方光照寺、又伏見西養寺に住す。

玉芝

名壽滿、號玉芝、高松人、細谷松坡の妻、○蘭石芝石を畫く、明治十一年一月歿す、年七十。

瑛

高松市大護寺第八世の住職にして閑雅道人と號す、佛學の餘技として竹石に學んで畫を能くす、印に神光とあり、俗稱森某の子(中の村住)市原陶々と親しみ好し、先代第七世慈實の弟子なり、天保十二年十月十五日寂す、左の弟子あり、孰れも勤王僧なり

寶英　寶澍　寶鎧

義立（僧）

一名法水、字洗心、號松莊、西讃の人、牧詩牛の友人、著書、松莊道人藁あり、○此人奈良松莊の前身なり、（奈良松莊の項參照）

李白　一杯一杯又一杯。一日須〻傾三百杯。戲取二先生詩句一算。一年十万八千杯。

徽石

綾歌郡西分村善福寺の僧にして詩書畫を能くす、長らく木田郡氷上村常光寺に寓し居たり、明治二年頃寂す、年七十餘才。

汲霞

丸龜疊屋町明石屋某、木長に學んで俳句を能くす、安政頃の人。

幾曉

安永頃高松の俳人、山風舍と號す、麥浪の門人。

麥浪先師七とせの忌に

七文字は流れてはやく月更ぬ
傾城のとほし火飽てほたる哉

其岳

豊田郡河内村大北五郎兵衛、嘉永頃の俳人。

淇水

丸龜蘇鐵屋敷見附屋、嘉永頃の俳人。

箕柳

は幼名を新吾、後勘三郎と稱す、俳名栗陰齋箕柳、木田郡牟禮村伏見氏、性恬淡にして寡欲同情心に富む、俳を好み尾張の甫、羽洲の指導を受け其堂に入り、高松の穗屋等と深交あり、又花道は正風遠州流を、茶道は千家表流を學び何れも能くす、明治三十年三月三日沒す、年七十餘歳。

辭世　飄れんとする時しろし草の露

金陵

號金陵又琴陵、又獨角、又獅子窟と云ふ字宥怡、金光院住僧、文化十一年入院、文政七年隱居す、○書は大雅風を學び又詩文俳句を能す、弘化元年十二月二十日寂す、年六十一、又畫譜に名牧鳥、字浪仙、號金陵とあり、或は同人なるべし、後考を俟つ。

龜山

高松西通町龜田屋(楠氏)安政万延頃の俳人。

龜水

龜水、南畫を好くす、下笠居南原氏ならん、弘化頃の人、餘嘗つて、小簑瀑布の眞景を寫せるを觀たることあり。

キ號索引

金岳(松平)　居敬(藤本)　杏園(紀)
玉泉玉芝、岐陽、琴峰(京極)琴水(草薙)　義平(日下)
玉來山人(芝山事)　橘陰(小橋)　義勝(三田)
九萬(佐々木)　龜溪(齋藤)　丘霞(庄司)
玉民(尾池)　琴泉(遠藤)　九山(吉田)
玉峰(山田)　錦江(保井)　橘舍(村岡)
鳩溪(平賀)　杏隱(六車)　旭峯(森)
龜峰(中川)　玉枝(原田)　九井(築地)
宜翁(竹庵)　玉江(神原)　琴堂(高橋)
九華(中村)　玉洲(藤田)　牛山(小國)
九峰玉僨(阿部)　休意(增田)　紀米居稽(村山)
漁村(村上)　九江(玉楮)　徽(竹石事)
琴翁(竹石事)　久敬(六車)　享平(尾池)
龜石(寺島)　基(モト)資(野田)　久中(良齋名)

毅順（藤村）　錦江釣叟（立齋事）　龜陰（松平）
舊翁（顯昌）　玉城（日柳）　龜山道人（德巖事）
季明（木村）　義門（守屋）　希夷（葛西）
規方（山本）　恭齋（市河）　徽（石原）
菊園（河地）　卉畹（千野）　橘井（岡内）
吉時（寺島）　吉環（馬場）　九淵（馬場）
其淵（吉田）　杏林（渡邊）　居敬（津坂）
葵水（渡邊）　杏圃（池口）　欽堂（黑木）
金鱗（三井）　葵陵（三谷）　橘齋（松平金岳）
毅（三木）　九萬（菊池）　龜山（玄甲庵）
金門（中村）　久成（小河）　久成（兒島）

○ユ之部

宥範僧正

は那珂郡櫛梨村の人にして文永七庚午年に生る、俗姓は岩野氏（或は松岡伊右衛門の子なりと傳ふ）初め大貳房と稱せり、夙に佛門に歸し鄉里の新善光寺に入り淨土敎を學び、剃髮して宥範と改めたり、年十七香川郡無量壽院に入り、覺道僧正に師事して密法の玄奥を受け、更に三谷寺に至りて倶舍論を聽き、後高野に入り又東國邊の諸寺院に至り顯密の奥義を極め、元弘頃歸國して善通寺に住し寺門の興隆に望む、誕生院及び五重塔は宥範の盡力によりて成りしものなりと云ふ、後年琴平山に隱栖せり（或は曰ふ金光院に入り金毘羅宮の別當となれりと）觀應三年七月朔日寂す、年八十三。應安四年三月僧正位を贈らる。著書、妙印錄あり。

宥　算

は高野山の學匠、讃州の人姓は佐藤氏和州に來て出家す、年十八、登山し孜々として

怠らず、寛文五年北室院に住し、翌年龍光院の附囑を受けて移住す、貞享元年無量壽院に移る、最も俊秀を以て顯る、元祿二年學侶行人階班の爭糺明の爲めに、東府に至て病を廳所に發して同年七月十五日俄然在番所に寂す。

宥盛

は初め秀嚴と云ひしが金光院の院主となりて金剛坊と稱し、金刀比羅大權現の別當職たり、宥盛大權現に奉仕するや赤誠を捧げて神明に奉仕し、一念に國家の安穩に復せんことを祈り且つ身心を潔淨して山籠りし、屢々靈驗を現はせり。慶長十八年「我れ永く當山を守護せん」と云ひ深夜風雨咫尺を辨せざるとき忽然として其影を隱せり。是れ實に正月六日の夜なりき。爾後社殿を營み其靈を祭りて威德殿と稱す、其功績は遂に天聽に達し安政四年六月廿七日勅して大僧正を贈らる、明治初年嚴魂神社と改め祀りたりしが、同三十一年祭神の舊跡地に社殿を新築して遷座あり、之より世に奥社と稱す。

宥遍

宥遍の先は高木隼人信好に出づ、信好細川勝元に仕へ應仁中戰功あり、綾歌郡坂本邑を領す、子左兵衛信武その子但馬介好政に至り宇多津に移る、數世の後高木孫兵衛材官を以て鄕邑を服す、祿四百石にて生駒氏に仕ふ、弟與左衛門亦三百石を以て生駒氏に仕ふ、その弟半十郎亦三百石を受く、其の後惣兵衛、右馬助、熊之助相傳ひ、與左衛門に至り侯國除さる。與左衛門子二人あり、長子卽ち宥遍なり、解行兼有を以て世に名あり、嘗つて後水尾天皇より袈裟を賜はりしことあり、○高野山淨菩提院に住し高松の無量壽院及弘憲寺を攝せり、逸話としては或時東都に向ふ途中劇客三人に路に遭ふ、路傍の大樹を拔き之を擠す又高松藩士堀田某の家に赴きし時、役夫七人にて漸く動かす程の大石の水盥を一滴の水も滅せずして之を安ずと又平生大石を弄び現に弘憲寺中にありと云ふ、斯く程勇力ありし人なりしと。（全讃史、縣史）

法印宥運

小豆郡坂手村觀音寺第二世の住職なり、當時開山日尙ほ淺きの際克く其の興隆を圖り克く其の寺務に勵み、傍ら求聞持の法百遍を修し、且聖敎の手抄頗る多し、學深く識高き高僧として尊敬を受くること、多年後ち選はれて高野山某院に轉住せり、寛文十二年六月一日遷化す。

宥猛

字は法洲、翠篁と號す、山田郡寶幢山三谷寺主、三溪の門に詩文を學んで之れを能くす、安政頃の人なり。

由佐氏

は藤原秀鄕十四世の孫、常陸國益戸の城主、下野權守顯助の後也、顯助足利尊氏に從ひ建武二年の役に京都にて戰死す、尊氏是を愍み、其子彌次郎秀助に香川郡井原の莊司を賜ふ、細川賴之城を鳥屋の岡に築くに及んで秀助をして是を守らしむ。

秀助の子又六秀行、四郎左衛門、秀行の子四郎右衛門秀政、秀政の子次郎右衛門助盛、應仁元年山名細川の亂に勝元に從ひて功あり。助盛の子左京進秀盛、秀盛の子平右衛門秀武、三好氏に從ひて戰功あり。天正十年土佐元親千餘兵を率て來り攻む秀武固く守りて降らず、元親攻る事能はず兵を引て退んとす、秀武兵を冠纓山に伏て自ら出て進み擊つ、伏兵起て大に敗る、敵將稻吉親八郎を獲たり、元親怒りて兵を進めて來り攻る事急なり、秀武遂に降る、是に於て秀武をして三谷景久を攻しむ秀武伐て是を滅す、元親豊臣公に降るに及んで仙石氏に仕ふ、長子の三郎五郎、秀景豊後の役に戰死す、季子久右衛門生駒氏に仕ふと云ふ。由佐氏は代々繼續し當村に居れり、今の村長由佐圭太郎氏は其末裔なりと云ふ。

由良遠江

山田郡上田井村由良山城主、蓋し十河氏の麾下ならん、天正前の人。

由佐貞幹

名貞幹、香川郡由佐人、天保頃歌を詠ず、○栗洞展觀錄にあり。

由佐敬之

名敬之、香川郡由佐人、天保頃歌を詠ず、○栗洞展觀錄にあり。

雪女

雪は山田郡(木田郡)西植田村字稗山、南直次の女、幼より性、貞潔孝心深し、家貧窮にして常に人に傭はれて生計を立つ、然るに父罪を犯して刑死されんとす、雪悲嘆やるせなく代つて刑死されんことを哀訴す、時に明治五年にして雪女二十三歳のときな

り　されど公法破り難く、吏懇にさとして解得せしむ、と云へども人々をして哀泣悲痛せしむ、至孝の者なるにより名東縣より金五圓を賜ひて褒賞すと。

ユ號索引

友鷗（小西）　裕齋（藤井）　融海（赤澤）
幽芳（梶原）　遊石（鴨田）　遊圃（塩田）
熊泉（鈴木）　楢溪（漆原）　宥存、宥範、有竹（細川）
有芳（細谷）　幽谷（多田）　有道（岡内）
有恒（岡内）　遊雌（堀）　有隣（加藤）
雄雉（梶原）

○メ之部

妙瑞

高野山學匠、字は慧課、讃州三野郡の人、姓は田淵氏、十二歳同國威德院に於て慧了に從つて薙染す、後登山交衆し、寶嚴に住す、後如意輪寺へ轉住し、英同に中院西院の法を受け、又安流を維寶に傳受し、小島流を南院敎榮に受く、寛保三年九月進具、圓通寺を嗣ぎ、兼て和州久米寺及弘福寺に住し、又勸流を東寺賢賀に受く、撰ぶ所の大疏鈔卷、寶鑰見光、鈔三卷等二百有餘卷あり、○享保五年寂す。

メ號索引

明卿（雨森）　眄柯（太田）　明善（狩野）
明清（池田）　明則（山室）　命休（增田）

○ミ之部

三井大炊貞次

琴平町西山城の城主なり、天正前の人。

三好隼人佐

は十河存保の老臣にして平木城主なりしが、天正十年八月頃は存保の名代として十河城に居たりしが、同十一年五月土佐元親に迫られ庵治浦へ退き、後備前へ遁れたりと云ふ。

三木高長

三木の郡主は三木紀伊守橘高長也、初め高岡村に居城せしが其後平木村に移り居城す故に俗平木殿と稱す、然るに高長三木全郡を領するに非す、朝倉村池戸村等は夫々城主あり、除外されたり、此人は長祿頃沒して其祠絶ゆ、因て安富氏其後を承け平木を居城とせしが後盛方の時に至り虎丸城に移りたり。

三谷出羽入道

木田郡阪元出羽城の城主なり、天正頃の人。（參照）出羽城阪元に在り、三谷出羽入道之に居れり。（讃）

三野高包外四氏

高包は三郎太夫と稱し、壽永年間に於ける三豊郡勝間城主なり、壽永三年源平戰の起るや左の諸氏と共に平家に背いて、源氏に應じ軍勢を率て都に上ぼつた、此等も皆同族にして三豊の住人なりしならん。

三野首領盛資　三野九郎有忠　三野首領太郎　同次郎

其一　三野大炊頭

三野家は三野物部にして代々讃州に采地あり西讃の豪族なり其系綾高親に出づ元暦元年綾高親が三野郡大領に任ぜられしより姓を三野と稱す、菊右衛門は其嫡流なり、父を大炊と稱し詫間城に居りしものゝ如し、大炊は足利將軍義輝の時軍法違反の罪によ

り采地を沒收せられ浪々の身となりたり。

其二　三野菊右衛門

は三野大炊の子なり、性勇猛にして香川信景の老臣となり、左記の如く各地に轉戰して功あり、香川家亡び仙石秀久讃岐に封せらるゝに及び、三野郡に退きて郡司となる次で生駒近矩當國に封せらるゝに及び天正十七年菊右衛門父子六人を召抱へ、左の祿高を給せられたり。

三千石菊右衛門、千石四郎左衛門、二百石嫡子孫之尉弟理兵衛淺野村に知行あり。四百石同庄左衛門、寛永十二年十月沒、嫡子權六、四百石彌右衛門。

菊右衛門は香川氏の部下にして天正三年頃の勝間城主、同年金倉顯忠を征する時一方の大將たり、香川之景の老臣にして天正三年信長の許に使ひせし人、天正七年十佐元親兵を率ひ羽床を攻る時香川氏の命を受け河田七郎兵衛と共に先鋒を勤む、香川氏亡びて後生駒近矩に仕へ祿三千石を以て老臣に召抱へられ、香東郡淺野村に采を受け北の坊に住す、天正十四年十二月秀吉の命を受け、九州島津征討軍に參加し豐後戸次川に於て苦戰せしも身命を全うして歸りたり。

其三　三野四郎左衛門

は菊右衛門の子なり、初め孫七、父の少年の時土佐へ人質となつて行きたり、祿を受け采を淺野村に食み生駒一正の老臣たり、父に劣らざる勇士なりしと見へ關ヶ原の戰に生駒一正に從ひ、田中兵部大輔金吉法印と共に石田三成の本陣に向ひ突擊し、四郎左衛門等必死に首を爭ふて一正を助けて奮戰し、忽ちにして石田の軍を擊破し、島左近蒲生備中父子戰死す。一說に一正は大谷刑部松尾山より討下る先手と戰ふ、此時四郎左衛門は刑部の部將大谷源左衛門を組打にし仍つて一正より感狀を賜はりしと。

四郎左衛門は天正の末祿千石、弟共は二百石より五百石迄にて生駒高俊へ召抱へられ高俊の國家老となり、政務を預り居りしが高俊國除の際政事向作法不正の爲め、寛永十七年八月丹州宮津京極丹後守に預けられしも正義派たりしため、旗下預の待遇を受けたり、後豫州松山へ五百人扶持にて召抱へられしと云ふ。讃州府志に據ると四郎左衛門は生駒四君に歷事し、寛永十九年四月三日豫州に於て沒し、法名を月山宗園居士と云ひ寺町地藏寺に位牌ありと、而して四郎左衛門以下の系左の如し。

子孫之尉あり、生駒家にて二千石を領したり。寛永十二年十月四郎左衛門弟庄左衛門病死す、嫡子權六其時十八才にして能き生立なりしも助左衛門遺恨を以て本知四

百石の内那珂郡三條村にて百石を沒收し、香川郡川部村二百石計を宛行ふ、依て四郎左衛門一類不平なり、理兵衛は四郎左衛門弟にて庄左衛には兄也、弟彌右衛門、庄左衛門四百石、理兵衛は兄ながらも二百石淺野村にて知行ありしも病氣とて二百石沒收さる、庄左衛門は大番組を勤め栗熊東村にて當分五十石、寶永二年病死し跡は浪人となれり。

三谷掃部景晴と其子孫

三谷掃部景晴、通稱彌七郎（後兵庫）は木田郡池田山の城一に王佐山城の城主なり。（參照）　池田山城池田村にあり、王佐山東の小岡ならんかと今讃史には言へり。三谷掃部景廣之れに居れり、景廣曾祖三谷彌七郎景晴射術を好くす後花園院、永享二年京師に參勤す其時奉勅、妖鳥を禁中に射る、その功源三位頼政に比す、帝之を嘉し兵庫頭に任ず、是より兵庫頭と稱す、彌七郎を三谷氏の通名とせり、景晴後名古屋の役（尾張）に戰死す、

三谷景久

は景晴の子なり、驍勇にして善く戰ふ、文明元年九月廿五日寒川左馬允が居城に押寄せ夜戰をなし民屋を放火す、寒川氏怒りて文明二年十一月十九日三谷の城に寄せ來る景久抗戰せしも敗れ走りて王佐山の城に入る、寒川氏三谷を放火して王佐山の城を攻む、城險しく守備かたし、戰を交へしも味方死傷者多く遂に拔く能はずして退く。

三谷景廣

景久の子なり、京師に於て細川政元害に遇ふの後香西氏と好からず、永正五年香西氏二千五百人を率て山田郡に入り、三谷の城に押寄せ四面より圍む、景廣逃れて王佐山の城に立籠りて拒守の備をなす、香西氏城兵の少きを侮り追手搦手より攻上る、景久搦手の敵近づきたる時、塀の手の釣石を切り落せしかば若干の兵石にうたれて死傷せり、平尾より攻上りたるものは輪木を切り落とされて死するもの少なからず、追手の攻口は上るべき方便もなく、彼是する内に日も暮れかゝりぬれば軍を收めんとする處に城兵今は得たりとこゝかしこより礫を打て攻め合ふ事七八度に及べり、日既に暮ぬれば相圖の螺を吹て攻手次第に引上ぐるを城兵四方八面より鬨を作り攻め寄するにより、城兵隊を亂して敗れ走り死傷七八十人餘とぞ聞えし。

景久の子兵庫頭光廣、光廣の子掃部頭景廣の世に至り、長曾我部氏由佐秀武をして攻めしむ、是れと坂本河原に戰ひ軍敗れて滅びたり。

西讃府志には三谷氏は、景辰の弟景之(一に景隆に作る)三谷の城に居り三谷八郎と稱す、景之の子又五郎景包、景包の子彌七郎景晴といへりとあり。縣史には三谷の本城を三谷の城となせども、讃州府志並に名勝圖會には池田山城となせり、現に兵庫頭の墓が池田に在りしを見れば此城を三谷の本城となす方正當ならんか。因に三谷兵庫頭景晴の墓池田にありて、近年三谷に移せり。

三谷掃部左衛門

三谷掃部左衛門は木田郡三谷の城主にして、有名なる弓の名人、彌七景晴の後なり、香西氏の老臣にして元成、元載、佳清の三世に仕へて其戰場に外るゝことなし。天正十年八月五日土佐軍進入の時西光寺前第二陣の軍使を爲せし人。天正十三年香西氏滅びて浪人すと、されど百六歳以上長命せりと云ふ。

宮脇織部

香川郡松繩城の城主なり、讃州府志に曰く、松繩城には宮脇織部之に居れり。宮脇六太夫及びその支流多し、宮脇氏の祖に熊野清光と云ふものあり、熊野權現と共に田中村に居る。中頃十河(山田)に徙り後松繩に住し、同時に熊野權現も遷せり、即ち宮脇氏の祖なり。

宮脇長貞

其先は紀州藤代の人也、應仁二年讃州香東郡宮脇村に來住し、姓を宮脇と更め香東郡松繩村に城き野原庄(宮脇、上村、中村、中黒)太田庄(松繩、太田、伏石)の七村を領せり、紋所藤丸内に叶字也とあり。

宮脇元長

は彈正後兵庫と改め又半入齊と號す、長貞の子なり、十三歳の時安原國廣の養子となりしが山家住居がいやになり逃げ歸り後常州に遊び佐竹家に仕へ、五年を經て歸り香東郡高丸小竹砦に住す、天文中同所に於て歿す、其戰績左の如し。

永正三年細川讃岐守六郎澄元阿州勢を卒て山田郡に來陣す、元長二百餘騎に將ゼして細川氏と戰ひ大に之を敗る、同五年香西元定軍を山田郡に發し元長に兵二百餘騎を授け勝を得た。天文十八年香西元成細川氏の爲めに五畿内に出張した時、元長は讃料城に入り元定に代り軍務を指揮して勇名を四方に顯はしたり。

宮脇義長

又兵衛と稱し後賴母之助又長門と號す、彈正の弟なり、永祿年中織田信長に屬し天王寺に住す、荒木村重の反するや信長の命を受け是を討ち功あり、天正中光秀の信長を弑するや秀吉に屬し山崎に於て勇戰す、秀吉より卽時の賞として長刀を受く、後天正八年播州大守池田信輝に仕ふ、同十九年八月五日岡山に於て歿す、子長重、其子長信其子長治等皆池田家に仕ふ。

宮脇長利

幼名竹松、九郎兵衛と稱す、元長の末子なり、宇喜多秀家に仕へ、文祿の役朝鮮に渡り武名を顯す歸朝の後秩四百石を給ふ、慶長五年關原の役十九歳にして拔群の働を爲したれども、秀家の指揮に從はざるとて賞せず、因て伊勢に走り慶長六年池田輝政に仕ふ、元祿七年春致仕して讃州に歸り生駒高俊に仕へ扶千石を給ふ、寛永十七年前野助左衛門と中惡くして浪人し因州の池田家に仕へ、寛永十三年十一月十九日因州にて歿す、年五十五。

宮脇彈正と兵庫

初若狹後彈正と稱す、元長の子にして松繩の城主なり、元龜元年香西元載に屬し手勢數百人を率ひ備前兒島に至り加陽の城を攻め大に武勇を顯はす、天正十年土佐元親の大軍綾郡に攻入の時弟兵庫と俱に香川信景の兵と戰て大に之を敗る、天正末年頃の人なり。○妹某は香西氏の老臣植松備後の妻なり。○其戰績左の如し。

天正十年八月五日土佐軍香西へ進入の時西光寺前の先鋒を爲せり、天正十三年五月佳清が香西を引揚げ長尾に移る時盡力せり。

兵庫は長治と稱し元長の末子なり兄と俱に松繩に住し、同一行動をとりし人なり。

宮武六右衛門

香西氏の部將なり、天正十年八月五日土佐軍進入の時、天神郭を守りし人、六右衛門は銃砲の上手なれば敵數人打落し敵又乘入る時鎗を取て突落し、後太刀にて數人切伏せ手を負せて戰死す。天正中宮武氏の女某上笠居村養福寺主敎順の妻となると云ふ。

宮本助左衛門

其弟作右衛門塩飽の海賊頭にして本島の人、天正十四年十一月秀吉の命を受け島津征討軍に參加し、讃岐軍人輸送の任務を帶び九州に出張せしが讃岐軍豊後戸次川に於て敗績せしを以て其殘兵を收容し歸國したり、後世に至り本島に宮本傳太夫同傳右衛門等あり其子孫なり。

宮本佐渡守

は本島の人秀吉は天正十九年三月十一日に宮本佐渡守に鎧一領を送り、水夫六百五十人船三十二艘を徴發して釜山方面の水先案内たらしめたり。

溝口飛彈

溝口飛彈は木田郡池田村池田城主なり。大日記には溝淵に作る。

（參照）池田城、池田村字本村にあり、城屋敷と云ふ、初め池田遠江景光之れに居りしが後溝口飛彈之れを守れり、植田氏の麾下なり。

三井松堂

名篤、字伯敬、通稱光慶、號松堂、高松藩眼科醫、○沖堂に學び詩を能す、明治初年に歿す、年五十餘。

三井嘉暢

名嘉暢、通稱豊治郎、那珂郡苗田人、○寶暦中靜齋に學ぶ、其門人姓名錄にあり。

三井雪航

名は重清、字子潔、通稱隆齋、號を雪航と云ふ、寛政七年那珂郡田村に生る、幼少の時琴平の醫家三井氏を繼く、長ずるに及び家業を承けて醫業に從ひ、傍ら儒學を修めて名ありしが其の後弘化年間備後に遊び、菅茶山の門に入り學業を大成し、詩文を能くす、賴山陽、篠崎小竹、後藤松陰等と交り詩文を以て應酬し詩客の名を縱にす、晩年學舍を起し子弟を敎授し、名付けて正風館と稱せり、地方の學書是れより大いに興起せりと云ふ、嘉永四年六月歿せり、年五十六。著書、雪航翁遺集は嘉永癸丑（六年）暮春後藤松陰が序文を書き而して出版された、其トビラには象山愼雲樓藏版とあり又別に芳怨傳の著あり本書は未刊なり。

三井竹莊

通稱莊三郎、諱は子養、竹窓と號す、嘉永五年正月琴平に生る、三井雪航の孫なり、初め醫術を高松の醫師橘尙賢に學び、後東都に遊び漢學を重野成齋に受け、また獨人「ルウトコフ」氏に就きて獨逸語を修め、「ヤウケッコ」に從ふて物理、化學、解剖。生理等の學を研究し、業成り歸つて高松、松山等の病院に勤めて專ら醫業界に盡すところありしが、後琴平に歸りて一醫院を開きて斯業に從事し又此間選ばれて縣會議員となり公益に盡せり、傍ら好みて忠孝義烈の詩を賦し文を作るを以て樂みとし、其の作るところのもの數百首に上る。又嘗て本郡の勤王家日柳燕石、美馬君田の傳記を作り之を日柳操志、櫻水操志と號け、明治十八年江湖に頒ち其の英名を後世に傳へたり、明治二十七年六月二十三日歿す、年四十二。

辭世詞

慨然夙欲學英雄。書劍多年西又東。今日回頭眞是夢。空過四十一春風。

竹窓遺稿三冊大正十三年四月嗣子謙三氏之を出版し有志家に頒てり。

三井善庵

名善庵、道安の子にて梅山の弟なり、文化頃眼科醫、○浪華に遊び、諸書を參考し、銅關醫通十六卷の著あり。

三井金鱗

名愿、字文蔚、通稱初公圭後秀造、號金鱗、丸龜醫、本那珂郡吉野人、○弱冠醫を大坂吉益氏に學ぶ、又長崎にて蘭人シーボルトに就き研究す、業暇詩作す、明治廿三年二月歿す、年八十二。

三好應岸

通稱又八郎、號應岸、天保弘化頃の人、○畫雪溪に學ぶ。

三好幸祿

名興、字是力、號幸祿、文化頃高松人、○畫を能す、畫譜にあり。

三好對鷗

名暢、字子美、通稱與市左衛門、號對鷗、高松藩士、○漢學は片山恬齋に受く、詩歌書畫俳茶琴棋等皆能す、慶應頃沒す、○谷本雲齋の妹、某家に嫁して離緣となるもの又本に歸る時對鷗之を世話す、其狂歌うんさいの底の意は知らねどもこゝのもんぢや

と思へ妹よ、○春曉、一囀嬌鶯呼夢回。春塞燼底火全灰。苦吟昨夜梅花句。忽到今朝入手來。

三好清次郎

小豆郡草壁村下村の人、屋號をかな屋と云ふ、故に通稱かな清と呼ぶ、燒酎を製し、之れを鬻ぐを業とす、本業の傍ら學を好み書を能くし又俳句に巧みなり、吟詠頗る多し、享和二年に生れ、明治元年九月家に沒す、年六十七、霞章はその俳號なり。

辭世　暮れて行く秋の眺や草もみぢ

三好信彦

小豆郡草壁村下村の人、家世々福田屋と稱し、雜貨の大店なり、性風流を嗜み殊に俳句を能くし、俳號を可凉と號し吟詠頗る多しと云ふ、明治十六年四月三十日歿す。

辭世　空蟬の無事なすがたや蓮の上

三好京太郎

名は義清、殿山と號す、鵜足郡炭所西村の人、其先は阿波三好氏の裔光清五代の孫なり、幼より學を好む然れども家貧にして學に就く事能はず、日々三好玄忠の塾庭に遊び他人の讀書するを暗記す、某日父に從ひ榎井村に赴き夜中大學を暗誦しつゝ歸る、忽ち後方より聲あり、若輩何をか云ふと、義清徐ろに答ふるに實を以てす、父おくれて至り兒の無禮を謝し熟視すれば則ち日柳燕石なり、曰く敢て無禮なし暫らく此子を余に託せよ、然らは充分教育を加へ一角の人物にせんと云ひければ、則ち燕石の學僕となし、而して後氏は燕石の信任を得て如何なる秘密の席へも出入を許され、天川の役にも燕石の命を受け偵察の爲め行きたりと、燕石沒後は東京に至り品川、副島、福羽等の諸氏に交はり國事に盡くさんとせしが眼疾に罹りしを以て已むなく故山に歸り自ら殿山の地九段歩を開き耕樂亭を建て詩歌に親み、文人逸士と交り優悠自適し傍ら鄕黨の子弟を薫育しつゝあり。大正十年頃の人、氏は詩歌を能くす、其數積んで數百首に至る、大正十年川崎叱天是れを蒐め殿山雜藻と題して出版せり、其中一二首を左に錄す。

月照師

世をかこちみくつとなれば久方の月にまかへる胸の白玉

韓國合邦

日東政化及韓民。事々仁々日々新。八道風光收掌上。正知萬里太平春。

三好良好

高松の人、漢學を講道館に學び、明治の初年由良神社の神官たり、翠廼舍と稱し歌を能くす、大正十五年四月二十四日歿す、年七十四。

六道　いきしにのちまたいくたひゆきかへりむつのみちにしまよふはかりそ

三宅師鉦

名師鉦（モロカネ）、通稱十太夫、高松人、明治元年正月松平頼聰の家老となる、○歌を尙輔に學ぶ、明治三十年頃歿す、○海上雁、ほに上げて來る聲遠の初雁の八重の鹽路のあけぼのゝ空、中村尙輔判四十二番歌合にあり。

三崎龜之助

は安政五年一月丸龜に生る、幼より學を好み、性快濶大志あり、明治十七年帝國大學法科を卒業し法學士の稱號を得、直ちに外務省御用掛となり尋て外務書記生として米國公使館に在勤す、後交際官試補となり更に公使館書記官に任し華盛頓府に在勤せり爾來外務省參事官、內務省縣治局長に歷任す、明治二十三年以降香川縣第四區より衆議院議員に當選せしこと三回才名頗る政海に鳴る、此間東京法學院其他各法律學校に出講し國際公法の著あり、廿九年貴族院に勅任せられ、又横濱正金銀行副頭取となり財界に盡す處ありしが明治三十九年三月十六日前途有爲の才を懷て病歿せり、享年四十九。

讀米國史　よむままにまのあたりみるむかし人よくもものせりふみの跡かな

三木雲門

名毅、字士訥、通稱宗太夫、號雲門、三木武啓の弟、高松藩儒、寛玩翠の師なり○寛政元年講道館督學たり同十一年三月沒す、○著書四書類編（三冊板本）あり、天保六年深井修之に跋して雲門先師歿後數十年後嗣華陰出版せし由いへり。

三木半村

名篤、字周祐、通稱彌總左衛門、號半村又鷗洲、高松藩儒、亭號山高水長亭、○文化十二年講道館總裁久保城山に學び詩を能す、晩年釣を樂む、嘉永中沒す、○著書、天保八年欵乃一聲集を發行す。

三木據德

名初游藝後據德、通稱初勘四郎後宗太夫、同姓武啓三男、雲門の養子、○文化十年講道館講釋、天保六年使番、七年六月沒す。

三木分流

小豆郡池田村の人、名は審、字は君井、宋庵齋、暮川と號す、又雪溪の別號あり。元阿波の藩士、幼より畫を好み壯なるに及んで京都に遊び又江戸に適き清人宋紫石の門に入る、業成るの後本村に來りて光明寺に寓し悠々筆を揮つて年を閲し遂に留て家を成せり、寫生に長じ殊に動物を畫くに巧なり。就中鯛魚及曼荼羅は佳中の佳なり、丹精を凝らせし一軸の鯛魚一夜猫の襲ふ所なりしとすら傳へる。實に本島畫工の嚆矢なり、其の逸品は光明寺及香川郡の某寺に遺れり。其の外遺墨少からず寛政十一年七月歿す、年八十四。

（小豆郡史）

三木算柳

小豆郡池田村北池の人、幼にして畫を好み寫生畫最も巧みなり、龜山神社々頭の扁額張飛の畫は最も丹精を盡せしもの年代を審かにせずと雖も、或は三木分流の舍弟なりしと云ふ、畫號を楚江齋峯穹と云ふ。

（小豆郡史）

三木貫朔

小豆郡福田村の人、壯にして醫に志し大阪に遊んで醫學を研鑽し、業成り歸鄉し開業大に仁術を施す、本業の傍ら心を公共事業に傾け學校建築費の爲め官林拂下をなしたるを始とし、明治五年以來村役人副戸長、學區世話係、村惣代、醫務調査係、戸長、勸業世話係、郡醫學務委員等の名譽職に任じ各其の任を全ふす、明治十九年皇居御造營に付き獻金をなし又本村に石材御用を命せられしかば最も周旋に努む、且つ勤王家田中河内介の建碑に付奔走至らざるなし、餘暇を以て書畫俳諧茶花音曲の遊藝を樂みとせり、明治三十一年七月十四日歿す、年五十六。

（小豆郡史）

三木受益

名受益（ウケマス）、通稱利平太、高松藩士、○歌初は友部方升後中村尙輔に學ぶ、明治三十八年六月歿す、年七十九、○養子政輔、通稱政次郎、寺井吉謙の子、亦歌を詠む、受益と同年歿す、年四十五、○受益寄松祝松ばかり常盤ならむと思ひしは君を見あげぬ折に

ぞありける。

三木半雲

名讓、號半雲、高松藩士、維新頃梅村門人、○詩書を能す。

三輪可軌

爲造と稱す、高松藩士、歌を能くす、明治前の人。

殘花薫風　うすくこき青葉にましる遲櫻はなかあらぬか風のかをれる

三谷茂義

は彫刻師重五郎の男にして文化五年正月高松に生る、初め十治郎と稱し後ち茂義と改む、幼にして金彫の術を父に受け長ずるに及んで益々其技を勵む、天保三年十一月藩主之を嘉して苗字帶刀を許され初めて三谷と稱す、同六年斯道研鑽の爲め出府、弘化二年五月歸國、藩公の器具多く作製を命ぜらる、文久二年八月沒す、年五十五、大正三年縣敎育會を表彰す、畫家人物誌に名は重義、號石水、金屬彫刻の名工にして畫を能くす、安政五年八月歿す、年六十三とあり是は父重五郎の事ならん、且石水の號は陶濱の號なり。

三谷林叟

名林造、老後林叟と稱す、寶曆四年志度町に生る、○平賀源内と陶法を談じ其陶器を志度燒と稱す安永五年三木郡平木に陶す、寛政中屋島に移り樂燒に倣ひ屋島燒と稱す常に雅人を慕ひ、餘技畫を能す、嘉永元年八月廿八日歿す、年百、子孫分れて二軒となり其業を繼ぐ、本朝陶器考證に左の記事あり。

林叟は源吾の門人、三木郡平木村の產、明和五子歲より燒き始め文化二丑歲屋島潟元村に移住し八島燒と稱す。

三谷石門

名遷、字子喬、通稱清平、號石門、如牛、雪崦、恒心山人、城山獵夫、安安主人、三桃亭主人、鵜足郡阪本人、○海屋に學び山水を畫く、尤も妙なり、又書を能す、明治廿七年一月歿す、年五十三。

三谷堯民

通稱兵助、號は葵陵と云ふ、丸龜藩士にして江戸詰なり、初梅崖後南里に學び詩文をよくす、江戸藩邸學舍の助教となる、高朗公の寵遇を受け琴峯詩集に序せり、又高美君の棺銘をも書けり、弘化三年八月十四日沒せり。

三野象麓

名元密、初名必敬、字伯愼、通稱彌兵衛、號象麓、其先三野郡人、那珂郡榎井に移る父は喜昌、○齋靜齋に從ひ儒學を受け其高足たり、高松藩儒員となり、鄉會所講書擔任す、天保十一年正月歿す、年殆ど九十、著す所五家制令詳解、東讃復讐小傳、老子經古義等あり、○安永二年齋門姓名錄に三野元統、字伯愼とあり此人なり、○絲江臨汎、城口呼舟夕。江心生浪時。雨侵晴處去。雲逐望中移。笛響魚如聽。棹搖鷗不疑。忘機猶汎汎。一任晩風吹。○八十七歳の時紅葉の歌あり、歌は賀茂眞淵に就くといふ。

三野無逸

名無逸、字仲壽、通稱貞之進、號藻海、象麓の弟、寶曆十年榎井村に生る、父を喜昌と云ふ、齋靜齋に學び詩文を能す、兄に從ひ高松に移居す、寛政七年十一月十三日歿す、年三十六、○著書、藻海文集十卷及び詩書易論語解等若干あり、墓銘は菊池高洲撰す、○齋靜齋は安藝人、京都に帷を下し儒名高し、當時我讃より從學せし者、象麓兄弟其他多し、其名は齋門姓名錄にあり、析衷學は齋氏より傳へたりと見ゆ。

三野有裕

字は有裕、俗稱總八郎と稱す、那珂郡榎井村の人なり、父を喜昌と云ひ兄を伯愼及び無逸とす、友愛に富み兩兄出でゝ仕へ、或ひは遊學し殘るものは有裕の家に在りて克く父母に仕へ、二兄をして後顧の患なからしめによる、寛政二年九月二日歿す、年二十六。

三野謙谷

名知彰、字子剛、通稱初新藏後信平、號謙谷、象麓の子、○文化六年記錄所出仕、家學を承け詩文を能す、十年栗山異學禁令を行ふ、謙谷從はず高篠に退く、廣嶋に游び杏坪に從ひ、轉じて神邊に至り茶山に學び塾頭となり研學さる事久し、文政十一年復藩に仕へ小寄合となる、嘉永五年七月七日歿す、年七十。○曾て絲濱に居り對鷗亭と號す、○永富池堤防告成碑文其撰なり、○坐臨水石、石奇山亦奇、獨樂只魚知。願借巨靈手。向吾舊砌移。著書及筆記書數多あり、其中重もなるもの左の如し。

講谷雜抄、同詩文雜抄、骨董鈔、時賢文集、郭注莊子覆玄要言、齊子傳、觀漁園詩集、齋門姓名錄。

三野盤溪

名知充、通稱初辰之助、次信平、後彌兵衛、號磐溪、本高松藩士綾田松峰の次男、謙谷の養子、○昌平黌に學ぶ、元治元年歸て講道館に出仕す、廢藩後阿野郡富熊に敎授し又高松に歸り龜阜校敎員となり、後榮義塾なる私塾を開く、明治十八年歿す、年五十四。

三野喜敏

名喜敏、安永天明頃靜齋の門人、○天明四年喜敏が長藏既往談序を作りて、靜齋の點を乞ひし事あり、長藏は高篠村人。

宮井元錫

諱祖禹、字元錫、通稱清七、鵜足郡川原村の大里正敎盛の子なり、年十六にして職事を襲ふ。性慈善に富み施與すること多し、部民懷服す、明治五年十一月十八日歿す、年六十九。

宮崎巴陵

號巴陵、鵜足郡川津人、○鶴遊女史の父なり、○畫を能す、文化文政頃の人。

宮村忠藏

名は經弼、字は貞幹、號を荆山、性篤實古人の風あり、少きとき京師に遊學して中村惕齋の門に遊ぶ、業就つて國に歸り生徒を敎授す、母に仕へて孝なり、人の嘉言善行を聞き感奮して自ら勵みしと、元文三年戊午五月二十三日沒す、享年六十七。室磯貝氏一男を擧げしが殤して後なし、其の敎を受けし者二千餘人あり、中にも靑葉內藏助中村彥三郎、良野平助、菊池八右衛門、各儒を業として名あり、中にも公子一風君篤く先生を信じ玉ひ、其御子皆諸侯とならせられ、學校を起し玉ふ、先生の德の及ぶ所博廣にして人皆知らず惜哉。（藍窓茶話）

（附記）忠藏は惠公の時の處士にして愼公及其二弟も敎育を受けられたりと云ふ。

宮武靑洲

號青洲、文化頃東讃人、○畫を能くす。

宮武室山

名展親、字君玉、通稱全吾、號室山、高松藩士、宮武包叔の子、○文化五年講道館習字指南、文政九年六月沒す。

宮武七三郎

通稱七三郎、西讃人、○菅茶山に從學す、事茶山集に見ゆ。

宮武好水

名百折、幼名百介、本町川小仙次の子、宮武氏を嗣ぎ醫となる、○俳號好水、○裙につく葎もどかし里踊、雁なくや朝越寒し箱根山。

宮武丹崖

名正敏、字孟厚、號丹崖、三野郡比地大村人、○應擧に學で畫を能す、文化頃の人。

宮武梅宇

名高朗、字令終、通稱良齋、高松藩士、○沖堂に學ぶ、維新頃の人、年五十餘にて終ふ。

宮武唯壽

名唯壽、通稱初正太郎後正朔又正策、號如圭又青邱、高松藩醫正作の子、○文久三年奥醫師、明治三十一年五月歿す、年六十七、○歌を能す。

宮武直哉

名直哉、通稱初正立後尙齋、高松藩醫、○嘉永五年表醫師、明治三十七年七月歿す、年六十八、○歌は中村尙輔に學ぶ。

宮武七五郎

羽床村小野の人なり、竹内雲崖に就きて射を學び頗る其の術に長ず、高松藩執政木村默老、金毘羅參詣の途中竹内太長次宅に投宿して古物古書畫を觀、翌朝七五郎を召して

射を命ず、七五郎は羅鑠たる老翁にして鶉衣袴を着し四矢を發す、皆鵠に入る、尋て大的を射十二を發一鵠の中央より上下左右に十字形に貫通し、矢場の貫通點の距離毫釐も違はず、默老之れを見て大いにその妙を嘆賞し、尙種々射術の奥儀を聽いて歸りたりと云ふ、文化文政頃の人。

密　成

字密成、俗姓小西、三野郡人、備中にて僧となる、嚴島に廣島に轉住す、○天台敎を學ぶ、又西山拙齋に經史を受く、嘉永四年九月寂す、年七十六、著書、神國決疑編考證等十餘部あり。○某書に僧敏とあるは此人にて敏は二字名の略せるなり。

宮本綾浦

通稱直一郎、綾浦と號す、鵜足郡川津人、畫を初め黑田綾山に後中川馬嶺に學び能くす、嘉永頃の人。

宮本璋庵

名稼矩、字繩祖、通稱敬哉、號璋庵又六六洞天、晩年依竹嬾史又風月翁と號す、本琴彈山下人、富山潛齋に招かれ高松に移る、○詩文は中井竹山に、畫は介石に學び山水特に妙なり。嘉永三年五月高松に於て歿す、年七十五、墓は萬日に在り、○茶山集に宮敬哉、昇平樂事集に、宮繩祖とあり、○名稼矩未詳姑く某書に依る、畫譜に城矩とあり、此人の事にて城は其本姓などにや。

宮本園丸

名園丸、松平一樂の子、○歌を能す、明治三十一年二月十九日歿す。

宮脇長孝

名長孝、文化頃東讃人、○歌を能す。

宮本信義

名信義、通稱牧郎、香川郡宮脇人、○歌を能す、琴平神社主典となる、明治四十四年十一月歿す、年五十九。○寄松祝、動きなき巖に根ざす高松の千年を君が齡ともがな

宮田英太郎（來嶽人）

氏は大分縣宇佐町御幡高卿氏の長男にして、少壯笈を負ふて東都に出で刻苦精勵司法省法學院に入り佛人ボアソナード氏の薫陶を受け、業成るの後判官に任ぜられ、明治二十年高松地方裁判所に來任し、爾後大阪、宮津、淡路等の各地方裁判所に歷任し、大正二年退いて高松市に來り濱ノ丁に寓居し、後辯護士となり優遊傍ら自適吟哦に耽り居りしが大正六年十一月十八日病歿せり、享年五十六。

宮崎熊三郎

氏は綾歌郡坂出町寺町の人、夙に教育界に身を投じ、縣下斯界の重鎭として重きを爲しその教鞭をとれる、坂出尋常高等小學校は模範學校として文部省より薦奬され、身は奏任官の待遇を受け在職正に三十年に及び、門下に多くの俊才を出し弘く德化を布いた温良の君子であつたが、教育界を去つて後は鎌田共濟會に入り專ら育英及び救濟事業に盡す、傍ら坂出銀行の行務を督してゐたが大正十年三月十七日歿す、年五十三

宮野海石

名は爲久或は略して宮劣、號海石、梅薫園、鶯居とも云ふ、三豐郡常盤村流岡の人、溪詩文、和歌、俳句、繪畫等文藝方面に渉り何れも能くせざるなし、後坂出に移居し明治四十二三年迄坂出町役場の助役を勤め居たり、漢學は明治十三年比豐後日田に至り廣瀨林外に就き學び、繪畫は初原春軍後京都淺井柳塘(白山)に學び、俳句は花之本聽秋に學び、梅薫園鶯居と稱し坂出に於て芙蓉俳壇を組織し數多の門人あり、氏は先年來病氣に罹り意氣前日の如くならざれども尙文事に親しみつゝありしが、昭和二年八月十五日腦溢血にかゝり齡七十歲を以て逝けり。

俳句　たゝらふむかね鑄の寺や散る櫻

題八幡公過勿來關園

關門立馬咏春光。史上永留歌一章。前九後三民自服。英名千載與花芳。

明了（且過庵）

明了は宇多津の人なり、一夜夢に武藏守賴之召して我が念持の觀世音京師にあり、汝往いて取來れと云ふに、やがて其處に至り山門に入りけるに岩窟中に其像あり、明了は背負つて歸り賴之に献ず、寤て怪しきことに思ひしに翌日武藏守明了に命じて攝津國羚羊谷に行て絕海師を召せしむ、明了命を受て羚羊谷に至れば其處前に夢見し所に違はず、聞く人皆明了を稱して道祢ありと云ふ。

明印法師

は大内郡長尾東村、寶藏院の住僧なり、碩學の聞えあり、仁和年間菅公の當國に守たるとき此寺に遊び詩文の贈答あり、後延喜二年公筑紫へ左遷さるゝとき、明印小舟に搭じ公を房前の浦に迎ひ詩一詩を呈す、其後半に曰く「不期天上一圓月、忽入海西萬里雲」と公之れを見て別れを惜まれしと云ふ、明印は延喜八年秋七月十八日寂す。

延喜七年五月明印寶善寺を神前村に艸創す。

明範

は寒川郡石田村極樂寺主範傳の弟子なり、建武四年冬十月十八日院主となる、其小歴左の如し。

建武六年春二月讃州兵亂により寺を長尾吉祥院に移し寶藏院と號す、同年秋七月亂兵寺社領を削る、正平十二年秋七月二十四日曾て親交ありし細川相摸守清氏綾郡高屋にて戰死せしを以て其遺骸を收容し、引導を爲し三木郡高岡白山に葬る、かくて明範は天授二年(五六〇)四月十二日入寂せり。

明珍宗春（現代人）

公は宗知、(通稱琢磨、七十一歳にして歿す)の子にして天保十四年十一月十五日高松に生る、幼名七五三一、稍や長じて卯次郎と改め後更に宗春と稱す、人と爲り豪膽細心甲冑作製の技に秀で、年少已に名を爲す、萬延元年(十八才)江戸に遊び十ヶ年間甲冑欝煉の業を研究し、明治二年歸郷自ら作る處の兜面鎧を藩主に献じ、家祿を下附さる、維新後甲冑等の需用絶へたるを以て時代の推移を達觀し、煉鐵を以て香爐花瓶其他室内用品を製作し大に社會に歡迎さる、翁今や年齡八十六歳に達するも矍鑠壯者を凌ぐの概あり、日々工場へ入り製作にいそしみ居れり。

翁の家太祖は增田と稱し第三十二世宗介(文治年間の人)に至り明珍と改め第五十八世宗妙の子宗最が享和元年九月十六日江戸より讃州に移り九十四歳を以て歿す、爾後宗知、宗春、宗正皆な父祖の業を繼ぎ現今に至る。

翁の作品にして皇室にお買上の榮を得たるもの其他著名品左の如し。

紀元千八百九十四年米國シカゴ市に於て開設の閲龍世界博覽會に於て名譽賞狀を受く。松平頼壽伯の命により軍神指揮金杖を製し藩祖廟に納む。明治卅六年春宮殿下當縣へ行啓の時鐵香爐を製作し本縣より献上す。明治四十三年大演習の際岡山大本

營に於て天覽を賜ひたる蓮葉式饌盒御買上の光榮を荷なふ。大正四年御大典奉祝記念として本縣より献上すへき鐵製花瓶一對を謹製す。同上の際市より献納の火焔式香爐を製作す。大正八年兵庫縣へ行幸の際三德式天下泰平鼎を献納せり。大正十一年攝政殿下香川縣へ行啓の際鰹鞘短刀を獻納せり。

港　百助

小豆郡福田村の人、諱は宗貞、九左衛門宗正の長子なり、伯父平井氏政、富士の瀬侵漁事件に關して幕府に召され下民を煽動せりとの咎を以て斬罪となり。池田村江尻村の濱の露と消へ、尋て父宗正之に連り、正德二年高松藩の獄中にて毒殺せられ、其の家闕所となる、宗貞性沈毅豪勇當時年尙は幼かりしと雖も、慈母の悲憤の狀を傍觀するに忍びず、決然家を脫して具に辛酸苦楚を嘗めて幾多の歲月を海道驛路に送り遂に江戸に達し臥薪嘗膽豫て父及び伯父の讐敵と目せし某藩士を吉原某樓浴場内に殺害したり。時正德五年歲僅かに十八なり。其後常陸國筑波郡谷原領小張下福田村に赴き、名主吉葉藤三郎の養嗣子となり、名を太右衛門と改め後ち家督相續の上更に喜左衛門と改名し、家運益々榮達せりといふ。　明和年間に歿す。

港　九左衛門

小豆郡福田村の人、元祿寶永頃の大里正にして、人と爲り沈毅勇敢、池田郷大里正平井兵左衛門氏政の妹を娶る、因て氏政と親みて善し、氏政幕府に召さるゝや同志たりとの嫌疑を以て高松藩の獄に繫がれ氏政が斬刑に處せらるゝの後獄中にて毒殺せらる、實に正德二年十二月二十八日なり。

（小豆郡史）

水野　金七

小豆郡西村字水木の人、幼にして父を失ひ、母に從ひて夙夜孜々山に樵り野に耕し海に漁して具さに辛酸を嘗め家業に熱中す。性理財の術に長せしを以て產を治め家を興し遂に郡内屈指の富を重ぬるに至る。其の醬油製造に從事するや、明治二年僅に石高六十石なりしも三十八年に至つては二千三百石に達せり。其他諸會社の經營に投資するもの尠からず。發明計畫研究せし事項及び公共團體の爲めに盡瘁せしこと枚擧に遑あらず。明治三十九年十二月十三日沒す、年六十八

水野　秋彥

諱は秋彦、通稱を瀧之助、二峯と號す、常陸國笠間郡稻田村鄕士、世々笠間の藩臣にして父を水野半仙(諱淸重)と云ふ、幼より穎悟にして異才あり、初め小川容齋に就きて經書を學び、後國典を三村安臣、鬼澤大海、加藤千浪に受け、和漢の學に達せり。後磐前縣屬都々古別神社權宮司等となり、後又職を辭して鄕里に於て子弟を敎養しつゝありしが、明治十二年金刀毘明道館の招聘に應じ來りて其の長となり、國典科を擔任して二百の子弟を敎養せり。明治二十二年十一月廿五日病沒す、年四十一。著書、延喜式祝詞諺解四冊あり。

辭世　琴平の神しあはれとおもほさば吾にたまへや松竹の名を

源　利方

名利方、丸龜藩士、○江戸にて津輕侯家臣藤原尙賢に書を習ふ事三年、楷に長ず、寛政六年菅公書法華經を摸寫す、無逸之に題す、○姓常には源に非ざるべけれど未詳なる故に此處に入る。

溝口萬年

通稱要藏、號萬年、鵜足郡西二村人、○東野の高弟なり、東野の子萬年夭す、因て其名を襲ぐ、明治十二年六月沒す、年七十一。

箕輪彌六

名彌六、高松の人、書を能くし源英公の右筆となり祿五十石を受く、其能を自負して樂まず遂に仕を辭し、江戸に行き遂に同所に於て沒すと云ふ。

美馬君田

名は諧、字は和甫、通稱援造、初め三嶺と號し後君田と號す、入獄するに及び櫻水と改め晩年には休翁と號す、阿波國美馬郡重淸村の人、幼より郡里村願勝寺に入り弟子となり釋典を學び、傍ら美馬太玄に從つて經史を學ぶ、好んで華嚴維摩を讀む、又書畫和歌詩文等を硏究す、安政元年の秋一朝感ずる所あり還俗して姓を美馬と改め飄然四方に歷遊し、以て士風國政を觀察し、俊邁奇傑の士を求めて之に交る、長門人高杉晉作士佐人坂本龍馬と最も親しみ善し、安政四年の冬外艦浦賀港に泊し海內騷然たり孝明天皇深く之を憂ひさせ給ふ、援造はのかに傳へ聞き諸國に奔走し以て尊攘の大義を皷舞す、旣にして四方福榛の境は以て天下の形勢を察するに足るとし、安政六年讃岐國琴平に來り住す、金山寺町の一陋屋を賃し筆耕硯田し以て生計を營む、偶高杉晉

作、桂小五郎長門より琴平に來り寓す、援造、日柳耕吉、植田宗平等と共に之と相往來し、文酒を以て交を結び互に肝膽を吐露し、謀て將に皇運を振興せんとす、幾もなく晋作小五郎等歸國し宗平去つて長門に入る、援造燕石と共に天下の形勢を長門に漏し以て尊攘の計を爲す、慶應元年幕府益々横暴にして邊海屢々警す、援造憤慨に堪へず益々慷慨の士と交り遂に高松藩の嫌疑に觸れ、燕石と同日縛に遭ひ高松の獄に投せられ、縲絏四年辛楚をなめしも憂國の氣少しも挫けず、憂國文を作り時弊を痛論せり明治元年官師賊軍を鳥羽伏見に破りて大に勝つ、此に至り世局一變し援造漸く出獄す朝野其入つて大政に參するを望む、援造慨然として曰く「余もと微賤而して聖恩を蒙り青天白日の身となる因つて殘賊を誅し功績を立て以つて其恩に報せん」と乃ち將に劒を拔き燕石と共に上京せんとす、而して不幸疾病に罹り遂に果すことを得ず、爾後身體羸瘦英氣大に衰へ自ら爲す可らざるを知り、帷を琴平に下し生徒に授く、其の書を講ずるや聲を抗し辯を飾る等のことなく、恂々として講話するが如く蘊を摘發し、人をして了得せしめ而して後止む、門弟の詩文稍々觀るべきものあれば嘆賞して置かず、拙陋の作と雖も反覆改刪して朱黄爛然必ず意の如くして而して止む、君田書畫詩歌俳句等を能くす、詩は詠史を畫は氣韻を主と爲す、俳句は土佛と號し又駑物と欵せるもあり、明治七年七月中澣偶々痼疾再び發し同月廿七日を以て沒す、臨終に臨み胸を付ち大息して曰く「男子尸を包む馬革を以てせずして衽席上に徒死す寔に恥ずべし」と、享年六十有三。明治三十六月十一月十三日特旨を以て正五位を贈らる。墓は琴平西山墓地にあり。

宮脇探水

丸龜渡し場の人、俳句を能くす又畫も能くす、安政五年出版の玉藻日記に探水筆の畫いつ、又志度林氏所藏の西讃人合作中にも動物の畫見ゆ、嘉永頃の人、秋風や戸口まで來る汐明り

宮武芦秋

友一と云ふ、高松の人なり、畫を中川愛山に學ぶ、天保十三年二月生る、久米喜代助の男なり。

宮武瑞嶺

香川郡池西村の人、初め南岳と稱し、幼より畫を好み富田觀星に就き修業し、後南北混合の畫を畫く、成年の頃京師に上り某畫師に就きて修業し、業成りて諸國を巡遊す

山水人物はその得意とする處なり、斯くて揮毫に從事せしが大正十一年九州佐賀より歸りて病に臥し、同年十二月五日終に逝けり、享年五十三。

宮武梅嶺

通稱秀三郎、一得齋又梅嶺と號す、高松市天神前の人、明治初年高松龜阜校の教員となり後香川郡書記に轉ず、初め詩文を梅村に、畫を森良敬に後和歌を堀秀成に學び能くす、明治十七八年頃郡書記を辭し、風流の道を樂み優遊自適せしが大正十二年七月十五日沒す、年七十四。

三土謙三

諱武剛、號鼓丘、傳左衛門の子、綾歌郡西庄村の里正たり、後戸長を勤め武技劍道に達し傍ら儒學等に通じ鄉黨に重んぜらる、明治十五年一月十八日沒す、年六十五。

三土梅堂

諱宣、字元節、號梅堂、通稱幸太郎、綾歌郡西莊村の人、謙三の子なり、幼より學を好み秋山巖山、富家松浦、片山沖堂の三氏に就き和漢學を修め、後東京に至り川田甕江の門に游び經史を究め、業成り名古屋藩に聘せられ、後歸鄉し坂出公學校長、飯山中學校長、丸龜中學校教諭を歷任し、各方面より教育功勞者として表彰され明治四十二年十二月辭職し、悠々詩文に親しみ居りしが大正七年十一月五日高屋に於て沒す、年七十六。著書、楳堂遺稿、近譬要錄、玉藻略史あり。

乙卯新年

十萬貔貅奏凱旋。日章旗輝映晴天。聖明天子揚殊績。遺憾先皇不見旗

三野攝平

諱は知周、字は子車柿堂と號す、盤溪の子なり、性溫厚にして家庭に學んで後梅村沖堂の二翁に學び、詩文を能くし且書に工なり、少壯大阪師範學校を出で香川、大阪、愛媛の師範學校に教鞭をとり、最後に高松市高等小學校の校長として數多の子弟を教育し、令名ありしが後職を辭し、大阪住友家の家庭教師となり、明治四十三年三月上阪し、優遊文墨に親しみ居りしが大正五年二月六日沒せり、年六十二。氏は又書畫鑑定に妙を得一目すれば百發百中誤認なかりしと云ふ。

密傳和尙（慈善家）

三豊郡笠岡村長林寺の住職にして、寛延三年七月七義民の助命を乞ひしも許されざりしかば、刑場の土を天神山に移して其英魂を弔ひし奇特の僧なり。

光宗

讃岐の刀工、安生太夫と云、業宗の子、寛喜年間（今より七〇六年前）の人。

三江（ミツエ）

安原枝澄の俳號、高松の人、明治十九年沒す、年七十一。ふさ崎にまかりて、濤に影おかてきゆるや冬の月

御廐燒

（彦四郎を見られよ）

ミ號索引

密成（僧敏の事）	民部（片岡）	民聲（大原）
御調（松岡）	三千太郎（市河）	珉珎（片岡）

○シ之部

四宮右近之進

は本信濃國の人、文明年頃讃岐に來つて寒川丹後の老臣となり、引田與治山（攀山）を守り數代續き居りしが其曾孫太郎左衛門光武の代に至り、此城を去りて阿波の武田氏に倚る、是に於て阿波の三好氏更に矢野駿河守をして之を守らしめたり。

大川郡史に左の記事あり。

鄕社　諏訪神社　造田村

昔永正の頃四宮左近なる者あり、信州より寒川氏に仕へ大内郡安堵城に居り、自ら諏訪大明神の裔と稱せしが、其四世の孫太郎左衛門光武、豊公に從ひ屢々武功あり て末村乙井に封を得たり、茲を以て天正年間信州上諏訪大神の御分神を奉じ來り、當山麓に鎭齋し奉れり云々。

大川郡史萬生寺創立の項に、

引田城の城主四宮上總介利之又四宮佐馬佐家福は天文二十年八月十五日入道して萬

生寺を再興し永錄二年十一月卒すとあり。

四宮隱岐守其子主計

備前日比の海賊頭にして香西佳清の妻の父なり、天正十四年十一月秀吉公の命を受け島津征討軍に參加し、讃岐軍人輸送の任務を帶び九州に出張せしが、讃岐軍豐後戸次川に於て敗績せしを以て其殘兵を收容し歸國したり。

嶋　喜四郎

喜四郎は植松四郎資茂と同時代の人にして、資茂に劣らず强弓の名手たり、或時資茂と弓術の競爭せんとして、大谷村の山崎より原引の野中まで八町距てゝ大的を立て、相併んで射たるに其同じ處に當りしと云ふ、因つて此に矢塚を築きて後の世の證とせりと傳ふ。

（西讃府志、南海治亂記）

（附記）喜四郎は香川郡の人にして年代は天文頃ならんか。

新名内膳

本名光景と云ふ、藤大夫章隆の裔にして阿野郡新居村菟上山（全讃史鷲山に作る）の城主なり、蓋し香西氏の麾下ならん、天正七年土佐元親に攻められ、羽床氏の扱に依つて土佐方に和平し、天正十年十月中旬土佐軍に加はり十河城攻に出陣せしも、遂に天正十一年五月元親に誘殺され、其跡へは土佐の部將入交藏人を入れ東讃の押へとなせり。

新名源左衛門

阿野郡山内村新名柏原城の城主なり、蓋し天正前に於ける香西氏の部下ならん。

白鳥玄蕃

は寒川氏の老臣にして白鳥鄕に居りし人なり、文明頃より天正頃迄の人。城趾は白鳥城東にありたりと傳ふ、蓋し現今城が端と呼べる地ならんかと大川郡史に見へたり。

白鳥永德

は大内郡松原村一向宗敎蓮寺の僧なり、敎淸と號す、四國靈場を巡拜して終に寺に歸らず安戸海岸の巖窟中に入りて一日一度食を乞ひ巖上に起臥す、隱居五十餘年、世人其の終を知らずと、永德は天正二年の生れにして元和八年（四十九歳）迄は存命なれば其

後沒せしならん。

神内氏

植田吉保の兄次郎景辰を西植田神内に封し城き居れり、因て氏とす、右京進清定に至り木太郷に新城を築て相保てり、植田の内三百石、木太の内七百石を領す、何時亡びしか詳ならず。

神内廣忠及其子孫

神内岩見守廣忠は木田郡神内の城主なり。

（參照）　神内城　上東神内にあり、臺山の城と云ふ、元暦年間植田の族岩見守廣忠なる者此城に居れり。源平戰爭の時源義經に屬して功あり、降りて貞治のとき神内太郎景成あり、天文天正の頃神内右近進景之及後の右近進清定あり、皆相次て之れに居り、一城を木太郷に構へ之れを兼有し、邑を西植田三百石、木太郷七百石凡て一千石を食む、戸田城慶頽と同時に墟となるものゝ如し。（讃）

進士隼人佐

は奈良元政の重臣なりしが天正七年以來數度土軍の攻むる所となり領土を保守することを得ず遂に主人と共に阿波に奔り三好存保の軍に合し、中富川に於て土軍と交戰し同所に於て晴なる戰死を遂げたり。

丈愚

丈愚は丸龜善龍寺に住めり、學を好んで多識なり、頗文藻あり詩並に書を好くす、著書數編あり、中にも改悔文の私記、梓に上さすといへども尚世に傳はれり。

周阿

は香川郡太田村の人なり、前名は伴阿彌と云ふ、其性明秀にして文書に通じ連歌を善くす、康暦元年細川頼之是を進め京都に至り將軍義滿に仕へしめ周阿と改む、賢才を以て世に鳴る。康應頃（五四〇前）の人。

月夜に頼之の句、靜なる月を都の友もがな

周阿之を續ぐ、　萩の錦を君が家苞

周阿の屋敷址

此地今詳ならず周阿初名を近藤平治兵衛盛政と云後出家して周阿彌と改む、周阿は

其略稱なり、名勝圖繪に曰く連歌師周阿は太田村の人なり康暦元年細川頼之朝臣に從ふて京師に行き連歌を以て將軍義滿公に仕へ一時名譽ありと。

實　淨

高野山學匠、字は眞海、讃州高松市の人、姓鵜川氏延寶三年を以て生る、年十三蓮花寺翁胤に隨て薙染す、元祿九年笈を負ふて野山に登り、享保二年安祥寺法流を敎榮に受け、三寶院流を榮智に禀け、其奥旨を究む又西元院良容等に就き宗乘の義を研き、元文三年碩學となる、寛保元年快道に隨ひ、庭儀灌頂を元祿四年正月十八日化す、壽七十曾て檀越の請に依りて施餓鬼修習用集三卷を著す、其他述作多し。

守寵（傳燈大師）

守寵俗姓は佐伯氏、延暦三甲子年多度郡に生る、幼より穎悟深く佛道に志し、同二十四年二十二歳にして得度し、法相宗の巨匠たる護命僧正に從ひて、法相宗を學び論辯に長ず、承和の初年傳燈大法師位に任せられ、承和八年十二月寂す、行年五十八。

實慧（道興大師）

實慧は俗姓、佐伯氏にして善通寺に生る、幼より學を好み、同族佐伯直、葛野酒麿に就きて儒學を修し長じて上洛し、空海に從つて兩部の密敎を禀け、苦學精進盡し其の秘契を傳へられ東寺の長者となる、空海第一の弟子にて學德兼備の高僧となれり、承和十四年十一月十三日河内國觀心寺に於て寂す、行年六十三、安永三年八月十三日勅して道興大師の諡號を賜ふ。

七位坊榮海

は南光坊天海大僧正の弟子にして有德の僧なるにより、高松藩祖源英公御歸依淺からず、寛永十九年御入國の際召連れられ、香川郡上笠居村藥師寺中興開基の住職とせらる、其頃境内に西岡櫻と云ふ櫻の老樹三株あり、寺主榮海彼岸櫻五十餘株を增植し追々繁茂し、世人は此れを花の藥師七位の櫻と稱し、花時觀覽者多かりしと云ふ、正保頃の人なり。

眞　然

眞然は俗姓、佐伯氏にして多度郡の人、空海の甥なり、（田公の末男酒麿の子ならん）早くより佛法を尊信し、高野山に登りて大師に侍して密乘を學び、又眞雅に就いて灌

頂を受く、大師臨終に際して當山を汝に付囑すと遺言す、仍りて金剛峯寺の造營に力を盡くし幾くもなくして成る、寛平二年僧正に任ぜられ、同三年九月十一日寂す、行年八十八。

眞雅（法光大師）

眞雅は佐伯直田公の三男にして延曆二十四年善通寺に生る、空海の實弟なり、十五の年上京して空海に眞言の法を學び、齋衡三年大僧都に任ぜられ、貞觀元年法印大和尚位を授けられ、貞觀六年僧正となる、同六年輦車を許さる、貞觀十六年春寶祚を祝して貞觀寺を建立し自らその寺主となり、元慶三年正月三日遷化す、行年七十九、文政十一年六月二日勅して法光大師の諡を賜ふ。

眞體

眞体は俗姓和氣氏、少くして父母を失ひ、空海に從ひて戒を蒙り、天長三年十月八日家資を捨て、佛物として永く神護寺に納れて傳法料として諸靈に薦む、時に至心歸命の人と稱せらるると云ふ。

聖寶（理源大師）

聖寶は天長十年鵜足郡狹岑島（仲多度郡與島村）に生る、始め恒蔭と稱す、葛野王の裔、幼より穎悟年十六にして上洛し、貞觀寺に入り眞雅僧正に從て得度し、名を聖寶と改め三論を元興寺の順曉及び圓宗に學び、後玄榮、眞然源仁等に事へ顯密共に通ず名山靈地に遊歷し道路を修繕し、渡し場を設け、佛像を作る等頗る福事に勤む、貞觀の末年醍醐寺を創建し僧正となる、延喜九年七月六日普明寺に寂す、行年七十八。應德元年（白川天皇）勅して理源大師の諡號を賜ふ。著す所の書左の如し。

疏鈔一卷、胎藏次第一卷、五大虛空藏式法一卷、持寶金剛次第二帖、如意輪次第一卷、聖寶記一卷等

理源大師の歌

はをはじめるをはてにてながめをかけて時の歌よめと人のいひければよめる

はなのなかめに飽くやとて分けゆけば心ぞ共にちりぬべらなる　（古今集）

聖一國師

嘉禎元年宗に入り徑山寺に登り、仁治二年に歸朝し東福寺を造る、後弘安三年十月十

七日寂す、正和二年國師號を諡る。（辯圓を見よ）

七義士

寛延二年十月より同三年正月十六日迄の間に、丸龜、多度津兩藩領内の百姓徒黨を揆し藩吏の苛酷を訴へて救濟方を願ひ出で、願意は聽許されしも左の七氏は强訴の首謀の罪名の下に、同年七月廿八日金倉川原に於て斬罪に處せらる、殊に權右衛門は妻子までも併せて刑場の露と消えぬ、後三豊郡笠岡村天神山に神社を建て、七氏の靈を祀る。權兵衛の辭世に、此世をば泡とみて來し我心民に代りて今日も嬉しき。

即ち七氏は左の如し。

笠岡（笠田村の内）	大西權兵衛	碑殿（吉原村の内）	甚右衛門
帆山（十郷村の内）	金右衛門	大野（財田大野村の内）	兵治郎
三井（四箇村の内）	金右衛門	天神（笠田村の内）	彌一郎
南（笠田村の内）	嘉兵衛		

然して此の强訴の首謀者の妻子

權兵衛の長男新五郎（十六才）にして、同妻よね、二男源治郎（十三才）、同三男平七（九才）、同四男龜之助（五才）及び笠岡（笠田村の内）大工平九郎も共に斬せらる。

下津權右衛門

定公の御時寺社奉行にてありしが恭儉篤實にして母につかへて孝也、年五十餘坐して歌ひ起て舞ひ、母の心を悅ばしめ朝夕定省怠ることなく、みづから母の足を洗ひしと也。

（高洲漫筆）

七條宗貞

名宗貞、通稱權藏、高松藩儒者、祿百五十石、○子を潤身、孫を權藏といふ、皆詩を能す、○宗貞著書、讃陽簪筆錄、○同人會鶴林寺詩、團々離海到天心、不受浮雲一片侵。冷炙殘杯實未散　嬋妍彷彿昨猶今。○宗貞は福善寺僧の弟にて、林春齋の門人なり、英公に徵さる、節公の師たり。享保頃の人。

七條耕岳

號耕岳、文化頃東讃人、○畫を能す。

十摩蘆洲

宥祥と稱す、多度津の人、石原淺治の男にして嘉永六年八月五日に生る、畫を藤田苔石に學びたり。

壽昌院

（京極伊知子を見られよ）

常諦院

名謳子（ウタ）、有馬中務太夫の女、松平頼㵎の室、○歌を能す、明治維新前沒す、院號常諦院といふ、○頼㵎は（慭公の子晃之助）と稱す、弘化三年歿す。

島村默齋

名信厚、字德歸、通稱孫太夫、實は岡長孝の弟、文化四年島信亨の養子、高松藩に仕ふ、○太田眄柯の友にて史籍を研究し、詩書を能す、天保八年三月歿す、雲井御所の碑は厚の書せしなり。

島田柳圃

號柳圃、文化頃西讃人、○詩書を能す。

庄太郎

庄太郎は香川郡横井村（池西村）の農夫なり、力田を以て稱せらる、頗る信仰心厚し、親鸞蓮如の敎を奉じ正直にして人を疑はず、穀を賣るにも常に桝目を糶者に任す、嘗つて法然寺に靈佛靈寶を一般に縱覽せしめしことあり、傍らに戲場及珍禽奇獸の見物あり、同村の者戲場の事を主る、故に錢を出さずして觀る者多し、庄太郎は「俳優業とせるを錢を出さずしてみるは非道なり、然り吾產薄ければみざるに如かず」と過ざて顧ざりきとなり。

志形秋香

文化頃東讃人、○書を能す、竹石展觀錄に松陵（武田）の母とあり。

新莊濱名

名濱名、天保頃の人、歌を能す、○木村重成、武士の仕ふる道に身はすて操の鏡世々に殘しつ

新莊長喜

名長喜、號三休、通稱太左衛門、天保頃高松の人、歌を能す、○木村重成、畏しな益荒武男の身をすてゝ君に仕へし赤き心は

柴野彌五右衛門

は方高と云ひ惠公の時の郡奉行なり、民の奢靡を憂へ其身至つて質素を守り、常にたゞ一人馬に乘て鄕中をかけめぐり惰農をいましめ力田を稱しける、故今に至る迄民間の諺に五左衛門の「馬の行しだい」といへり、ある時簑笠をきて馬に乘り白鳥の社へ詣けるに、郡方の手代りつぱなる裝束して來りけるに彌五右衛門すり違に馬上より飛下り、御歷々に對し無禮の段恐入たりと謝ち下役の手代大に迷惑し赤面して厚く謝し、それより下役の面々かげひなたなく質素を守りしとなり。

柴野彦輔

彦輔(彦助)諱は邦彦、栗山と號す、又號古愚或は古愚軒と云ひ、堂號三近堂と云、元文元年三木郡牟禮村八栗山下に生る、平左衛門軌道の子なり、長じて高松藩儒後藤芝山に學ぶ、芝山賞して我門の顏子と云へり、業成りて京師に寓し經學文章を以て生徒に敎授し其名大に聞ゆ、明和四年阿波藩主蜂須賀氏に聘せられ其藩學を振興す、天明八年正月幕府德川氏に召されて昌平黌の敎授となり大に學政を整理す、寛政中松平定信の老中と爲るや拔擢して待問儒員とし、天下の學政を整理することを掌らしむ、首として定信に建議し異學の禁令を發す、且定信が皇室に奉ずる勤王の美蹟、大内の造營皇陵の修理等多くは其建策に出づと云ふ、其畝火山の陵を拜する詩あり曰はく、遺陵纔向二里民一求。牢死孤松數畝丘。非レ有三聖神開二帝統一。誰敎下二品庶二脫中夷流上。厩王像設專二金閣一。藤相墳塋層二玉樓一。百代本支麗不レ億。幾人來レ此一回レ頭。以て其抱負を西るべし、是に於て後藤芝山の江戸駿河臺私邸に薫陶大に光輝を發揚す、文化四年十二月病て歿す、享年七十二。著す所、國鑑聖賢像圖考、資治格言、冠服考證、栗山文集、栗山堂詩集、栗山上封等あり。栗山國學は京にて高橋圖南に受け詩文書皆絶妙傍ら黑竹を畫きしと云ふ。明治四十四年六月一日從四位を贈らる。栗山墓、東京大塚御厩畠と京都東寺町西方寺。

柴野貞穀

名貞穀、諱養貞、通稱小輔、栗山の弟なり、○栗山輯錄せる雜字類編を、辻子禮と共

に訂修して、明和元年出版す、長子某、次允升、允中、允常等あり、孰れも秀才にて三人とも栗山に養はれしが允中(伸吉)は僅か十二歳にて天明六年六月逝けり。

柴野碧海

名允升、字應登又東霞、通稱平次郎號碧海安永二年牟禮に生る、貞穀の次男、栗山に養はる、○詩文を能す、栗山幕府に徵さるゝに及び其の後を襲うて阿波藩の儒員となる、尤も詩文に長す。天保六年七月十六日歿す、年六十五、○著書、枕上集、栗山先生遺事等あり、大正十三年三月教育の功により正五位を贈らる。○墓は徳島市佐古三谷常嚴寺にあり。

柴野方閑

名は允常、字は恒甫一に霞嶠と號す、貞穀の四男にして伯父栗山に養はれ詩文を能くす、どこかの大名に仕へ居りしも年四十にして隱居し方閑と號す、天保頃の人。

柴野竹齋

通稱は助三郎、號竹齋、碧海の男なり、碧海歿し阿波藩の儒官となる、明治八年歿す年六十。

柴野格

名格、通稱政之進、香川郡圓座人、○寛政元年西行六百年追善集に歌五十首入る。

松貞尼

松貞は尼號、西讃の人、松岡五左衞門の母にて井上通の歌の友なり。

柴田麻載計

小豆郡池田村北地の人、文化五年を以て生る、性篤實にして能く人に交はる、夙に風雅を愛し兼ねて俳句を善くす、吟詠少からず、俳號を麿人と云ふ、當時俳壇の泰斗なり。明治十九年十二月二十七月老歿す、壽七十九。

椎名南浦

名秀胤、號南浦、山田郡人、後高松に住す、○明治末年歿す、詩を好む、○曾呂利新左衞門、君學東方朔。寓言即諫言。布衣友關白。名姓至今傳。

甚右衛門

○仲多度郡吉原村大字碑殿の農にして、寛延三年正月領主丸龜侯に强訴せんとせし七義民の一人なり、同年七月廿八日金倉川原に於て斬罪に處せらる。

白井芝石

名昇、號芝石、寒川郡長尾人、篆刻を能くし、餘技に山水四君子を畫がく氣韻あり。中年時代より備中倉敷に住居し同地方に文人思想を皷吹せり。明治三十四年同地に於て歿す、年五十五。

白井九畹

號九畹、文化頃東讃の畫人。

白井尹諧

名尹諧、通稱潔、高松藩士、○歌を中村氏に學ぶ、明治三十八九年頃歿す。寄松祝、君が代はつくる事なし常盤なる松の緑のあらむ限は

白井適齋

名彪、字無文、號適齋、文化頃高松人、○畫を能す、畫譜に見ゆ。

白木蘭溪

名因宗、字元陵、號蘭溪、丸龜藩士、○經史を三田蘭室に學ぶ、天明四年八月歿す。

白木半山

名彰、字有常、號半山、丸龜藩儒、○浪華に寓し、儒を以て肆を開き、後僧となり、道契と名づく、詩を能す。○著書、半山集行餘偶筆等あり。

白石知重

名知重、通稱嘉右衛門、香川郡川部人、寛政元年西行六百年追善集に歌五首入る。

神内謙

通稱捨三、喬木と號す、木田郡井戸村高木の醫師なり、業暇詩文を能くす、萬延元年

農家撰種錄の著あり、明治二十四、五年頃歿す、年七十餘歳。

神保直吉

神保直吉、諱は茂直、寒川郡造田村に生る、處士茂一郎の第二子なり、直吉七歳の時父に從ふて志度村に移居す、幼より算術を學び成童にして已に數理を解得し、自から自鳴鐘を製せり、弱冠高松南紺屋町に移り藩の公族松平左近の命を以て四季自鳴鐘を作る、觀るもの歎賞せざるなし、安政以降諸藩競ふて洋式砲術を學ぶもの多し、時に高島四郎大夫の門人麾下の士江川太郎左衛門幕府の命を以て高島流砲術を敎授す、藩主直吉を擢んで就て學ばしむ、夙夜勉勵數年一日の如し、終に大に其術を得るを以て江川氏直吉をして師範代たらしむ、文久二年業成り將に藩に歸らんとす、幕府窃に之を徵さんとす、彦根藩も亦祿三百石を以て之を聘せんとす、直吉藩の三人口俸に甘んじ並に之を謝絶す、是より藩に歸り高島流砲術を敎授す、同三年登庸して俸祿を加賜す、慶應三年一藩の軍制を一變し藩士擧て門人たり、是より先高知宇和島大洲丸龜多度津の諸藩士來りて學ぶ者多し、其螺旋砲を鑄造し蒸汽船を模形する皆手自ら之を製造す、其緻密奇巧歐米人を凌駕すと云ふ、大政維新後民部省に徵されしが明治四年正月辭して國に歸り、厚生利用の諸器械を製し以て娛樂とす、廿五年七月病て歿す、享年七十三、萬日原に葬る。

篠原市造

市造は那珂郡東高篠村の人、初め惰農なりしが小國牛山の敎を受け精農となり、牛山に從ひ鄕村を巡回して農人を訓戒して善行を奬勵せり。市造の事業中その著きものは祓川の架橋なり、毎年九月より翌年三月迄市造獨力を以て祓川に板橋を架設して、通行の便を圖り衆人の塞苦を救へり。此事業は左の數代前の祖先より行ひし所にして、市造は祖先の遺志を繼承し慈善事業を遂行せしものなり。

與三衛門―彌三衛門―彌三七―市造

而して與三衛門より以後官命により代々牛頭山を守りて草木の濫伐を監視し、山奉行とも稱すべき職に在りて常に帶刀を許され、また組頭役をも勤めたりしと云ふ、天保六年九月三日沒す。

篠原箭太郎

三豐郡二ノ宮村大字羽方の鄕士にして、夙に九州に至り漢詩文を豊後日出の碩儒帆足萬里に學び其高足たり、書も亦能くせり兼て武道に熱中し劍槍の兩技に達せり、維新

前諸國の勤王志士と氣脈を通し勤王討幕の旗擧を爲さんとせしが、同志者捕吏の手に捕はれ遂に數年の處刑を受けたりと云ふ、明治初年頃の人。

莊司和之輔

諱正暢、號物外晩年改めて松齋と云ふ、通稱和之輔、豊田郡大野原の人なり、父を正本と云ふ。其次子なり、人となり、良直にして長ずるに及び和歌を好み、書畫を愛玩し恒々慈善を爲すを娛み、家世々日蓮宗を奉じ信佛の念甚だ篤し、明治七年七月十六日沒す、年七十。

莊司丘霞

通稱駒之助、號丘霞又翠雲、三豊郡大野原人、〇立齋に花鳥を學ぶ又俳を能す、明治四十一年五月沒す、年七十。

莊野秋平

名初知彰、後秋平、初孫平次と稱す、號莊園(ナリソノ)、高松藩士、〇歌を能す、曾て堀秀成に學ぶ後石清尾社司たり、明治三十六年九月沒す、年七十四。

寄松祝　君が代は大木の松の深緑千年の影を仰ぐ嬉しさ

鹽津可知

名可知、塩津氏、井上通の歌友にて安達氏の妻なり、享保中の人。

塩田梅峯

は龜市と號す　三豊郡仁尾村の人、塩田直治の男にして天保十四年五月朔日の生れ、安政元年より書を村田筆岳に學び、後守山湘帆に隨ひ長崎に遊び又名草逸峯等を師とす

塩田遊圃

又兵衛は通稱なり、三豊郡仁尾村の人、塩田安治郎の男にして、嘉永三年正月生れ、明治五年より書を大西雪溪に學ぶ。

鹽田時敏

名時敏、通稱良珉、鹽田文庵の嫡男、〇文化十一年文庵に繼ぎ、高松藩公に仕ふ、蘭方を唱へ外科全書、醫方握機等を著す、文政八年十二月二十六日沒す、法名良翁自然

居士。

僧　信　海

名は初め義藏後信海と改め又信介と書し、左少辨と字す、幼名は綱五郎或は長丸と稱す、文政四年生る、月照の弟なり、幼にして僧となり佛學を高野山に修め、又經史を後藤某に歌を近衛公に學び、天保十四年高野山に在りし時同九月二日夜高野山大火あり、伽藍炎燒す、信海衆に先だち御影堂に進み戶を排し入つて尊影を卷攝し總持院に移す、圖山尤も其の功を賞し生涯俸を出し學資に供す、弘化元年八月靈明遷化し遺命により同山修學院の住職となる、嘉永元年同山萬勝院に轉住し、同六年八月清水寺に歸り光乘院に再任す、安政元年二月二日月照の職を嗣きて成就院へ轉住し、寺務一乘院宮より正官本願兩職の補任を給はり、尋て紫重の絹衣を聽さる、同年七月十五日江戶に行き同八月十九日將軍に謁し時服二領黃金一枚を賜はる、同二年三月十一日近衛忠熙公に謁し和歌の門葉に列し勤王に努む、安政四年十二月亞米利加船、浦賀に來りて通商を請ふこと太だ急なり、信海深く之を憂ひ同月十三日より大衆を集會せしめ本堂觀音前に於て十座十萬遍の法を修し夷賊降伏を禱る、同五年に至り墨夷益驕梁憂憤に堪へず、同年四月廿五日八千枚護摩供を修し寶祚無窮天下泰平外船退去の旨を祈る和歌を詠して曰く、

動きなき誓と君か眞心をたまの緒にこそよりて祈らめ

遂に叡聞に達し深く嘉納せらる、同五年二月十九日近衛公より月照信海兩僧に內命あり、即ち其の旨を奉し高野山に登り正智院良基に就て靑嚴寺法印銳由、寶性院門主海雄及び有志の徒に謀る一同敬諾し種々祈念別行等を修し、國家安全夷狄降伏を祈請す五月廿五日近衛公の傳達にて月照信海兩僧へ御內勅あり、御撫物御劔御願文御檀料等を守護し高野山に登り謀議し衆と同じく種々の秘法を修す。就中太元明王溫座護摩の法に於て現驗を得乃ち御撫物を返上し寶牘數卷を獻納す、叡感斜ならす兩僧並に高野山大衆の精誠を嘉し給ふ、信海皇室の式微を慨き佛法の萎微を憂へ斯く熱心祈禱に從事せしを以て幕吏大に搜索す、信海到底免るべからざるを察し、和歌を詠して曰く、

眞心を盡さん時と思ふにはうきに逢ふ身ぞ嬉しかりける。

安政六年正月五日終に京都西町奉行所に幽囚せらる、此の時獄中にて兄月照の僕重助に面會し兄の死狀を詳細に聞き悲痛慟哭す、同二月廿二日江戶に檻送せらる、幕吏拷問甚だ殘酷なり、信海豪爽屈する色なく口を極めて時政を罵る、其の言ふ所理義整然たり、幕吏も大に感嘆せりと、同三月十八日獄中に死す、死に臨み和歌を詠して曰く

西の海あつまの空とかはれどもこころはおなし君か代のため

時に年三十九、僧臘三十。明治廿四年十一月廿七日靖國神社に合祀せられ又同年十二月十七日從四位を贈らる。信海墓、京都東山清水寺中成就院

乘雲

讃岐の僧にして音韻學者なり、享保三年(一九〇年前)韻鏡三冊を著はし版行せり。

實山

字德充、號指山又無爲翁、本江戸人、○初狩野家の養子となり居りしが後に實子生れたるを以て去て僧となり、享保中高松見性寺に住す、後自性庵に隱居して畫道に親しめり、佛像山水尤も妙なり、寶曆元年八月二日寂す。○藍窓茶話に寶曆明和頃我讃岐にて、鶴洲實山の外に能畫僧は無き由記せり、○三代物語に指山翁は近古の名畫也と稱せり。

春溪

號春溪嘉永安政頃の女畫人、東讃の人、一說撫養の人、○編者嘗て嘉永六年に畫きし着色畫を見しことありき。

松岳

名宥彦、號松岳、文化頃象頭山金光院僧、○畫を能す、書譜に見ゆ。

瑟瑟

號瑟瑟、長町竹石の妻なり、畫を能す、○文化十年九月竹石七年祭に盛に書畫展觀會を開く、漆谷藍渠五松良山幹事たり、瑟瑟は會主たり。

秀峰

名秀峰、高松淨願寺住僧、本山田郡上田井人、松井長太夫の弟なり、江戸にて久しく美仲及仲英に漢學を學ぶ、因て內典を外にし外典を內にすと自ら云へり、文化十二年十一月十九日沒す、○年九十餘歲。靈牌に正蓮社覺譽上人等阿萬仞秀峰大尙和とあり○好んで莊子を研く、○著書、唐詩選指掌、糸濱亭集、郭注莊子覈玄あり、又詩を能す、○五劍山、懸崖聳上海方巒。五劍凜々鬪影寒。半嶺化來龍氣勢。一天晴去暗雲殘。○作文、三谷景晴形矢記。寺務を辭して後糸濱に住す

秋仙

大川郡富田村大字西富田平藏免に僧秋仙の墳○あり、彼れ今より二百年前郷民のために直訴し刑死されたる、德武、久森の放免を藩主に願ひしに、その一味と誤解されて斬罪に處せらる、哀むべしとす。

紫山

名辨如、號紫山、文化頃高松淨願寺住僧、○書及歌を能す、書譜に玉瑛堂主といふは是なり。後盧飽寺に住せしことあり、○紫山は他にも一人あり、智幢も稱す。

紫雲

名知周、號文溪又紫雲、高松靈源寺四世僧、荒川九郎兵衛の男、○佛畫を能す、天明二年八月沒す。

舜玉

名美加、號舜玉、後松榮尼と稱す、西原竹屋の妻、京都宇都宮秀壽の女なり、○雲屋に山水を學んで能くす、明治八年沒す、年七十六。

省我

半孤軒と號す、元祿頃の讃岐の俳人、別號一三子。

さてはあの月かないたかほとゝきす

芝峰

清暉堂と號す、西讃の俳人、大阪八千房木僊と親交あり、文化三年門人百川か全國より募集せし俳句より千二百首を選拔し、此れを山莊集と題し、百川をして出版せしめたり。仰き見よそらも小春の十日月

芝仙

安永頃香西の俳人、麥浪の門人。鹽竈も目にしむ亭の寒さ哉

春曉

志度の俳人、俗稱多田權之助。松になく霞より露は萩すゝき

辰　年

土庄津田屋(大吉)辨藏、嘉永頃の俳人。舟のゆくすちあらはなり飛ほたる

松　年

水田の俳人、本姓梶原氏

此　君

琴平の俳人、澤井權四郎と稱す。

如　秋

九成館と號す、丸龜の俳人。

其　岳

大喜多氏、五郎兵衛と稱す、元豊田郡河内村の俳人。

紫　明（盛正家）

師は本縣に二十餘年在住し、身を俳門に投じ多數門下を敎へ風月を友とせる人、本名は盛正家、鹿兒島の人にして、明治元年和蘭大使ポートインに就きて、醫學を修め又長崎に出て英領事館に入り後陸軍に服役し、轉しては大阪日銀支店長となり、後本願寺に入り又相國寺に參禪し、或ひは詩仙堂、興隆寺に入り出てゝは有隣生命保險の創立委員等なりしことありしも、日露役後感ずるところありて身を塵外に避け無門庵紫明と稱し、專ら俳道に寄與せられしが大正十四年十月二十八日高松市紺屋町に永眠す享年八十。辭世に　散り惜む法の敎への櫻かな

シ號索引

士弘（青葉）　深谷（今村）　漆園（漆原）　芝山（後藤）
師曾（後藤）　師周（後藤）　春塘（中村）　春塘（岡内）
松莊（奈良）　松坡（細谷）　松坡（長谷川）　實山、城山（久保）
城山（中山）　舜玉、松榮尼（杉野）　芝石（白井）　紫雲、指山（實山事）
信海、峻阜（長谷川）　七助（土居）　車舟（尾崎）　室山（宮武）
松齋（深井）　紫山、順安（十河）　松雨（武井）　氏矩（高尾）
紫嶂（辻）　資哲（那須）　松嶼（松平）　十次郎（三谷）
松灣（尾池）　松山（市原）　春帆（江口）　秋峰（菊地）
瑟々、松陵（田中）　春谷（山口）　子哲（雨森）　周阿、尙輔（中村）
蓁（合葉）　松巷（廣田）　繩（赤井）　尙明（築地）
襲水（犬塚）　芝岳（松平）　松窩（渡邊）　松岳、松浦（富家）
周任（竹山事）　士穀（中條）　新安（友部）　實光（土居）
士琴（竹石字）　俊順（南洋）　尙孝（中村）　俊彦（中川）
塡安麿（中山）　氏斐（吉本）　四種器（齋田）　實哉（畑尾）

信之（長谷川）　秀驥（長谷川）　秀芳（長谷川）　松籟子（平賀）
森羅萬象翁（平賀）　士彝（平賀）　昌藏（藤澤）　周南（藤川）
舜藏（藤川）　師古（立齋事）　辰（立齋事）　子星（立齋事）
子敬（松平）　春昀（松岡）　眞山（松下）　繩祖（宮本）
璋庵（宮本）　是力（三好）　受益（三木）　周祐（三木）
子剛（三野）　子業（村山）　讓（山田）　舜耕（山田）
子固（山川）　士信（渡邊）　士藏（加藤）　章範（片岡）
俊治（加藤）　周夫（菊地）　昇道（玉泉事）　繩武（菊地）
士煥（日柳）　終吉（日柳）　士方（黑木）　守中（芝山事）
春嶺（近藤）　慈叢（瑤州事）　親信（狩野）　浚明（上田）
如牛（三谷）　愼（青葉）　子栗（秦）　舜山（菊地）
龍平（十河）　紫山（伊藤）　信正（松岡）　子純（岡内）
時敏（塩田）　修（深井）　信（片山）　子成（柏原）
師邵（後藤）　彰（深井）　壽川（山内）　審卿（山田）
自乾叟（日省）　信篤（玉井）　氏芳（高尾）　舜民（松平）
子虎（深井）　氏逸（高尾）　舜民（平賀）　讓（三木）

子直（渡邊）　純安（山田）　志學（狩野）　勝宥（田中）
勝璋（田中）　師鋌（三宅）　松洲（梶原）　樟川（木村）
松軒（本間）　松窓（深井）　松堂（蓮井）　松陽（池田）
松宇（奥村）　子訓（奥村）　子靜（小橋）　樟庵（荒川）
松堂（三井）　獅岳（燧山）　森岳（友安）　秀林（吉成）
資深（鈴木）　眞海（長尾）　信平（三野）　潤齋（大石）
信近（小比賀）　時敬（河地）　周哲（岩瀬）　子栗（河地）
種美（諏訪）　信義（宮本）　勝定（長尾）　松垞（京極）
資邦（太田）　書顛（馬場）

○ヒ之部

日置毗登乙虫（ヒキノヒトオトムシ）

續日本紀に天平神護元年（稱德天皇）八月讃岐國の人、外大初位下、日置毗登乙虫、錢百万を献す、依りて外從五位下を授け玉ふ、云々とあり。

尾藤知宣（師圭）

初め知定後知宣、通稱甚右衛門後左衛門尉と改む、幼より秀吉に仕へて功あり、天正十五年正月豊臣秀吉の命を以て當國に主たり、豊後の役大和大納言秀長に從ふ、秀長軍を進め高城を攻む、島津兵庫頭後詰として宮部善祥坊の陣に迫る、其防き難きを見て家臣南條玄琢來り救ふ敵見て大軍と爲し敗走す、秀長之を聞き追擊せんとす、知宣諫已止む無幾して島津氏降り秀長高城より戰はすして歸る、豊臣秀吉赤間關（長門）にあり、高松の戰況を聞き知宣の秀長を諫め追擊せしめざるを怒り、天正十六年四月當國の封を奪ひ之を生駒近規に賜ふ、知宣後北條氏に仕へ居りしが天正十八年北條

氏滅び同時に誅せらる。

肥田和泉

政勝と稱す、寛永十九年四月六日水戸お附き英公の大老となり。彦坂織部の上に班す祿六千石、與力三十人、此祿三千石、別に足輕料千石合して一万石を給され、高松城中西郭に居る城代と稱す、承應三年八月十九日歿す、年九十。

政勝は北條家の將、肥田下野守政長の子、東照公威公及英公に歷仕せり。子賴母其子采女政明あり。

平賀源内

源内諱は國倫、字は士彝鳩溪又松籟子、又森羅萬象翁又福内鬼外、無根叟、天竺浪人風來山人、古今獨步我慢坊と號す、幼名を源吉又四方吉と稱す、寒川郡志度村（大川郡志度町）の人なり、幼より讀書算術を好み、資性聰才衆に超ゆ、延享の始齡猶十二の時より既に國益を起し名を竹帛に垂んことを期し、乃ち醫學に志し特に本草の學を研究す、高松藩主松平賴恭之を奇とし擢て藥園係の小吏と爲し月俸四口銀十枚を給す、是に於て源内阿野郡白峯山上に朝鮮人參を移植し、香川郡東濱村に甘蔗を栽培す寶曆十二年致仕して江戸に遊ひ業を田村藍水に受け益物產の學を修む、明和元年火浣布を創製し之を幕府に献す、其他金唐革紅革玻璃鏡等皆其創製する所と云ふ、同七年長崎に遊ひ譯官吉雄等に依り和蘭人に就て和蘭本草の學を修む。偶西洋に越歷電機器あるを聞き考案數日にして之を模造す、此模造せしもの曾孫熊太郎方に收藏せり、人其奇巧に驚かさるなし、是時に當り支那交趾製の陶器多く本邦に輸入し價格太た貴し源内邦價の濫出を憂へ其陶窯釋法に倣ひ多くの陶器を製造せり、抑源内絶世の抱負を行はんとするも事志と違ひ怏々として樂まず、依て世間を愚弄し院本又は小說を作り、以て世人の欣賞を博するを以て平素の不平を慰したり、後門人某に及傷を負はせし事により獄に繫かれしが安永八年十二月十八日獄中に瘦死す、于時年五十二、墓は東京橋場總泉寺にあり、題して智見靈雄居士と云ふ、是れ友人杉田玄伯の建る處なり。

大正十三年二月十一日從五位を贈らる。

源内の享年に就ては縣史には四十八とあれども、人名辭書には五十七とあり、今平賀家に傳る系圖によれば五十二とあり此れが正しかるべし。又死因に就ても諸種の說あれども彼れは少し神經質の人で秘密書類を他人に示す事をいみて居つたが、或時門人が同書を見たので憤怒の餘り劍を拔て其者を斬殺した爲め、牢獄へ投せられ遂に獄内にて憤死したものなりとの說眞に近しと云ふ。著すところ頗る多し、卽ち